
身代わりの君

クレパス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身代わりの君

【Nコード】

N2752R

【作者名】

クレパス

【あらすじ】

婚約者から、付き添っていた人が急病になり、急遽、目の悪い叔母の世話するように言われ、別荘を訪れた夕紀。

約2週間の叔母との生活は、楽しい時間で終わるはずだった。婚約者の慎一郎され現れなければ・・・。

なぜなら、自分は身代わりの婚約者だったから。

芽吹く季節の蒼い木々の匂いが、並木道を手をひいて歩く二人を包んでいる。

女性二人が、ゆっくりと手を取り合って、歩を進めている。その姿は、親子のようであり、また、友人のように仲睦まじい。

「節子叔母様。今朝方まで降っていた雨のせいで、より、木々の緑が鮮やかですよ。」

「そう。匂いからもわかるわ」

一人の女性の小粋な色に染めた白髪が、楽しげにゆれる。目元には濃いブラウンの大きなサングラスをしていた。白い杖を持っていない方の手は、もう一人の女性の肘に添えられていた。

「貴方とこうやって歩く、お散歩にもだいぶ慣れてきたわ。外を歩くって、見えなくても結構楽しいものね、」

「そうですか。そう言って下さると嬉しいです。」

「鳥の囀りや、葉の重なる音、そして自分達の足音……どの音からも生命力が感じられるわ」

「ええ、それに空気の匂いも素敵。」

特に、この並木道は車も通らないので、いい空気ですね」

「でも、最初は、なんて強引な人かしらと呆れたけど……。」

その言葉に、出会った時の事を思い出し、由紀子は口元に笑みを浮かべた。

眼の悪い節子の世話をしていた高崎が急に具合が悪くなり、由紀子はそのピンチヒッターとして、婚約者に頼まれて彼の叔母である節子の世話をするためにこの地を訪れた。

うまくやっついていけるか不安だったが、節子と意気投合し、人里離れたこの地での生活を由紀子は楽しんでいる。

家の前の広い敷地の一角に、シルバーのVolvooのステーションワゴンが止まっていた。

「あら、浩二さんがいらしているみたいですよ」

「そう、浩二君が？近頃よく来るわね。」

「そうなんですか？でも、いつも珍しいものを差し入れて下さるので、

きてくれると嬉しいですね」

「……………」

ゆっくりと家の玄関に続く階段に節子が一段足をかけた。音がした訳でもないはずなのに、ドアが開いて男が出てきた。

「おかえりなさい。今、探しに行こうかと思っていたんだよ」

細面の涼しげな目元、少し茶色がかった髪の毛、穏やかな笑みを顔一面に浮かべて、ゆっくりと階段を下りてきた。

高崎の息子の浩二だ。

近所という事もあり、父親が倒れて不便をしているだろうと、節子と由紀子を気にかけてくれて、事あることに訪ねてくれる。

「浩二君。いつ来たの？」

「今来たばかりですよ。夜釣りで大量だったので、美味しいお魚をお二人に食べて頂こうかと思って……。」

「ユキちゃん、魚さばけるの？」

「少し、苦手です……。」

「ユキちゃんが負担に思わないように、もちろん調理もさせて頂きますよ」

節子は、浩二の言葉に、由紀子への想いを感じられた。

浩二は節子をゆっくりと抱きかかえるように、家への階段を昇っていく。

細身の浩二には、節子は少し重いのではないかと、その後ろ姿を、少しハラハラしながらみていた由紀子は、玄關の前にたどりつき、そっと節子叔母がドアの前に立った時には、ホッとため息がでた。

「何？そんなに危なっかしかった？」

「ううん、そんなことないけど、もし……」

先を続けるのをためらった。

もしかしたら、浩二に失礼になるかもと思い、由紀子はハッと言葉を止めた。

浩二は面白そうに由紀子を覗き込んだ。

「支えきれないかも？それとも転んだら？どっちを言おうとした？」

バツが悪そうな顔で、由紀子は謝った。

「ごめんなさい。だって、浩二さん細いんだもの。」

「いくら細いからって、俺だって男だよ。」

節子叔母さんぐらいどっつてことないし、

もちろん君だって抱き上げることぐらい出来るさ」「

その言葉に、由紀子は真っ赤になる自分を感じ、

浩二に見られないようにとっさに俯く。

浩二はそんな彼女を見逃さなかった。
自分の言葉で、赤く頬を染める由紀子が好ましかった。

二人に節子の声が響いた。

「いつまでも、年寄りをこんなところに立たせておくつもり？
早く玄関を開けて、中に連れて行ってちょうだい」

大きなサングラスに隠れては気付かないが、
節子の表情に、複雑な思いが浮かんでいたのを二人は気付かなか
った。

1 (後書き)

少し補足を入れてみました。

初めてお読みいただける方が少しでも、

分かりやすく読んで頂けると嬉しいのですが・・・。

玄関のドアを開けると、電話が鳴っている。

浩二が慌てて電話に駆け寄った。

「はい。ああ慎一郎さん。お久しぶりです。

ええ、大丈夫ですよ……。ええ、代わりましょうか？」

由紀子に手を取られて連れられ、

リビングのソファに腰をかけた節子に受話器を渡した。

「慎一郎さんからですよ」

甥の慎一郎からの電話に、節子は嬉しそうに受話器に耳を寄せ、声を弾ませた。

「慎一君、いつになったらこっちに来るの？」

その話し声を緊張した面持ちで聞いていた由紀子は、思いついたように立ち上がった。

「ちょっと外に忘れ物をしてきたから、とってきます」

小声でもごもご言いながら、足早に玄関を出ていった。

婚約者から電話だというのに、それから逃げるかのような由紀子の行動に

浩二は首を傾げる思いだ。

節子は、由紀子の声が聞こえなかったのか、電話に向かって弾んだ声で話し続けている。

「そう。わかったわ。あ！代わるわね。」

節子は受話器を押さえながら叫んだ。

「ユキちゃん！！ユキちゃん！浩二君、ユキちゃんは？」

由紀子の返事がなく、かわりに浩二が返事を返してくる。

「叔母さん、彼女は忘れ物をしたとかで外にいったよ」

「あら？そう。慎一君、由紀子さんはちょっと外に出かけちゃったのよ。」

後でかけるように言いましょうか？

ええ、わかったわ。ええ、伝えるわ。じゃあね」

節子から受話器を受け取りながら、浩二は何気ない口調を意識した。

「慎一郎さん、いつ来るんですか？」

「それが、当分は来られないらしいのよ」

「来られない？」

「ええ、仕事が忙しいらしくて……。残念だわ」

「そうですか。」

浩二はホツとした気持ちが言葉に現れなかったかと節子の表情を伺った。

リビングのドアが開いた音で、由紀子が戻ってきたのに節子は気付いた。

「どこに行ってたの？」

少し、非難めいた口調で節子が聞いてきた。

「叔母様のステッキを外に忘れていたので……。」

「そんなの、後でもよかったのに。慎一君からの電話、もう切れてしまったわよ」

「そうですか……。で、彼はなんて？」

由紀子の口調が、恐る恐るといった感じに浩二は受けとれた。

「仕事が忙しくて、当分来れないんですって。」

その言葉に、なぜか由紀子は安心したようにホッとした表情を見せている。

「そうですね。お仕事なら仕方ないですね。」

慎一郎さんしか出来ない事が多いですもの。」

「だからと言って……。」

「でも、彼がいない分、それだけ早く叔母様と仲良くなれた気がします。」

「それもそうね。あの子がいたら、婚約者を一人占めに出来なかったわよね。」

ユキちゃんとはべったり時間を過ごせなかったわね。」

「……ええ……。」

由紀子は慎一郎が来れない事を残念と思っていたのかの様子だ。

だが、この事に気付いているもの、浩二だけが、

訝しげに思いながらも口にするつもりはない。

「さあ、釣ってきた魚は、半分は刺身に、半分は天麩羅にしてみようか。」

「お刺身に天麩羅！私大好きだわ。」

ああ、でもまた、太ってしまうわ。」

由紀子の若い女性らしい悩みの少し困った口調が微笑ましいと節子は感じた。

「ユキちゃんはそんなに太るのを気にしているの？」

「もちろんです。でも食べるのは大好きなので、痩せれないんです」

「ユキちゃんは太ってないよ。」

「浩二さん、ありがとう。でも、慰めてくれなくてもいいのよ」

「いいや、僕は、痩せている女性より君ぐらい少しぽっちゃりしている女性の方が

好みだな」

浩二の言葉に、一気に顔が赤くなった。

節子はその浩二の言葉が気に入らなかったが、声を荒げるような事はしなくなかった。

「私も、貴方の手が大好きよ。柔らかくて安心するわ。

きつと慎一君もそう思っているわよ」

その言葉に、由紀子と浩二はギクリと節子を見た。

サングラスの下の瞳はまるで、二人の様子が見えているのだと言わんばかりの微笑みを浮かべていた。

「ユキちゃん。貴方の良さは慎一君が一番分かっているわ。

なんと言っても、婚約者なんだものね」

「ええ……」

節子の、得意げな口調に、浩二は口をつぐみ、
由紀子は、辛うじて小さな返事をし、頷く事しかできなかった。

椅子からゆつくりと立ち上がり、窓辺に近寄ると眼下に伸びゆく高速道路が見える。

いつものように車が数珠つなぎで走っており、ところどころ渋滞が発生しているようだ。

35階の窓からは、山も海も見えない。

山裾に建てられた別荘に住んでいる叔母に

一瞬、気持ちが取られ、電話をかけた。

節子叔母の弾んだ元気な声がうるさいぐらいだった。

受話器を置いた慎一郎は、叔母と由紀子が思いのほか仲良くやっている事にヤレヤレとひとまず安堵した。

急にかかってきた高崎の電話から始まる一連のこの出来事が、事なきを得た現状にホツとした。

目の不自由な節子の面倒を一手に引き受けている高崎が、急に持病の腰痛がひどくなり、
2週間の入院を余儀なくされた。

2週間、いやそれ以上になるかもしれない。
そのあいだ、一人で暮らすのは難しいだろう。

すぐに人の手配をと連絡したが、他人を家に入れたくないと節子は頑なに拒む。

それならばと、慎一郎は、ある提案を持ちかけた。

「俺の婚約者を行かせるよ」
「婚約者？ 慎一君、婚約したの？」
「ああ、ちよつと前にね」

電話の向こうで沈黙が広がっている。

「何？ 喜んでくれないの？」
「え？ ああ、あなたが、結婚するとは思わなかったから少しびつくりしちゃって。」
「・・・そうね。おめでとう。それで、どんな女性ひと？」
「ありがとう。美人だ。彼女を手伝いに行かすよ」

「美人ってそれだけ？」

「他になんて言えばいい？それだけで充分さ。」

電話の向こうからの、節子の無言の非難が伝わってくるようだ。

「とりあえずは、彼女が少しは助けになると思う。」

「でも……。初対面の人に、悪いわ」

「いや、そんなことないさ。これから、親戚としてつきあっていくんだ。」

叔母さんが困っているのだから手伝うのは、当然だ」

戸惑っているのが感じられる。

「それに、一人だと危険だよ。」

誰かに、手伝ってもらわないといけないんだから、

この機会に、由紀子と会うのはかえっていいと思う」

「ユキコ？婚約者はユキコさんと言うのね。でも、彼女は行くって言うているの？」

「心配ない。彼女は必ず行くよ」

節子にはしぶしぶながらも納得させた。

次は由紀子だ。

大きなため息をついた後、再度、電話を耳に当てた。

3 (後書き)

出てきました。

この男、なんていうか……。

結構、ひどい俺様かも？

お話をぐっと進める予定です。

よろしければ、お付き合いください。

叔母との電話を切った後、すぐに由紀子を会社に呼び出した。

彼女とは、数ヶ月前にパーティで出会い、最近、結婚の約束をした。

慎一郎は、由紀子が、自分の結婚相手として、

手を煩わせたりしない種類の女性であることを初めて会った時から感じ取っていた。

彼女が何に一番重きを置いていて、それを得るためなら、

何でもするだろうという事を。

まさしく、彼女は、自分が良く知っている類たぐいの女性だった。

「叔母を手伝ってほしい」

お願いともとれる言葉だが、

有無を言わせない、人を従わせることになれた者のいい方だという事に

慎一郎は全く気付いていない。

由紀子が、返事を返すのに、とまどっている。

「叔母様？お話を聞いた事がなかったわ」

「ああ。少し離れた別荘に住んでいるからな。

いつもは通いの人が助けてくれていたんだが、急病で入院した。出来るだけ早く行ってほしい。いつ行ける？」

「別荘って……。。向こうに滞在するの？どれくらいの間、お手伝いするのかしら？」

「2週間ぐらいだろう」

「2週間……」

「何か不都合があるか？確か、仕事はしていなかったよな」

「……親にも承諾を得ないといけないし……」

「ご両親は、俺の親戚の世話をする事に、反対はしないはずだ」

慎一郎は由紀子の両親がもろ手を挙げてこの結婚に賛成していると彼女から聞いていた。

「俺は仕事があっていけないかもしれないが、君は行ってほしい」

自分と結婚したければ、由紀子はYESというしかないだろう。

そして、由紀子がNOというはずがないのを、慎一郎は分かっていた。

それなのに、ぐずぐずと返事をしない事に彼は苛立ってきた。

「手伝わって……。私のようなまだ、お目にかかった事のないものが
お傍にいるより、2週間ぐらいなら、お一人で生活できると思うけど……。」

「ああ、言っただけだったな。叔母は目が不自由なんだ」

「目がお悪いの？」

「ああ、まったく見えなくていい訳じゃないが、人の手をかりないと生活するのに不自由な状態だ」

由紀子の今までの難しい表情が、考え込んだ物へと変化した事に
慎一郎は見逃さなかった。

「……じゃあ、人の顔もあまり見えないの？」

「そうだな、ぼんやりとした輪郭というか、それぐらいなら分かるが、

かなり近づいても、見えていないと思う」

「……そう。それじゃ、ご不便ね。」

「……私、お手伝いに伺うわ」

さっきの由紀子の表情と、急に叔母の所へ行く事にいい返事をした
のが、

不思議だったが、それよりもこの話がやっと終わる事が何よりだと
慎一郎は、すぐに今後の事を事務的に伝える。

「叔母には連絡しておく。住所はこれだ。」

出来れば、明日夕方までには到着するように。

それじゃ、俺はこの後会議だから、
必要なものがあつたらこれで買つといい」

ポンとクレジットカードと住所を書いたメモを手の平に乗せ、
由紀子の腰を抱き寄せた。

由紀子も慎一郎の首に手を回す。

濃厚なキスが交わされた後、そのままの体勢でウツトリと由紀子は
見上げてきたが、

慎一郎は彼女の手をあつさりと首から外した。

「頼んだぞ」

振り返りもせず言葉を残し、部屋を出ていった。

由紀子が別荘へ向かって数日が過ぎた。

慎一郎は、クルクルと椅子を揺らしながら、外の景色を眺める。

太陽が、向かいのビルの窓ガラスに反射して、眩しい。

思わず目を細めた。

懐の深い慣れた高崎と違い、若い由紀子がどこまで叔母の面倒を見れるか
半信半疑だったが、予想以上に頑張っているようだ。

叔母も、慎一郎の婚約者に対して、遠慮もあるだろうし、2週間と思えば、二人ともなんでも我慢できるのだろう。

それにしても、叔母の由紀子に対する評価が
思いのほか高い事に、慎一郎にとっては意外というほかない。

由紀子は思ったより、家庭的だったのかもしれない。

彼女と結婚していく上で、全く期待していなかった部分であっただけに
嬉しい誤算といえいいだろうか？

自分の人物評価も当てにならないと口元を歪めて笑う。

仕事の都合をつけて、叔母の別荘へ顔を出すつもりになっていたが、
二人がうまくやっているようなら、その必要もない。

由紀子とは、叔母の家に行く前日に話したきり、連絡していないが、
叔母が不満を言っていないのだから構わない。

携帯で連絡でもと思ったが、電波状態が悪い地域に叔母は住んでお
り、
別に無理をして話す事もない。
何かあれば、彼女から叔母の家の電話で連絡を取ってくるはずだ。

由紀子に指輪は渡した。

だが、仕事上では何度か会ってはいるものの、
結婚に関してはまだ、彼女の両親との正式な顔合わせもしていない
し、
仕事関係者にも、話していなかった。

由紀子は一日でも早く、公式発表をしてほしいと再三、ねだっていたが、仕事が忙しく、後回しにしていた。

だが、叔母の世話がとうまくやれてかえってきたら、褒美のかわりといつては何だが、話を進めてやるべきだろう。

こんなに、叔母とうまくやれるなら、由紀子をたびたび手伝いにかせば、

高崎も少しは楽になるはずだ。

だが、メディアへの婚約発表や周囲への通達など、また、厄介なことに時間を取られるかと思うと気が重かった。いつそ、そんな事は飛ばして、籍だけ入れようか。由紀子のあからさまにがっかりした顔が目につかぶようだ。

まあ、周りがお膳立てしてくれれば、自分はそれに乗るだけだ。

「監督、会議のお時間です」

会議の始まりを告げにきた秘書の声で、

今まで頭の中で考えていた内容が一瞬で切り替わった。

今日の会議は、各方面から持ち込まれた台本に目を通し、どのオフ
アーを受けるか、

または、自分があたためていた本にするか、チームで検討する予定
だ。

新しいチャレンジに、慎一郎は気持ちがワクワクし、由紀子の事など
頭の片隅にも残っていなかった。

5 (後書き)

うわ！嫌な奴！

慎一郎の独白です。

書いている本人がそう思うのですから……。

彼に我慢頂ける方、是非、お付き合いください。

陽気につられて、少し遠くまで歩いた。

暖かな優しい日差しの中、節子と二人で歩くと

由紀子は自然と心がまるやかになってくる、そんな気持ちを感じていた。

きつと、母親と散歩するというのはこんな感じなのだろう。

大人の女性同士として、母親と接する事が出来なかった由紀子は、この時間を大切に思った。

「叔母様、高崎さんから、今朝お電話があつて、

あと1週間もしたら、退院できそうだって仰ってましたよ」

「そう。経過はよさそうだった？」

「ええ、でも、まだ、ベッドから出るのは難しいらしく、

特別に病室まで電話を持ってきてもらったんですって」

「じゃあ、退院しても無理させちゃダメね」

「ゆっくり元の生活に戻していけばいいと思います」

「そうね。でも、高崎がかえってきたらユキちゃんは帰っちゃうのね」

「……ええ……。」

「それも、寂しいわ。もうしばらくいればいいじゃない？」

「それは……。そういう訳にもいかないし……。」

由紀子も節子から離れるのは寂しかったが、いつまでもここにはいられない。

「確かにいつまでもユキちゃんを独占する訳にはいかないわね。慎一君に悪いものね。」

「そんな事はないと……でも、もう少し先の話です。まだ、しばらく叔母様のお傍にいますよ」

「そうね。今からしんみりする必要ないわね」

「お腹がすきませんか？昨日浩二さんが持ってきてくれたおいしいおうどんをお昼は茹でましようか？」

「あら、昨日、浩二君来ていたの？」

「ええ、叔母様がお昼寝している間に」

「そう……。」

急に黙りこんだ節子叔母が心配になった。

「すみません。歩き過ぎて疲れてしまいましたね。」

浩二さんに迎えに来てもらいましょうか？」

「迎え？」

「ええ、この地域でも電波の入りやすい携帯をかしてもらったんです。」

何かあつたら心配だからって……。」

「浩二君が……。」

「はい。迎えに来てもらいます？」

「いいえ。大丈夫よ。これくらい何ともないわ」

「そうですか？無理をなさらないでくださいね。」

遠慮せずいつでも、呼んでくれればいって浩二さん言ってくれ

ているので」

「……………」

「浩二さんて本当に優しいですよね。いつも叔母様の事を気にかけて下さって」

「私の事ね……………」

高崎の息子の浩二が良く気が付く、優しい性格の持ち主だというのは分かっている。

表情が穏やかで、すぐに誰とでも仲良く慣れる、そんな気質だということも

節子は承知している。

だが、由紀子が来てから、浩二の顔を見せる頻度が多いのも事実だ。毎日、いいや、日によっては午前午後と立ち寄る事もあった。

節子は複雑だった。

浩二の気持ちを確かめた訳ではなく、推測で物を言う訳にはいかない。

慎一郎は何をやっているのだろう。

節子は大きく首を振り、由紀子が浩二の想いに気付かない事を祈った。

「早く帰りましょう。お腹すいたわ」

「あ、ごめんなさい。そうですね。じゃあ少しだけ急ぎましょうか？」

由紀子はそう言ったものの、目の悪い叔母が転びでもしたら大事だ。叔母の身を案じ、歩調を早める事はしなかった。

家に帰り、昼食をとった後、由紀子は電話をかけると外に出ていった。

きっと慎一郎に電話をするのだろう。
家にある電話を使えばいいのに。

この1週間、由紀子が電話で慎一郎と話しているのを見た事がなかったが、

きっと自分の見ていないところで電話しているのだろう。
人に聞かれたくない気持ちはよくわかる。

婚約時代には、二人だけの甘い会話を交わしたいはずだ。

そう思うと、少しホツとする。

慎一郎が甘い言葉を囁いているのを想像するのは難しいが、由紀子となら分かる気がする。

彼女の控えめだが、耳に心地よい落ち着いた声。

聞いているだけで、彼女の人柄が優しいものだと分かる。

その声、そして彼女の手の温もりは、人を安心させ幸せな気持ちにさせる。

節子は慎一郎にとって、二人とない人を得たとこの数日で彼女の人柄を理解し、甥の今後の人生に安堵していた。

節子は少し昼寝を取ろうと、寝室へ戻った。

由紀子がここへ来てから、午前のお散歩が日課となり、食欲もわき、小一時間のお昼寝が一日のサイクルに組み込まれるようになった。

午後からも、由紀子と楽しく話をするので、夜もよく眠れる。

高崎との穏やかな日々慣れて、変化を嫌っていた節子は、由紀子という新しい風に吹かれ、気持ちも体も前向きになった気がしていた。

自分が外に出ていた時間が思いのほか長かったと知り、

由紀子は走って家に戻った。

自分の持っている携帯では、かなり離れた場所へ行かないと電波が安定しない。

でも、どうしても連絡を取らなければならなかった。

今の状況をお互い共有し、辻褄を合せておかなければ……。

家に戻り息を落ち着かせた途端、ドアベルが鳴った。
きつと、浩二だろう。

最近、この時間に浩二が訪ねてくる事が毎日の日課のようだった。

彼は翻訳を生業としている為、時間を自由に使えるらしく、
浩二いわく、この時間はちょうど、気分転換の時間らしい。
話し相手を求めて、由紀子をちよくちよく訪ねてくる。

「こんにちは」

「いらっしゃい」

リビングのソファまで案内するなり綺麗にラッピングされた物を
由紀子に差し出してきた。

「はい、これ」

少しびっくりしたが、わくわくしながら丁寧なラッピングをほどくと
以前、由紀子が話していたのを覚えていてくれたみたいだ。

「これ、私の大好きな料理研究家のエッセイね」

「うん。今朝、街の本屋に行ったら発売されていてね。」

ちょうどいいと思って買って来たんだ」

「嬉しい。前に話したのを覚えていてくれたのね。

発売は知ってたんだけど、今日だったんだ。忘れてたわ。お支払いするわ。少し待ってて」

由紀子が財布を取りに行こうとすると

浩二はその手を掴み引き留めた。

二人はハツと見つめあった。

驚きの中にも、親密な雰囲気か二人を包む。

浩二は、由紀子の手をギュッと握り、引き寄せようかと少し力を入れたが、

残念そうに口元に笑みを浮かべ、由紀子の手を名残惜しげに離れた。

「お金はいいよ」

「でも、悪いわ」

「これぐらい、どっつてことないさ」

由紀子は少し迷ったが、ありがたく本を受け取ることにした。

そして、今の浩二の行動で、自分が動揺していると悟られないように言葉を続けた。

「お礼と言っては何だけど、今朝クッキーを焼いたの。

一緒にいかが？」

「君の手作りのお菓子かぁ……。すごくおいしいのを知っているだけに残念！」

食べたいのはやまやまなんだけど、今から仕事で出かけないといけないんだ」

「そうなの？じゃ、これをわざわざ持ってきてくれたの？」

「早くユキちゃんに渡したくてね」

その言葉に、由紀子は満面の笑みを浮かべた。

浩二は、由紀子がここの生活に不便を感じないようにと何くれと無く、彼女を気遣ってくれる。

彼のその気持ちが嬉しい。

きつと自分の父親が入院した事を、気に病んで、自分と節子の役に立とうとしてくれているのだろう。

浩二はその笑顔に見とれた。

さつきは、自分から離れて行こうとする由紀子を引き留めたくて、無意識のうちに、彼女の手を掴んでいた。

自分が彼女の笑顔にどれだけ気持ちが暖められているか。その笑顔を自分だけの物にしたいとどれほど思っているか。今の自分の立ち位置が齒痒くて仕方なかった。

この出会いが嬉しくもあり、また、やりきれなくもある。

「ありがとう。嬉しいわ」

浩二はその言葉と笑顔で満足しなければと自分を納得させ、ニッコリと彼女に頷いた後、家を後にした。

浩二の背中がドアの外に消えるまで見送り、暖かい気持ちで由紀子の心を満たした時、それを蹴散らすような低い声が聞こえた。

「じつやってあいつを弄んで、ここの生活を楽しんでいたのか」

その声とともに、由紀子のウェストに太い腕が絡みつき、覆い被さるように背中から抱きしめられ、耳たぶを甘噛みされた。

由紀子はその感覚に体をぶるつと震わせながら全身が凍ってしまったかのように、息さえも出来なかった。

7 (後書き)

こんなタイミングで現れるとは……

ベタすぎでしょうか？

ベタすぎですよね……。

まだまだ、踏んでいきたいと思えます。

そして！多くの方に立ち寄り頂きありがとうございます。
ほんと、驚いています。

良ければ、これからもお付き合い頂けると嬉しいです。

いつになったらやってくるのかと、

叔母からの度重なる催促の電話がうっとおしかった。

仕方がないと、仕事を何とかやりくりし、

慎一郎は、少しの時間をみつけ、叔母のいる別荘を訪れた。

ちよつと、顔を見たらすぐに仕事に戻らなければ。

別荘の裏手にある、空き地に車を止めた。

玄関のドアベルを鳴らしても誰も出てこない。

合鍵で家に入ると、叔母と由紀子の姿がリビングには見えない。

出かける事はないだろうと思ひ、中2階の叔母の寝室をノックをして開けると

ベッドで横になって寝ている。

具合でも悪いのだろうか、一瞬、心配したが、

気持ち良さそうにぐっすり寝入っているだけのようだ。

叔母に昼寝の習慣があったとは、知らなかったが、起こす気など毛頭ない。

由紀子はどこに行ったのだろうか？

そう思っていると鍵が開く音が聞こえた。

叔母の部屋から出て、入ってきた人物を確かめる間もなく、すぐにドアベルが鳴った。

「こんにちは」

「いらっしやい」

その男の声に慎一郎は、聞き覚えがあった。

浩二だろう。

だが、女の声は？

由紀子のほかにこの家において、人を迎える事の出来る人物は思い当たらないのに、

声に馴染みがなかった。

あんな温かな人を包むような声だっただろうか？

彼女の声はもう少し高くて細い声だったと思う。

丸太作りのこの高い家の天井に声が少し反響して、確信を得ない。探った方がいいとそこに留まり、腕を組んで階段の壁にもたれなが

ら、
階下を伺う。

やはり浩二だった。

だが、女は自分に背を向けている為、顔が分からない。
由紀子のはずなのに、何となく違和感を感じた。

髪型のせいだろうか？

叔母に好印象を与えようと、髪型を変えたのか？
いつもは、ゴージャスな栗色の巻毛が彼女のスタイルなのに、
いまは、肩口を越えたあたりの、真っ黒のストレートヘアだ。

着ている服も、いつも彼女が好んできているお気に入りのブランド
服ではないようだ。

デニムにカットソーという、動きやすい機能性を重視した服だ。

由紀子にしては、殊勝な事だ。

そこまでして、叔母に気にいってもらい、
自分と結婚したいと思ってくれているとは……………。

思わず口元を歪めた。

聞こえてくる話の内容から、浩二が彼女に好意を寄せているのはすぐに分かった。

由紀子は、浩二が今までに接した事のない、種類の女性だ。

浩二も美人には弱いらしい。

浩二のニコニコと笑う顔を見ながら、あいつもただの男だなどやれやれと首を振る。

だがやはり、違和感が残る。

あの女は本当に由紀子なのだろうか？

浩二がとっさに女の手を握った事で、浩二の想いははっきりした。

女の方も、悪い気はしていないようだ。

手を振り払わないのがその証拠だ。

眼下で繰り広げられている、中学生もどきの

恋愛ごっこに声を出して笑いたくなった。

「早くユキちゃんに渡したくてね」

浩二の言葉で今までの自分の違和感が払拭された。

慎一郎は、こんなに相手の事を覚えていない事に、

結婚するというのに、この程度のものだと自分でも呆れた。

それ以上に、由紀子が自分を【ユキちゃん】と呼ばせている事に笑いを堪えるのに必死だった。

浩二相手にこんな遊びを由紀子はしていたのだ。

あの由紀子にかかれれば、世間知らずな浩二などひとたまりもないだろう。

浩二が由紀子の自尊心をくすぐってくれて、こんな田舎で、叔母の世話をする事にも我慢できたのだろう。

浩二に感謝したい。

今回の滞在がうまくいったのは、彼のおかげかもしれない。

慎一郎は人の悪い笑みを浮かべてこの後の展開を見続けた。

B級映画を見ているかのようで面白い。

やはり、作りものは真実には勝てないらしい。

次回作の参考にでもするか……。

すぐにでも、声をかけてやるべきかもしれないが、浩二の面子をつぶすのも忍びない。

別れを惜しむように浩二が去る背中を由紀子が見送っている。

そこまで演技する必要もないだろうと
見ているこっちが馬鹿らしくなってきた。

ゆっくりと階段を下り、由紀子の背中に声をかけた。

「こっやってあいつを弄んで、ここの生活を楽しんでいたのか」

彼女の体に腕を回し、その首筋に唇を這わせた後、耳たぶを軽く噛んだ。

彼女の体は、こんなに柔らかかで、抱き心地がよかつただろうか？
耳元から香ってくるのは、いつもの香水ではなく、
ほんのりと清涼感のある、清潔な香だった。

そして、何よりも自分に抱かれて固まっている反応が由紀子にはあり得なかった。

きつと由紀子なら、悪戯が見つかったとばかり

にっこり媚びた笑いで見上げて、自分の首に手を回し、キスの一つもしてくるはずだ。

別人だ。

二の腕を掴んで、グイッと振り向かせた。

「！」

目の前にいるのは、婚約者の由紀子ではなく、初めてみる女性だった。

8 (後書き)

慎一郎って奴は……。

彼にまだ、我慢頂ける方、よろしければ、お付き合ってください。

右腕を痛いぐらい掴まれ、くるりと振り向かされた。見上げるほどの男性が、驚きを伴った、だが、威嚇するような眼で自分を睨みつけている。

「君はだれだ？」

その静かだが、人を震えあがらすには十分すぎるほどの低い声が体に響く。

急な事に驚き過ぎて、何も言えずにいと、むんずと両手とも肘のあたりを掴まれた。

小柄な自分を持ち上げんばかりの握力だ。男の力に、由紀子は両腕に痺れるような痛みを感じた。

「君はだれだ？」

同じ質問を繰り返される。やはりその声に震えた。

一段と低く静かな声がリビングを揺るがしている様に感じる。

「は、離して。あなたこそ、誰？」

「俺か？」

「そうよ。無断で人の家に入って、警察を呼ぶわよ！」

由紀子は負けじと、声の震えを隠すように大声で叫んだ。

「警察か、それも面白いかもしれないな。

呼んでみればいい」

目の前の男は、由紀子の言葉にひるみもせず、馬鹿にしたように笑っている。

男は、由紀子がそんな事ができるとは思ってもいない風だ。カツとなって、先ほどよりも大きな声で叫んだ。

「離して。早く出て行って。本当に警察呼ぶわよ！」

由紀子はこの男が、凶悪な人物なら、まず自分が真っ先に危険にさらされるといつのに、節子の事を心配した。

節子を守らねば。

彼女が目を覚ます前に、この男を家から追い出さなければ。目の悪い節子とでは、逃げる事もままならない。

男は、口の端を挙げたまま、両手をパツと離れた。

その途端、由紀子は電話の所へ走っていき、受話器をとった。

震える指で、電話のボタンを押そうとした時、叔母の声が聞こえ、階段の手すりに手をかけて、降りてこようとしているのが見えた。

「ユキちゃん、何かあったの？寝室まで大声が聞こえたけど？」

ああ、最悪の事態だ。

由紀子は、パニックに陥りそうになり、叔母にかける声も震えていた。

「叔母様！お、降りて来ては」

由紀子のその声を遮るように男の少し微笑んだ口元から、叔母に向けて、声をかけていた。

「叔母さん、遅くなりました。」

その声に節子はパアっと顔を輝かせる。

「慎一君」

由紀子は啞然として、男を見つめた。

「?.....!」
.....『慎一君』.....

まさか、目の前にいる、この男が国枝慎一郎だなんて.....。

節子の嬉しそうな声が、ただ、ぼんやりと聞こえてくる。

「来れないと言っていたのに、急にどうしたの？」

節子は、慎一郎に手を取られてゆっくりとソファに腰を下ろした。

「大事な女性二人をほったらかしにするのが忍びなくて、仕事をやりくりして来ました」

「ほんと、婚約者をこんなところに一人で寄こして知らんぷりだなんて、

愛想を尽かされるわよ。ねえ、ユキちゃん」

慎一郎は、呼び名をおかしそうに復唱した。

「ユキちゃん？」

「ええ、来てすぐにそう呼んでほしいと言ってきてね。

私も《由紀子さん》と呼ぶより、こっちの方が彼女にピッタリだと思っわ」

慎一郎は皮肉っぽい笑いを口元に浮かべているが、

節子はもちろん気付かない。

「ふうん、そうなんだ。それで、俺は愛想を尽かされたのかな？」

由紀子は、まだ、この事態に対応できていなくて、
慎一郎の皮肉には気付いていたが、何も言い返せないで、
唇をギュッと噛みしめていた。

「叔母さん、来たばかりなんだけど、彼女と少し出かけてきていいかな？」

「出かけるの？」

「ああ。俺が来るのも言っていなかったし、きっと何か話したい事があるだろう。」

「いいかな？」

聞くなり、節子叔母は嬉しそうに手をパチンと叩いた。

「そうね、私ったら気が利かなくてごめんなさい。

久しぶりに会えたんですもの。誰にも邪魔されずにいたいわよね。
大丈夫よ。どうぞ、二人で出掛けていらっしやい」

顔を二人に向けてにつこり笑っている。

「いえ、そんな・・・でも・・・お一人では危ないし・・・」
「すぐに戻ってくるつもりだけど、大丈夫？」
「ええ、もちろんよ。私は平気よ。」

慎一郎の嫌に優しい声が、かえって怖い。
叔母はそんな事は少しも思っていないのだろう。
二人を送り出すことに必死だった。

「でも、何があるか・・・」
「大丈夫よ。私の事は気にしないでいいのよ。ほら、早く行きなさい。」
「ありがとう。じゃあ、ちょっと出てくるよ。」

これ以上、何を言っても無駄だと思った。

それに、こうやって、国枝慎一郎と顔を合わせた以上、
今は避けては通れても、すぐにこの局面に立ち向かわないといけな
い。

覚悟を決めた。

「それじゃ、戸締りしていきますから、気をつけて下さいね」
「二人で、ゆっくりしていらっしやい。
少しぐらい、遅くなくても構わないわよ。何なら、今日は他に泊ま

「つてきても」

叔母の大胆な発言に由紀子はギョツとしたが、
慎一郎は平気な顔で、聞き流している。

色めいた笑顔を浮かべた叔母の嬉しそうな声に後押しされるように、
由紀子は上着を手にした。

慎一郎が自分に掌を差し出した。
そのおおきな手をじっと見つめた。

その上に鍵をポトンと落とし、彼の後を重い足取りでついていった。

数歩先を歩いていく男、国枝慎一郎の後ろ姿にじっと視線をとめたまま、

彼の本当の婚約者である『由紀子』を名乗ってこの場にいる事になった経緯を

どのように説明すべきか、考えが全くまとまらないまま、後をついていく。

だんだんと頭が痛くなってきた気がした。

こんなはずじゃなかったのに……。

思わずコメカミに指を当てていた。

半年前だった。

ルームシェアをしている従妹の由紀子が踊るように帰って来た。

「聞いて、夕紀^{ゆじき}。とうとう出会ったのよ」

図書館で借りてきた本から視線を上げた。

いつになく、上機嫌でパーティから帰ってきた由紀子を見ると今日はいつもより特に念入りに化粧をしていた。

ぱつちりと二重の大きな瞳は、つけまつげ、アイライン、シャドーとアイメイクにより手をかけて、その瞳はいつもの1.5倍は煌めいて見える。

きめ細やかな白い肌は、何もつけていないかのような見事な仕事ぶりで、薄化粧風に仕上がっている。

少し薄めの唇は、きつめのパールレッドのリップが落ちることなく、口角を上げて形作られており、艶^{あで}やかな雰囲気を醸し出している。

完璧だと思った。

そこらの女優よりはるかに綺麗だった。

その上、プロポーションも抜群だ。

背中が腰のあたりまで大きく開いたバーガンディ色のドレスがピッタリと体に張り付いて、彼女の形のいい胸と細いウエストを強調している。

12?のピンヒールがよりスタイル良く見せて、後ろスカートのセンターに、きわどく入ったスリットが脚線美をあられもなく見せている。

今日のパーティーは余程、重要な集まりだったのだろう。
いつになく、気合いが入っていた。

きっと、男性の視線を釘付けにしていた事だろう。

「誰と出会ったの？」

「将来の旦那様よ」

「旦那様？結婚するの？」

「そうなるかもしれないわね」

由紀子は嬉しそうにしているが、

それ以上は話すつもりはないようだ。

だが、かなり真剣に考えている事がわかる。

夕紀は、中学生の時、両親を事故で一度に失い、
建設会社を経営している叔父家族に引き取られた。
住み慣れた家と生まれ育った土地を離れ、親を亡くした悲しみと喪
失感も

消えないうちに、新しい生活をはじめてなくてはいけなかった。

それまで、活発だった夕紀は自然と叔父や由紀子の顔色をうかがう様になり、息をひそめるように生活していた気がする。

叔父夫婦は、一人娘の由紀子を溺愛していた。その光景を見るにつけ、いつも、布団にもぐって声を殺して泣いていた記憶しかない。誰に頼ることなく、誰に甘えることなくただ、時間が過ぎて行くのをじっと待った。

両親の死亡保険金で、大学を卒業した後、在学中に取得した司書の資格をいかして隣の県の図書館に勤めた。

叔父の家を出て、一人暮らしを始めた時は、やっと深呼吸ができた感じだった。

手足が爪の先まで、伸びた気持ちだった。

叔父の家での肩身の狭い思いをしていた事を考えると、誰に気兼ねする事のない生活は、叔父の贅沢な作りの家より、ずっと天国だった。

仕事も楽しかった。

優しい穏やかな人たちに囲まれ、たっぷりと本を読める環境にいられるのは、夕紀にとって何よりだった。

仕事にも慣れ、だんだんと責任のある仕事を任された時だった。

3つ下の由紀子の大学卒業と同時に呼び戻されてしまったのは。

11 (後書き)

遅くなりました。

今更ですが、やっと、ネタばらしとなります。

筋が分かりづらいかもしれません。

文章力のなさを痛感していますが、

よろしければ、お付き合いください。

今、いろいろな気持ちを持ちながら、投稿させて頂いています。

多くの方が、それぞれの思いを胸にお持ちになりながらも、

目をとめて頂き、お気に入り登録まで頂けて、本当に嬉しいです。

これを、励みに、お話を途切れないように続けていききたいと思いま
す。

ありがとうございます。

由紀子が家を出て、一人暮らしをしたいと言いだしたのだ。

叔父にしては、珍しく首を縦に振らなかった。

だが、娘の泣き落しに負けた叔父は、夕紀と暮らす事を条件に、しぶしぶ、家を出る事を許した。

叔父の家の近くのマンションにルームシェアをすることをいつのまにか

強硬に決められていた。

「叔父さん。やっと、職場にもなれたの。

今の仕事を辞めたくないわ」

「私が、区の図書館に口をきいてあげるよ。

図書館なんて、どこも同じさ。マンションの部屋代だって払ってやるんだ。

そし、何より、親が死んで、面倒を見てやった恩を返す頃じゃないか？」

叔父の執拗な説得にも頷くまいと頑張ったが、

由紀子の涙を浮かべた顔にあおられる様に、最後には夫婦二人して『恩を仇で返すのか』と罵られんばかりのひどい言葉を投げつけて

きた。

夕紀はついに自分が折れる事になった。

馴染んだ仕事を辞め、快適なひとり暮らしを諦め、お守役、いや、便利屋同然のルームシェア暮らしが始まった。

由紀子と二人で暮らして1年が経つ。

その間、彼女は働くことなど頭になく、日中は、エステやスポーツクラブ、お料理教室に英会話と自分磨きに忙しく、夜になるとあちらこちらのパーティに顔を出しているようだ。

遅くなったと迎えに行かされ、忘れ物を持って来いと届けさせられ、由紀子の我儘に振り回されていた。

勤めている図書館に叔父が多大な寄付をしている事もあり、由紀子の用事は何よりも優先させられることに、周りの職員も暗黙の了解をしていたし、夕紀の事も、その程度の戦力としてしか見られていなかった。

一緒に暮らしていながら、彼女の交友関係には、一切かわらなかつた。関わるつもりもなかつたし、興味もなかつた。

自分には縁のない世界だ。
由紀子も夕紀を自分の友人に紹介することなど思いもしていないだ
ろう。

だから、今日みたいに、帰ってくる事は初めてだった。
この話が本当なら、どんなに嬉しいか……。

夕紀は、一刻も早く、この生活から抜け出したかった。
どうすれば、穩便にこの家を出て行く事が出来るか？

夕紀は、いつもいい口実を探していた。

だが、争いごとを好まない自分の性格上、
叔父夫婦と由紀子に今さら、事を荒立てようとは思わなかった。

夕紀は秘かに、由紀子が誰でもいいから早くいい人を見つけて、
自分を解放してくれるのを祈っていた。

やっと、その日が来るかもしれない事に、夕紀は希望の光を見た思
いだった。

従妹の由紀子が誰かと会っている事は、何となく気付いていた。うまく交際が続いているのだろう。

由紀子の機嫌がすこぶる良い。

叔父夫婦も、大賛成をしていると聞いている。

この暮らしももう少しの辛抱だと夕紀は、自分に言い聞かせていた。その日が来るのを指折り数えて待つと言っても過言ではない。

夕紀は、今か今かと由紀子の報告を待っていた。

珍しく自分よりも早く、由紀子が帰宅していた。

リビングのソファで胡坐をかいて、クッションを胸に抱いて、惘然としていた。

今朝は、急に呼び出されたとブツブツ言いながらも、気合いを入れて鏡の前にいたはずなのに。

「帰ってたんだ。今日は、早かったのね」

夕紀の言葉が聞こえてなかったのか、それとも、返事する気がなかったのか、

由紀子は何も言わない。

どんよりとした不機嫌な表情。

何かあった事はすぐに分かったが、巻き込まれたくない。

彼女の無理難題には、一緒に暮らしだしてから、嫌というほど振り回されてきた。

あえて、そこには触れないように気付かないふりをして、台所に向かった。

「夕飯は食べた？」

「・・・・・・・・」

「今日は、八宝菜にするつもりなんだけど、食べる？」

「・・・・・・・・知らない・・・・・・・・」

由紀子はスタイルを維持するために、家にいるときは夕飯は食べない。

自分には、考えられない事だ。

夕紀が野菜を小気味良いテンポで刻む姿を物言いたげにじっと見ている。

視線が痛い。

後から思えば、知らないふりをすべきだったと後悔したが、

思わず、聞いてしまっていた。

「何？私に何か話があるの？」

待ってましたといわんばかりに座っていたソファから立ち上がり、夕紀の傍に来て、ねだるように視線を投げかける。優しく手を重ねられ、包丁を置かせて、由紀子が座っていた場所へ引っ張っていかれた。

「ねえ、座って」

「何？まだ、料理の途中よ。」

「困ってるの」

聞いてはいけないと頭の中で警鐘が鳴っている。

「そう、叔父様に相談したら？叔父様なら何でも解決してくれるわ」

ソファから立ち上がろうと腰を浮かしたが、手をひっぱられ再び座らされた。

由紀子は、絶対に手を離そうとしない。

「パパじゃダメ。夕紀、あなたにしかお願いできないの」

「私？」

「お願い。助けてほしいの」

夕紀は思わず、天を仰ぎ見た。

これからやってくる難局にどうやって立ち向かうか？
自分にできるだろうか。

いや、絶対にのりきって見せよう。

ただ、それだけを、夕紀は固く決意した。

慎一郎の後をついていくと、裏の空き地に停めてある車が目に付いた。
やっぱり思った。

『庶民には縁のない車だな』

一緒に働いている同僚の男性が、いつもウツトリとカタログをみて
呟いているその車だった。

自分はさっさと運転席に乗り込み、エンジンをかけている。

こちらを見もせず、声をかけようもしない。
自分に従い、乗り込むと思いきんでいるようだ。

カチンときた。

由紀子は何ともは感じていないようだったが、
断片的に時々、聞かされる話で、

国枝慎一郎は自分にとっては嫌な男の見本のような人物だった。

叔母を驚かせるのが忍びなく、とりあえず、外で話でも聞いてやる
うとしたのに、
泣いて謝るところか、スタスタとどこかへ行こうとしている。
なんて女だ。

奥歯をギュッと噛みしめ、エンジンを止め、
車のドアを思い切り音を立てて閉めた。

警察へ突き出すにしても、追い出すにしても、
素姓を明かさせ、理由を聞かなければならない。
無駄な時間をとられる事が、余計腹立たしいが、表沙汰にはしたく
ない。

自分はどうであれ、叔母を世間のさらし者にさせられない。

「待てよ」

自然と低く厳しい声が出る。

その口調に、女は歩くのを止め、ゆっくり振り返り、慎一郎を真正
面から見つめた。

慎一郎は程無く追いつき、問いかけり。

「自分が誰だが、名乗るんだ。」

そして、こうなっただいさつを説明してもらおうか」

振り向いた女の眼は、叔母の家で見た時とは打って変わって反抗的な眼をしていた。

その眼の意味を計りかねた。

自分の方が悪いはずなのに、あの眼は何だ。

「叔母の目が悪いのを利用して、何をするつもりだった」

その途端、表情が一転した。

悔いている様に唇をギュツと噛みしめ、大きなため息をついた後、少し、ぽってりとした形のいい唇が動く。

慎一郎は、その唇に視線が引き付けられ外せなかった。

「本当に申し訳ありません。

節子叔母様の目がお悪いのを承知の上で、ここに来たのは確かです。

」

あっさりと叔母の目が不自由な事を知っていたと白状した。

確信犯だと言う事を言い訳することなく、認めた事に驚いた。

そして、自分がこの事態を招いて置きながら、

彼女の辛そうな表情に、なぜ心が引つ掛かった。

「どつという事だ？」

慎一郎は自分の中で起こった不可解な気持ちを確かめることなく、怒号したい気持ちを抑え、再び問いただす言葉を投げつけた。

14 (後書き)

うーん、お話がコロツと飛んでしまいました。
場面としては、11話の中ごろに続きます。

お話の進め方が悪いので、非常に分かりづらいかと思います。
単に、書き手の筆力も問題です。

(分かっていながら、更新するもの可笑しいのですが……)

たくさんの方にお立ち寄り頂き本当に嬉しいです。

ありがとうございます。

お話をすすめながら、これまでもお話も
見直して修正していければと思います。

呆れずに、お立ち寄り頂けると嬉しいです。

夕紀は目の前の、傲慢ともいえる態度で、自分を見下している慎一郎に

ひるみそうになりながらも、どうすればいいかと考えていた。

「君はだれだ？」

グイッと顎をわしづかみに持ち上げられ、視線を外す事ができない。掴まれた指からも彼の怒りが伝わってくるようだ。

「痛い！離して。説明するから、離して下さい」

「これでも、穏やかにお願いしているつもりなんだが・・・」

慎一郎は平然と顎から指を滑らすように手を離した。

「.....」

「無駄な時間を君に割かれている事、分かっているのか？」

そして、信じ切っている人を騙しているという罪の意識はあるのか？」

夕紀は大きく深呼吸をする。

「ごめんなさい。．．．私．．．佐伯夕紀です」

「佐伯？というと。．．．」

「ええ、由紀子の従妹です」

「本好きで引つ込み思案の？」

何かを思いだそうとするように慎一郎は目を細めている。

夕紀は、ため息をぐっと押しとどめた。

由紀子が、自分の事をそんな風に言っている事は知っていた。

地味で、暗くて、いつも本ばかり読んでいる引つ込み思案。

両親が早くに他界したから、面倒を見てあげている可哀そうな従妹。

分かっていたが、この男から聞かされると

腹が立つと同時に、なぜだか恥ずかしくもあった。

「本が好きなのは、確かですが」

「引つ込み思案かどうかは、考えものだな？」

真実だけを肯定するつもりでいたのに、

慎一郎のバカにするような物言いに、またもや力チンときた。

そんな夕紀の表情に気付いていただろうに、
どうでもいいといわんばかりで、先を続けるように顎で促した。

「それで？」

夕紀は、あの日の、共有部分に当たるリビングでの会話を思い出し、
慎一郎にどのように伝えるか迷っていた。

目の前で、自分を睨んでいる、この男に何と説明しよう……
口を開いたまさにその時、呼びかけられた。

「ユキちゃん！」

男の大きな体から視線を外し、その背後から、
手を大きく振りながら、笑顔で近寄ってくる浩二が見える。

「浩二さん！」

助かったとばかりに、明るい声を上げた。
それがどんなに嬉しそうな声に聞こえているのか、
自分では気づかないが、二人の男には明らかだった。

ゆっくりと目の前の慎一郎が振り向く。

振り向いた人物に気付き、近寄ってくる浩二の足が急に止まった。

「・・・慎一郎さん」

「やあ、久しぶりだな」

「・・・本当に・・・」

15 (後書き)

このタイミングで……

思わぬ乱入者に、中々進みませんね……。

すみません。

浩二は慎一郎の突然の出現に驚いていた。

電話で話すたびに、仕事が忙しくて来れないと言っていたはずだ。

いつもなら、彼女に声をかける前に、その背中で慎一郎の存在に気付くはずなのに、

いつになく困った顔の彼女を見つけ、思わず声をかけてしまった。

「叔母の事では、随分と世話になっていようで、感謝してるよ。」

「いいえ。・・・そんな事は・・・」

「親父さんの具合はどうだ？」

「ええ、徐々にですが、良くなっています」

国枝の屋敷の使用人であった高崎の息子の浩二とは

小さいころから、祖父の屋敷でたびたび顔を合わせていた。

大人になってからもお互い、相手の仕事への興味もあり、

いつもは、会えば話が弾むはずのだが、今日は、会話が思うように続かない。

浩二は手に持っていた野菜を思い出し、夕紀に差し出した。

「今朝、近所の農家の方からもらったんだ……。新鮮なうちにとまって……。」

「……ええ、ありがとう。朝取りなのね。嬉しい」

浩二は慎一郎の不機嫌な表情に気付き、気まずく思いながらも、夕紀が自分を明るく迎えてくれた事に、この場を立ち去り難かった。

「親父さんの経過も良好らしいし、高崎が退院してきたら、ユキチャンは御用済みだな。彼女は役に立ったか？」

夕紀は、慎一郎がいろいろと皮肉を込めて言っている事に気付いた。

《嫌な男！》

慎一郎の微妙な言葉のニュアンスと夕紀の少し強張った表情に

浩二は自分が二人の邪魔をしてしまったのだろうか

それとも何か二人の間で、何か問題があったのだろうかと思いつつも、

気付かないふりで心の内を素直に述べた。

「ええ、すごく、助かったと思いますよ。」

ユキちゃんがいてくれて、節子叔母様は本当に明るくなりましたよ。もちろん、僕も彼女が来てくれて嬉しいです」

自分の婚約者が人から良く言われると嬉しいはずだが、

慎一郎の自分を睨む視線で、余計な事を言ってしまったのかと心配になった。

由紀子の立場が悪くならないようにと、浩二は取り成すように慌て続けた。

「慎一郎さんは、本当にラッキーですよ。

こんな素敵な人が婚約者なんだから！」

慎一郎は、浩二が夕紀をそんなに誉めるのが不思議だった。

見た目もぱつとしない。

スタイルにしても、顔立ちにしても平凡で地味な彼女のどこに、そんな魅力があるのか？

だが、自分の気付いていない魅力に浩二が気付いている事が、面白くない。

慎一郎は、口元を歪めた笑いで浩二に返した。

「ラッキーかどうかは、本人達次第だろ。」

慎一郎なら当然だと言わんばかりの、言葉がかえってくると思っていたのに、

その言葉の真意が、浩二には分からなかった。

彼女から醸し出される、癒されるような、包み込まれるような

暖かさや穏やかさに慎一郎も気付いたから

結婚を決意したと思っていたのに、自分の考え違いだったのだろうか？

そして、そんな彼女の良さが失われる事がないよう、丸ごと守りたいと決心したからこそ、

結婚への道を選んだと思っていたのは、自分の思い違いなのだろうか？

慎一郎の言葉に首を傾げた。

何ともいえない沈黙の間が、3人の間に漂う。

だが、ここは自分が立ち去るべきだと浩二は笑顔を作った。

「え……と、それじゃ、僕は」

「ええ、いつもありがとう。浩二さん」

夕紀の御礼の言葉を遮るかのように

無言で、立ち去れと言わんばかりに、慎一郎は浩二を見て頷いた。

二人の間に流れている微妙な雰囲気を感じ取り、

浩二は後ろ髪を引かれるような思いで、帰っていった。

「さてと、君の騎士ナイトもこの窮地から救いだしてくれなかったようだな。」

本当に、この国枝慎一郎にはムカついてばかりだ。

浩二が去った後、それまでにも増して二人の間は気まずいものだった。

「おとなしい従妹がこうやって、純情な青年をも
いとも簡単に自分の味方につけるとは、恐れ入ったね」

「何が言いたいんですか？」

「そりゃそうだろう？」

こんな短時間で、叔母を手なずけ、男を虜にしている。
あの、策士家の由紀子も真っ青だ」

「私！・・・そんな事してません。」

慎一郎はフンと馬鹿にしたように見下ろしてくる。

「どつでもいいが・・・。早く話を続けてくれないか？」

夕紀は目の前のこの男のどろろが良くて、あんなに、結婚したがるのか、

由紀子が今、ここにいたらぜひ、聞いてみたかった。

彼の口から、由紀子を思いやる言葉の一つも出てこない。普通、この場にいるはずの自分の婚約者がいない事をまず、心配するのではないか？

二人の気持ちが通じ合っているようには、全く見えない。

夕紀は、目の前で鋭い目つきで自分を見下ろしている慎一郎を見上げ、

つくづく由紀子の話に乗ってしまった自分を後悔した。

もちろん、由紀子に無理強いされた事は事実だが、

夕紀は、自分の身の可愛さも加わって、この身代わりに頷いたところもあっただけに、ここにいることになってずっと、後ろめたさを感じていた。

夕紀は、足元の石に視線を落とした後、意を決して瞳を上げる。

「由紀子は貴方から、叔母様の世話を頼まれ、行けると頷いたんですが、その後、に用事があつた事を思い出して、私に相談して来ました」

「叔母の世話より、大事な用？」

なんて、傲慢な問い方……
思わず叫びそうになるのを、やっと抑えて、静かに頷いた。

「ええ、由紀子にだって、用事があります」
「それならそうといえればいいのに・・・」

夕紀はもう少しで、《貴方が言わせなかったんでしょ！》と
叫び出すかと思った。

慎一郎は納得のいかない表情で夕紀を見つめている。
その表情の中に、由紀子に対しての不信感があらわれているようで、
夕紀に不安が走る。

由紀子は今回の訪問がうまくいかないと、結婚がなくなるかもとい
っていた。

背中を冷や汗が伝いそうなほど、口を開くのが怖い。

「叔母様に由紀子がお手伝いに行く話が伝わっているのに、
その後で断りでもしたら、お気を悪くされると由紀子は心配したん
です」

「・・・」
「そして、何より自分が手伝いに行かなくなること、叔母様が不
自由されると

心配していました。悩んだ末に、私に相談してきたんです。」

言葉を選びながら、夕紀は必死で、由紀子を庇いはじめた。
この婚約を守るのなら、少しの脚色は許されるだろう。

自分の言葉一つで、由紀子の婚約がなくなってしまうかもしれない。

あの日のリビングで、夕紀子と交わした会話を
決して、慎一郎には明かしてはいけないときゅっと口を結んだ。

上質な皮のソファに夕紀を座らせ、由紀子はお得意の下から見あげるような、お願いの視線を投げかけてきた。

「彼の叔母様の別荘へ行かなければならなかったの」

「.....」

「お世話をしている人が急病になったらしく、私に行くようになって言われたわ」

「.....」

「2週間ぐらいなんだけど.....私、約束があるのよね.....」

「

ここまで聞いただけで、今まで彼女の勝手に振り回され続けていた夕紀になら

何を言いたいのか、すぐにわかった。

しかし、巻き込まれるのだけは、避けなければならない。

由紀子に先を言わせる事はしなかった。

「行くっていったの？」

「うん。嫌とは言えなかったの」

「それなら由紀子が行かなきゃ。あなたの婚約者の叔母様でしょ。」

「でも、私行けないのよ」

「無理だつて、そういえばよかつたじゃない。」

「そんな事言えないわ。そんな事言おうものなら、彼、すごく機嫌を悪くするはずよ」

「でも、貴方の都合も聞かないで、押しつけるなんて、おかしいわ
！」

「おかしくても、なんでも行かなきゃダメなの！」

夕紀は不思議だつた。

これほど由紀子が下手に出る事なんて、稀な事だ。

今までは、自分が第一で、相手はいつも由紀子に従っている
そんな、男性ばかりだつただらうに。

だが、そこまでして、その相手と結婚したいのだ。
その人の事が、本当に好きなのかもしれない。

「それなら、やっぱり貴方が行くべきよ」
「私は無理なの。だから、夕紀、お願い。あなたが、行ってほしい
の」

夕紀は首を大きく振った。

「私には、仕事があるわ」

「あら、アルバイトでしょ」

「アルバイトといつても、仕事には違いないわ」

「でも、週3〜4日しか働いていないじゃない。」

前は、ほかの方が1カ月介護で休むのを代わってあげたりしてたわ。

「それは！」

「それに、ちよくちよく、旅行に行く人もいたはずよ。

簡単にスケジュールを変更できて、長期のお休みも取りやすい、便利でお気楽なお仕事だって、私、知っているわ」

ひどい言われ方だ。

だが、自分では一生懸命、仕事に向き合っていても、

由紀子の便利屋のような状態を続けている限り、悔しいがその通りだ。

公的な機関のその図書館は、より多くの人材に雇用の機会をとばかりに

大勢の登録司書を抱えている。

子育て中の人、介護中の人、勉強中の人、そして、就職浪人といった、
様々な人でローテーションをしている。

急に休暇を申し出ても、対応できる、見方によっては、都合のいい職場だが、

これで食べていこうと思うには、少々心もとない。

そして今まで、夕紀は由紀子の用事に振り回され、周りには迷惑のかけ通しだった。

すこしでも、由紀子を疎かにすれば、叔父から職場へすぐに苦情が伝えられ、

周りのスタッフに通達された。

その為、自分をお願いすれば、都合をつけてもらえる事は充分に分かっていたが、

そんな事は口が裂けても言いたくなかった。

「でも、由紀子が約束してきたんだから、あなたが行かないと。

私は無理よ」

「お願い。私……。実は、……。映画のオーディションがあるの……。」

夕紀は開いた口がふさがらなかつた。

18 (後書き)

やっと理由が……。

引っ張り続けて、こんな理由だったなんて！と
がっかりされたらすみません。

それでも……と思っていただけの方、
今後もお立ち寄りいただけると嬉しいです。

『オーディション』

その言葉をキャンディのように甘く舌の上で転がすように発音し、嬉しそうに顔を輝かせている由紀子に、夕紀は半信半疑だ。

「オーディション？映画に出るの？」

「まだ、分からないわ。でもこの間、パーティーで声をかけられて、オーディションを受けてみないかって・・・」

「でも、結婚するんでしょ？」

「女優になるのは私の夢だわ。うまくいけば、女優への道が開けるし、

独身最後の記念になるかもしれないわ。ねえ、お願い」

「女優って・・・」

こうなったら、由紀子は絶対に諦めないだろう。

夕紀にだって、夢を掴んでみたいと願う気持ちはわかる。ましてや、チャンスが目の前に転がっているなら、掴みたくなるのは当たり前だ。

出来るなら、応援してやりたい。

だが、この場合、どうすればいいのだろう。

夕紀は、ギリギリの譲歩を示した。

「分かったわ。あなたが来れるまで、お手伝いに行くから、

終わり次第すぐに来てね。向こうの人に私が行く事を伝えておいて」

「夕紀！何言っているのよ！」

「え？」

「私の代わりに行くんじゃない」

「そうよ。だから」

「あなたが、由紀子として行くのよ」

夕紀の驚きは、半端ではなかった。

「何言っているの！」

「当然よ」

「そんな……。どうして、そんな事思いついたの？」

「あら、だって、婚約者が行かなければ、叔母さまだって気を使われるだろうし、

何よりも私に行くように言われているんだから。

他の人が行った事がばれたら、それこそ、この結婚なくなっちゃわ

わ」

「だから、あなたが、由紀子としていくのよ」

どうあっても頷けない。

「だめよ。無理よ!」

「なぜ?」

「なぜって?だって騙すことになるのよ?」

「大丈夫。わかりっこないわ。」

「それに、私が身代わりについても、うまくいくはずないわ。」

「どうして?」

「叔母様に、別人だつてばれるに決まってるわよ!」

「私だつて会つたことないのよ。絶対に、ばれるはずないわ」

「なに?その自信は!」

「だって、叔母様、お目が悪いんだつて」

「!」

「それに、人嫌いらしく、山奥に引つ込んでいるの。」

世話をしている人は入院してるし。」

由紀子は何を勘違いしているのか、得意げだ。

「だから、2週間ばかり、貴方が世話に行つても、だれも別人だつて分からないわよ」

「でも、貴方の婚約者が尋ねてきたら?」

「間違つても、そんな事はないわ。」

彼、一旦仕事にかかるとそれに没頭して、他の事はどうでもいいのよ。

いつもそうよ。彼に言わずと、新しい話が始まるから、忙しくて行けないって。

これまでも、叔母様とはあまり会っていないっていつていたわ。

きつと親しくないはずよ」

だんだん、まわりを固められていくのを感じる。

「でも、声とかきつと、代われれば気付かれるわ」

「私と今度、会うのは、せいぜい結婚式の時よ。」

すぐに私と会う訳じゃないから、少しぐらい変に思っても気のせい
ですむわよ。

当日は嬉しくて、涙声だろうしね。」

由紀子は、いたずらっ子のように笑っている。

「由紀子。人に嘘をついたり、騙したりするのはいけない事だとい
うのは、

小さい子だって知っている事よ。」

「あら？でも、バレなきゃいいのよ。それに私の幸せがつぶれても
いいの？」

「……………」

「行かないと、きつと彼は私との結婚を考え直そうとするはずよ」

夕紀は、戸惑った。

もうすぐ、この束縛された生活から逃れられるというのに、

それが自分の返事でひとつで消え去ろうとしているなんて……………。

でも……………。

夕紀は弱々しく、抵抗を示す。

「それに、名前を呼ばれても私、返事できないわよ。」
「『ユキ』って呼んでもらえばいいのよ。」
貴方は夕紀^{ゆき}だし、私は由紀子^{ゆきこ}だから、
ちょうどいいじゃない」

何をいえば、由紀子が自分からこの計画の取りやめを納得してくれるのか分からない。

でも、何か言い続けなければ……。

「オーディションに受かって映画にでたら、見つかるじゃない」

「オーディションは以前受けていたといえはいいだけよ。」

ああ、映画に出れるなんて夢みたい」

まだ、受かってもないのに、すでに自分は映画のヒロインのつもりなのだろうか？

由紀子のうつとりとした表情に呆れるしかない。

確かに、彼女が昔から女優を夢見ていたのは知っていたが、この期に及んでこんな事をするなんて……。

そして、騙しておいて、素知らぬふりをするなんて……。

「あなたが、協力してくれば、彼は何も気付かないわ」
「キャンセルすべきだわ」

「どっちを？だめよ。どっちも諦めたくないわ。」

絶対に諦めないわ」

由紀子の行動とその考え方には、自分は全く賛成できない。

だが、夕紀はこれまで、彼女のように誰に迷惑をかけても手に入れたいと望むものがあつただらうか？

夕紀は自分の夢はなんだろう？この、事態から一瞬思考が飛んだ。

由紀子の声に、考えていた事を中断させられた。

「それに、彼だって、私が女優になる事を喜んでくれるはずよ」「なぜ？」

「あら、言っ
てなかつたかしら？」

「婚約者は、国枝慎一郎なの！」

由紀子の、【どつ！】とばかりの勝ち誇った顔が、夕紀には不思議だった。

夕紀のあまりの反応の無さに、由紀子は機嫌を悪くしていた。

「なあに？その反応の薄さは？」

「……………」

「あの国枝慎一郎よ！」

「……………」

由紀子がだんだん、イライラしてきているのがわかる。

「夕紀、もしかして、知らないの？」

「何を？」

「国枝慎一郎よ！」

「由紀子の婚約者でしょ？」

「それはそうだけど……。やっぱり、彼が誰だか知らないのね。あなたがそんなに世間知らずだったとは……………」

由紀子は、口の端をあげて、馬鹿にしたように笑っている。

「本当におバカさんね。」

「国枝慎一郎といえば、世界に誇れる日本の映画監督よ。」

由紀子はそこで、含みを持たせるためだろうか、たっぷりと間を空けた。

「学生の中から彼の監督としての手腕は高く評価されていて、彼がこれまで発表した作品は、どの映画もカンヌ映画祭へ出品の要請があるのよ。」

「去年は最高の金賞を獲得したわ。」

「各国のプロデューサーや俳優からも監督のオファーがあつて、ハリウッドでの初の監督作品を撮り終わり公開を皆が心待ちにしているわ。」

「今年のアカデミー賞作品賞の最有力候補よ。」

「・・・・・・・・」

「もう！じれったいわね。彼はそれだけ有名人であり、世間からも注目されている人なの！」

「そこまで言われれば、さすがの夕紀でさえ、思い当たる。」

「自分も映画は見るが、もっぱら家でDVD派だ。」

「映画もストーリー重視で選び、監督の名前など気にした事ない。」

「だが、そんな自分でさえ、国枝慎一郎の名前はおぼろげながら聞いた事が」

「あるような気がする。」

「日本の俳優はもちろん、海外の俳優でさえも彼の監督作品に一度は出てみたいと熱望されているという話しだったと思う。」

そんな人が由紀子の婚約者だなんて……。

夕紀は彼女の大胆さに驚くばかりだった。自分なら、決して考えられないだろう。

所詮、世界が違う。

そんな華やかな世界に身を置きたいなど、さらさら思えない。

まあ、出会うはずもないのだが……。

「彼と結婚すれば、私も一躍セレブの仲間入りよ。

海外の授賞式に出席したり、レッドカーペットを歩いたり、レセプションの主賓として招かれるの。

その上、私が女優となると、ハリウッドの映画にも出演してしまうかも！」

由紀子はウツトリと夢見心地で話している。

「オートクチュールのドレスに身を包み、レポーターにマイクを向けられ、

カメラのフラッシュを浴びる……。

ああ、夢みたい。」

その言葉を言いながらも、由紀子は見せつけるように左手の薬指を夕紀の顔の前にかざした。

宝石に興味のない自分でさえも、高価なものだとその輝きと大きさ

から分かる。

「まだ、公にするなって言われているから、人には言っていないけど、彼の婚約者だって言えば、オーディションなんて受けなくても映画に出れるだろうに！」

不満そうに由紀子は口を尖らせる。

これも、鏡の前で研究した、由紀子のお得意の拗ねた表情だという事を

夕紀は知っている。

「いいじゃない。二人の間で、約束ができたのなら」

「そういうものじゃないわ。世間に認められて、メディアに公表されて

やっと国枝慎一郎の婚約者として、扱われるんだから！」

夕紀には理解できなかった。

なぜ、世間に認めてもらわないといけないのだろうか？

自分達と親しい身内の了解があれば、充分なんじゃないのだろうか？

「私にはわからないけど・・・」

「ああ、じれったい！早く、記者会見を開きたいわ！」

由紀子が、華やかな事が大好きだとは知っていたが、

これほどとは思わなかった。

そして、彼女が結婚の意味をわかっているのか気になった。

「それより、相手の事を由紀子はどう思っているの？」

「慎一郎の事？もちろん、愛しているに決まっているじゃない。だから、夕紀。愛するダーリンと結婚できるように協力してね」

その言葉に、少しだけだが、救われた気がした。

そして、夕紀は自分の敗北を悟った。

20 (後書き)

これで、夕紀が身代わりとなった理由が終わりました。
ここに、くるまでウロウロしてしまい・・・すみません。
書き手の筆力の無さを露呈させています。

次話は、また、慎一郎との場面に逆戻りです。

17話の続きになるかと思えます。

コロコロ、話が飛んでしまい、
読みづらいかとおもいますが、
よろしければお読み頂けると嬉しいです。

慥然とした表情で自分を見下ろしている慎一郎に
必死で言葉をつなぐ。

「由紀子はなんとかして、叔母様の助けにもなりたかったし。
彼女はすごく悩んでいました。

だから、私が言い出したんです。」

「なんて？」

「お目が悪いんだから、誰が行っても分からないだろうって。」

慎一郎は、明らかに今の言葉に気分を害したようだ。
目に見えて、表情が険しくなった。

「それであつさり由紀子は納得したのか？」

「いいえ、でも、何とか説得して、彼女は私に叔母様の世話を任せ
てくれたんです」

彼は、この説明を全く信じていないようだ。
口をへらの字に曲げている。

「叔母に嘘をつく事に二人の間で、罪の意識はなかったのか？人を騙すという事に！」

「由紀子は嫌がっていました。でも、私が大丈夫だからって……」
「何が、大丈夫なんだ？」

「あなたと叔母様はそれ程親しく行き来をしている訳じゃないって聞いて……。」

「そんなことで！」

慎一郎の抑えていた、怒りがあらわになっている。

何とかして、この婚約を守らなければ……。

万が一、ダメにでもなるう事なら、あの家族の落胆ぶりがやがて、自分に向かい、

由紀子と叔父たちからどれほどひどい言葉が降ってくるだろう。

「とにかく、私が何とかなるから入れ代わろうって……。

由紀子が早く用事が終わったら、すぐこっちに来る事になっていました。

だから、ほんの少しだけって……。

私が嫌がる由紀子を説得したんです。」

必死に由紀子を庇う夕紀をみて、慎一郎は面白くなってきた。

あの由紀子がそんな殊勝な事を言うはずない。

どうせ、叔母の世話が嫌でこの従妹に自分の役目を押し付けたのだらう。

それなのに、自分が悪者になってまで、庇う必要がどこにあるのだ。
。。。

慎一郎は心の中では、すでに由紀子との婚約解消は決定的なものとなっていた。

自分だけならまだしも、叔母の事まで騙すとは、言語道断だ。だが、ひとまず、彼女の言葉を信じたふりをすることにした。

叔母はこの目の前の夕紀が気に入っている。

とりあえず、高崎が戻ってくるまで、彼女に面倒を見てもらおう。高崎が本調子に戻るまで、誰かが節子の世話をしなければならぬ。それなら、少々の罪滅ぼしも兼ねて、彼女にしてもらえばいい。

「分かった。確かに由紀子の都合も考えずに独断だった。だが、高崎が戻るまでもうしばらく、叔母の面倒を見てもらえるか？」

急に態度を変えた慎一郎に驚いたが、やっと分かってもらえた。夕紀は安堵のため息を漏らした。誠意が通じたのだ。

目の前の男も、それ程、悪い人ではないかもしれない。

夕紀は呑気にそんな事を思っていた。

「ええ、もちろんです。高崎さんが戻ってくるまで、
今まで通り、お世話をさせて頂きます！」

夕紀は自分も節子と別れがたかったから、嬉しかった。
思わず笑顔で答えていた。

慎一郎は、その邪心のない笑顔にハツとした。
なぜか、見入ってしまう。
その笑顔をもっと、見てみたいと思った。

夕紀の笑顔が問いかける様に代わったのに気づき、
気を取り直した。

「ああ、じゃあ、よろしく」

自分の打算的な考え方に彼女が気付いていない事にホッとした。

別荘への帰り道、和解したとはいえ、相変わらず重苦しい気分が夕紀は歩く。

少し前を歩く慎一郎をどうしても意識せずにはいられない。

衿足にかかるぐらいの真っ黒な髪の毛を額から後ろにながし、濃い眉毛がその下の目つきをより鋭く見せている。

眉間にはいつも皺がより、口元はギョツと上に結ばれている。

この人でも、笑う事があるのだろうか？

服の上からでも肩甲骨の盛り上がり分かる。

がっしりとした肩幅に太い二の腕。

まるで、ラグビー選手のようだ。

女性としては平均身長だと思っている自分が見上げてしまうほどの高い所から見下ろしてくるその瞳は、いつも力強い光をたたえている。

そして、全ての物を掴んでしまえるのではないかと勘違いしてしまえるほどの、大きくて分厚い手。

全身から力がみなぎり、人を引き付ける、人を引つ張る何かが、感じられる。

この何かが、映画という非日常の世界に多くの人を引きずりこむ事の出来る、

又、多くの人に一瞬の夢を見せる事の出来る、限られた人が持つものなのだろう。

その背中から、視線を外し、夕紀は首を振った。

つくづく、この目の前の男は自分とは相いれない世界の住人なんだと、

自分が平凡な人間なんだと思い知らさせれる。

慎一郎は夕紀がついてきているかなどお構いなしに前をずんずん歩いていたかと思いきや、急に立ち止り、振り向き、唐突に口をひらいた。

「叔母には、もう少し黙っていてくれ」

「え？でも……」

「むやみに驚かせたくない。」

「……」

「しばらくは、婚約者のふりをしていてほしい。何かいい案を考えるから。」

「……分かりました」

夕紀はすぐにも節子に話し、本当の自分で接したかったが、
ここを去れば二度と会うことのない彼女に、
むやみに嫌な思いをさせる必要がないと自分を納得させる。

自分が去った後は、慎一郎がどうとも言い繕うだろう。

不承不承頷く。

普段なら、この季節の心地よい空気の中を歩くのは
穏やかな気持ちになれるのだが、今日は胸がざわついて、そうもい
かない。

由紀子と夕紀の事情も理解してもらい、何とか事なきを得て、
心の重荷が少し軽くなったはずなのに、
慎一郎と出会ってしまい、かえって夕紀の心は別の重荷がかかった
ように、
晴れやかな気持ちになれない。

共通の話題も思いつかないまま、
トボトボと慎一郎の逞しい背中を見ながら歩いた。

22 (後書き)

少し短めですが……。

ちょっと一息ついて……。

次話から新しい二人の関係の始まり? でしょうか。。。。

よろしければ、お立ち寄り頂けると嬉しいです。

「ただいま」

「お帰りなさい」

節子の嬉しげな声に迎えられる。

慎一郎と二人きりじゃないというだけでホッとする。

「節子叔母様、大丈夫でした？」

夕紀は慎一郎の脇を小走りで駆け抜け、ソファに座っている節子の隣に腰をかけ、手を握った。

「ありがとう。ユキちゃん。何にもなかったわよ？」

「慎一君とは久しぶりだったでしょ。ゆっくり話せた？」

「・・・ええ・・・」

「慎一君は、いつまでいれるの？」

節子が幼子のように屈託なく慎一郎に問いかける。

「ああ、少し静かなところで、本を読み込みたいから、しばらくは、ここに居させてもらいます。」

「え！」

初めて聞く話に夕紀は息が止まるほどびっくりした。

何とか、今をやり過ごせば、後は静かにこの生活を楽しめると思っていたのに、

慎一郎が、この別荘にいらになると、おのずと自分と顔を合わす事になる。

どうして？

由紀子の話では、新しい企画が立ち上がり、忙しくて訪れる事は無理だと言っていたはずだ。

彼の態度が軟化したからといって、夕紀の事を信用したわけではないのだから。

夕紀を見張るつもりなのだろうか？

夕紀の大声に節子はカラカラと笑い声を上げている。

「ユキちゃん知らなかったの？ 慎一君も言ってなかったの？」

「ああ、驚かそうと思ってね」

「まんまと慎一君にやられたわね。でも、嬉しいわね。

慎一君はただでさえ忙しいのに、向こうにいると余計、あれこれ仕事が舞い込んでくるのよ。

ここだと、訪れる人も少ないし、連絡手段も限られているしね。婚約時代を十分に楽しめるわね。」

節子の楽しそうな声も夕紀には、霞の向こうから聞こえてくるようだ。

「ユキちゃん？どうかした？」

「ええ……。」

何を言えばこの会話に加われるか夕紀は、分からなかった。でも、何か言わなければと焦った。

「ユキは突然の事に、びっくりして、声も出ないみたいです。こんなにゆっくりと二人の時間が持てるのは、初めてなので、お互いが解りあう時になればと思ってるんですがね……。」

一瞬、助けてくれたのかと思ったが、慎一郎の皮肉ともとれる言葉に腹が立つ。

だが、それよりも自分を『ユキ』と呼んだ事にどうすればいいのかわからなかった。

『由紀子』ではなく『ユキ』と……。

「そうですね。うまく解りあえればいいですけど……。」

嘘をつきたくなくて、取り繕うように出てきた言葉に慎一郎が、瞳がひときわ鋭くし、夕紀を睨みつけた。そして、その後の節子との会話で一層眉間にしわがより、見るからに、不機嫌になった。

「あらあら、一番甘い婚約期間だというのに、えらく現実的ね。そうだ。浩二君がさつき尋ねてきたわよ。」

用件を聞いたんだけど、ユキちゃんが外に行つたと教えたら、急いで、後を追いかけて出て行つただけど、会えた？」

「ええ、会えました」

「何の用事だつたの？大事な用？」

「野菜を持ってきてくれたんです」

「そう、それなら、置いていけばいいのに。」

どうしてもユキちゃんに渡したかったのかしら？」

「そんなワケではないかと思いますが……」

節子は、不意に思い出したのか、急に声を上げた。

「そつえば、ユキちゃんはどんな婚約指輪をもらったの？」

急に指輪の事を聞かれて、すぐに答えられなかった。

「え……？ああ……。その……」

節子が今までその話題に触れてこなかったから、指輪の話をした事はなかった。

今になって、それを尋ねてくるなんて……。

「ここで嵌めていた？私触ったことなかったわ。」

慎一郎が何とか助け船を出してくれないだろうか？
そう願いつつ、彼へと視線を這わせた。

「そう言えば、指輪をしていないな。どうした？」

彼の言葉に自分が窮地に立たされた思いだ。
どうして、こんなに意地悪なんだろう？

「持ってきていないのか？」

「……」

だんだんと腹が立ってきた。

自分の気持ちなんて、この男は少しもわかってくれない。

カッとなって言い返してしまった。

「持ってきています。トランクの中ですけど！」

由紀子が念のために持って行けとトランクに無理やり入れていたのが、
役に立つだなんて……。

「じゃあ、今からはしてくれ。」

「そんな、家事には邪魔です……。」

「その都度外せばいい」

「失くしてしまうわ」

「君がこの結婚の事を大事に考えていけば失くすはずないだろう。」

それに、あの指輪は、君が俺の婚約者だという印だ。

嵌めていれば、忘れないだろう」

なぜ、慎一郎がこんなことに拘るかわからなかった。

自分はいくまでも、由紀子の身代わりであって、

あの指輪は、彼と由紀子の結婚の約束の証あかしなのに……。

押し黙っている夕紀に、最後通告のように睨むような視線で、突き付けた。

「俺の婚約者でいる間は、あの指輪を嵌めるんだ」

節子は二人の喧嘩腰の会話に終止符を打たなければと思った。

「慎一君。ユキちゃんは、指輪を嵌めていなくてもあなたの婚約者よ。」

忘れるはずないじゃない。

ユキちゃん。私の世話が大変だったから、外したままだったのよね。でも、明日からは、嵌めてね。」

由紀子と指輪のサイズが同じだったのが、悔やまれる。

夕紀は、節子の言葉に頷くしかなく、明日からは、左手が重いだろうと覚悟した。

3人で囲む、最初の夕食は、息が詰まった。

節子の華やかな声に慎一郎と夕紀がポツポツと答えるという、何ともいえない、時間だった。

だが、二日三日と経つうちに夕紀は慎一郎の存在にも少しずつ慣れてきた。

節子との、午前中の散歩に慎一郎もついてくるが、女性二人の会話に入ってくる事はない。

後ろから守るかのように、ただ無言で歩いているだけだ。

朝昼晩の3回の食卓を囲む時も、二人の会話に耳を傾け、ときには相槌を打ちながら、もっぱら聞き役に徹している。

彼は夕紀の作った料理を、すごい勢いで食べる。

残す事も、文句を言う事もない。

これまで、男性に自分の作った料理を食べさせた事がない夕紀は彼の食べっぷりに驚くばかりだ。

あつという間に、料理が胃袋に消えて行くのを見るのは楽しかった。自分の料理を、こんな風に美味しそうに食べてくれるなんて……。

叔母がお昼寝の時は、慎一郎はリビングのソファでクッションを枕代わりに寝転び、書類や台本やらに目を通し、仕事に没頭しているようだ。

自分は少し離れたダイニングテーブルに座り、読みかけの単行本の先を楽しむ。

同じ空間にいるのに、聞こえてくる音は、鳥のさえずりと風の音、そして、二人がそれぞれめくるページの音だけ。

同じ部屋に他人がいることへの抵抗感とわずらわしさは、なぜか感じられない。

かえって、誰かが傍にいるという安心感さえ、湧いてくる。その存在が慎一郎だという事に少々の戸惑いを覚えながらも、夕紀は、この空間が今までになく、自分にとって居心地のいいものになっているという事を認めない訳にはいかなかった。

初対面の時以来、慎一郎は夕紀を責めるような言動は一切なく、この別荘で暮らしている。

彼は時折、思い出したように、何かを考えるような表情で、じっと夕紀の左手の指輪を見ていた。

不愉快なのだろうか？

不本意ながらも話の流れで夕紀に指輪をつけるようにと
叔母の前で、仕方なしに言ったのかもしれない。

だが、そんな事を気にしなければ、彼の荒々しい一面は影をひそめ、
物静かな顔つきをいつもしていた。

彼が見せる叔母への優しさと自分へのホンノ少しの気づかいが
この生活をより、穏やかな、楽しいものに行っている事にも
夕紀は気付いていた。

そして、由紀子が言っていた、彼と叔母の関係は全く思い違いであ
る事が分かった。

『あまり会わない』というのは、
映画の仕事が忙しくなると疎遠になるというだけで、
比較的余裕のある時は、電話はもちろん、
たびたびこの別荘にも足を運んでいるようだった。

“ピーピーピー”

オーブンの音が鳴り、リンゴケーキが焼き上がった。

昨日、買い物に行った先で、めずらしく紅玉林檜が手に入ったので、焼いてみた。

お菓子作りは、夕紀の趣味の一つでもあり、今は、節子という厳しくも温かい試食係がいてくれるので、この別荘に来て毎日といつていいほど、作っていた。

慎一郎が来てからお菓子を作るのは、このケーキが初めてだ。亡くなった母から初めて教わった、大好きな思い出のケーキだ。冷めた方が生クリームのホイップを添えて食べると分かっていたが、

夕紀は待ち切れない。

小さめの1カットを切って、ふと、包丁をとめた。

もう一切れ、今度は少し大きめにカットする。

ゆっくりとドリップで落としたりブラックのコーヒーとケーキをお盆にのせ、リビングへ向かう。

匂いに気付いたのか、声をかける前に、慎一郎が台本から目を離した。

「ごめんなさい。お仕事の邪魔をするつもりはないんです。

でも、ケーキを焼いたので、3時のおやつにいかがかと思つて……」

緊張していたのか、自分の声が少し上ずっているのに気付く。

夕紀は自分の行動に少し、いや全く自信がなかった。

彼が甘いものが好きかどうかも知らない。

仕事の邪魔されて怒っているかもしれない。

慎一郎はケーキを見て目を丸くしている。

どこから見ても、手作りだと丸わがりの素朴なケーキにあきれているかも。

「ああ、ありがとう。腹が減ってたんだ」

驚いているからなのか、少し、ぶっきらぼうに答えが返ってきた。

お昼は、焼き飯だった。

自分では、多すぎるかと思つたぐらいの量を作つたつもりだ。

その大部分を慎一郎の皿に盛つたのに、もう、お腹が空いたただなんて……。

「食事が少ないですか？」

「？」

「こんなにすぐに、お腹が減るなんて……。」

もう少し増やしますね」

「いや、大丈夫だ。作るの大変だろ？」

「でも……」

「俺に気を使う必要ないさ」

今晚から、もう一品おかずを増やす事にしよう。

夕紀は冷蔵庫の中身を思い浮かべた。

「君は食べないのか？」

「え？ああ、食べますよ」

「それじゃ、一緒にどうだ？」

出来るだけ、関わらない方がいいという事は解っていた。

夕紀は今の休戦状態のような関係を壊したくなかった。
断るべきかどうか悩んだ。

慎一郎はそんな夕紀の考え込んだ表情を口の端をあげて笑う。

「そんなに、悩む事もないだろう。」

同じ家で、同じ時間に同じものを食べるのだから、

一緒に食べても差し支えないだろう？」

リビングのセンターテーブルに散らかしていた書類を

慎一郎は片付けながら、夕紀を誘う。

夕紀も、その通りだとおもい、自分のケーキとコーヒーを運んだ。

24 (後書き)

二人の穏やかな日々はいつまで続くのでしょうか？

たくさんの方に訪れて頂き、本当にありがとうございました。
嬉しいです。

時間を開けずに更新出来ればと思います。
お時間がありましたら、これからも続けて
お立ち寄り頂けると嬉しいです。

慎一郎が本を脇に置いた。

目の前のケーキを大きく頬張ったとおもったら2口で無くなった。コーヒーも一気に飲み干す勢いだ。

夕紀はびっくりして、口ごもりながら尋ねる。

「もう少し食べますか？」

「まだ、あるのか？」

「ええ」

「じゃ、今の倍の大きさを」

遠慮なしにリクエストしてくる慎一郎にあっけにとられながらも、言われた通りの大きさにカットして、テーブルの上に置いた。

やはり、何言わず黙々と食べる。

夕紀のケーキを気に入ってくれたのだろうか？

ふと、脇に置かれた本に目をやる。

「台本ですか？」

「あ？ああ。そろそろ話を決めないといけない頃なんだ」

「候補は幾つもあるんですか？」

「やつと2、3本に絞ったんだが………。映画は見る？」

唐突に問われた。

「ええ。でも、DVDがほとんどですけど。」

夕紀は少しすまなそうに答えた。

「レンタルでも一向に構わないけど、出来れば、映画館で見てもらえれば」

作っている方としては、嬉しいね」

「.....」

「映画館で見るのは、家で見るのと全く違うと思わないか？会場に足を踏み入れると、あの少しうす暗い場内で自分の座先を探す。」

始まる前の、他の映画の予告、お知らせ。そして、一気に場内が暗くなり、

ブザーとともに、スクリーンが広がり、耳をつんざく始まりの音楽。考えるだけで、ワクワクしないか？」

夕紀の目の前で、慎一郎は、映画への情熱に目を輝かせている。そんな、彼の言葉に自分まで体が熱くなってくる気がする。

「映画館という場所は日常から離れて、全く別の空間に連れて行ってくれる事はないか？

自分もその映画の中にいるかのように、いろいろな場所でいろいろな体験ができた気がしたことないか？」

慎一郎はきつと、いつまでも映画への自分の熱い思いを語る事ができるだろう。

彼のその生き生きとした瞳を見つめながら、夕紀の口元に自然と笑みが広がる。

慎一郎は、夕紀の顔を見つめ、ハツと我に返ったように言葉をとめた。

「ちよつと、力入りすぎた。」

ハツが悪そうだ。

「いいえ。私、帰ったら、ぜひ、映画館に足を運んでみます」

素直に心から、夕紀は言う。

「ああ……。ぜひ、行ってみて」

慎一郎は少年のような笑顔を夕紀に初めて見せた。

夕紀は悔しいながらも、その笑顔をハンサムだと認めない訳にはいかなかった。

ポーっと彼のその笑顔に見とれていた。

二人とも見つめあったまま、その後の言葉がでてこない。ついに、慎一郎が名残惜しそうに、その沈黙を破った。

「ご馳走様。料理が趣味か？」

慎一郎が、さつきまでまどっていた雰囲気をかえて聞いてきた。まるで、一線を引かれた様に感じ、少し寂しかった。

「別に趣味という訳じゃありませんけど、

美味しいと食べてくれる人がいるのは嬉しいです」

「そんな奴はいるのか？」

「……別に関係ないでしょ……」

「おっと失礼！でも、こんなに長い間、この場所にいる事ができるのは、

いないって事だな」

「黙秘します」

夕紀のその態度に慎一郎はクツクツと笑った。

「その言葉で、いない事を認めたようなもんだぞ。

で、人に食べさせて何が楽しい？」

「趣味という意味では、お菓子作りの方が楽しいです。

気が向いた時にただ、単純に自分の食べたいものが作れるし」

「お菓子ねえ……で？」

「でって……。」
作っている時も楽しいですけど、出来あがりを待つ時間も楽しいです。

だんだんといい香りが部屋中に匂って来て、
玄関を開けるだけで、ああ、今日はこんなケーキを焼いて待っていてくれたんだって……。」

夕紀は、母が生きていた頃はお菓子を作って自分を待っていてくれたのを
思い出し、うっすらと涙が浮かんだ。

少し鼻をすすり、慎一郎を見ると驚いたように自分を見ていた。
自分のセンチメンタルな気持ちに気付かれないように急いで続けた。

「お菓子は楽しい時間を演出してくれるし、
辛い時は慰めてくれて、私にいつも寄り添っています。」

慎一郎は夕紀の言葉に頷きながらも言葉を添えた。

「お菓子以上に、寄り添ってくれる人を君は見つけるべきだ。」

夕紀は彼が自分の返答をまっっているか、迷った。

「あなたは見つけたから簡単に言えるんでしょうけど、難しいんです。」

「見つけた？」

「ええ、だから、由紀子と結婚するんでしょ？」

彼は可笑しなものを見るかのように夕紀を見た。

「そつきたか……。」

言うなり、『この時間は終わり』とばかりに、ソファに横になり、台本を読みだした。

ここ数日の穏やかな二人の雰囲気を感じ、節子は安心していた。

慎一郎がやってきた時は、婚約者同志が久方ぶりにあったというのに、
ぎこちない、いや、いがみ合っているかのようにさえ、感じられたのだ。

自分の世話に来る前に二人に何かあったのだろうかと心配までしていた。

だが、今は、二人の間に穏やかな空気が流れているのを感じる。
二人とも口数が少なく、会話しているのを聞く事もあまりないが、
黙ったまま同じ空間に共にいれる相手というのは、
貴重な人だと節子は思っている。

そして、これ見よがしではないが、慎一郎がユキを気遣っているのも節子は感じていた。

夕紀はスピーカーから流れるピアノ協奏曲に時折、ハミングしながら

ら、

朝食の後片付けをしている。
リビングでは節子が、ゆっくりコーヒーを飲んでいた。

慎一郎が2階の客間から降りてきて、叔母の肩にそつと手を置いた。

「叔母さん、ちょっと戻ってきます」

「あら、急じゃない？」

「少し用事を思い出したので」

「そう、ユキちゃんも？」

「いや、彼女はまだここにいますよ」

「いいのよ。連れて帰っても。そろそろ高崎も戻ってきてくれるだろうし」

「いや、俺もすぐに戻ってきますから。」

ユキは高崎が戻ってくるまで、ここにいる様にさせるよ」

「でも、最初の予定より、長くなるわよ」

「ユキが帰る時は、俺が連れて帰るよ。」

それまでは、叔母さんの手伝いをするから」

慎一郎の言葉に節子は笑った。

「さすがの慎一君も、一人でバスにのって来させた事に罪悪感があるのね。」

夕紀は節子に何か訂正の言葉をと、言いだす前に、
慎一郎の言葉がそれを遮る。

「あの時は、まさか、こうなるとは思ってもみなかったからね。まさかユキがこうやって来るなんてね」

節子にはわからないが、夕紀はその言葉を言われなくても自分が『身代わり』でここにいると言う事を、忘れた事はなかった。

夕紀は叔母とのやり取りを神経を集中して聞いている。

「という事だから、叔母の事よろしく頼む」
「はい」

その後は叔母に聞こえる様にわざと大声を張り上げている。

「じゃあ、叔母さん。行ってきます。」
「慎一君、気をつけてね」
「ユキ、送ってくれるか？」

自分の事を『ユキ』と呼ぶ、慎一郎にまだ慣れなくて、とっさに返事ができない。

「あらあら、私の前では、恥ずかしくて何も言えないものね。」

二人つきりで、しばしの別れを惜しんでらっしゃい」

節子のはしゃいだ声で我に帰る。

「そんな、惜しむだなんて」

「送ってくれる？」

慎一郎は繰り返す。

仕方なしに、後をついて家の外にでて、車の傍で向かいあった。夕紀は慎一郎に何を言われるのであろうかと、少し緊張していた。

「俺がいない間、何もするなよ。俺が戻ってくるまで、待っていてくれ」

「……」

「叔母をむやみに煩わせたくない」

「分かりました」

「じゃ、頼んだぞ」

「……あの……」

「何だ？」

「いつ、帰ってくるんですか？」

「俺がいないと寂しいか？」

慎一郎は皮肉気に口元を歪めている。

夕紀は、ただ彼のいない間の、束の間の休息の時間が知りたかった。

「いつ、お帰りですか？」
「何か企んでいるのか？」
「いつ？」

夕紀の少しいらだった繰り返しの質問に、慎一郎は憎らしげに笑う

「君が俺の顔と俺の婚約者だという事を忘れる前に」

言うなり、夕紀の顎を掴み、噛みつくような乱暴なキスをした。
唇を離すとぼーっとした表情の夕紀の両頬にそっと両手をあて、
今度は優しく、唇を啄ばんだ。

どれくらいそうしていたらろう。

夕紀は何も考えられず、ただ、されるがままだった。
この時が夢の中の出来事のように、フワフワとしていた。

ゆっくりと慎一郎が唇と手を離すと、心もとなく感じ、
彼の眼を見つめた。

慎一郎もじっと、夕紀の眼を見つめた後、
左手の薬指の付け根をギュッと掴み、ぶっきらぼうにつぶやいた。

「指輪しとけよ」

夕紀の返事も待たずして、慎一郎は車に乗り込んだ。

今のキスはなんだったのだろうか……？

彼の車が小さく見えなくなるまで、ボーっと見送る。

夕紀は、あんな強引なキスをされた事はなかった。

そして、その後の優しいキスも今まで、誰もしてくれなかった事はない。

人の婚約者とキスするだなんて……。

それも、こんなに嫌っている慎一郎と……。

でも、それを嫌だと思わなかったのが、夕紀には不思議だった。

彼にとっては、あんなキス、ほんの挨拶程度の物かもしれない。

恋愛に不慣れな夕紀は、わからなかった。

慎一郎が車で去っていくのを見送りながら、

夕紀は、ホツとした半面、寂しい思いがした。

深く考えるのはよそうと、頭中から思いを振り払う。

自分の心のモヤモヤを深く突き詰めるのが怖かった。

残された節子との二人の時間を楽しもうと家に入った。

「慎一君は行った？」

「はい」

「そう。ユキちゃんごめんなさいね。」

「え？」

「だって、ただでさえ忙しい子なのに、私の世話をしてくれていた
ら、

ゆっくり会える時間が少なくなっちゃったでしょ」

「そんな事、気にしないでください。」

「そう？」

「はい」

夕紀はもっと、節子に気にしないように何か言いたかったが、
慎一郎との接点は、ここが初めてなのだ。

下手に何かしゃべると、不味い事になりかねない。
偽っていることへの罪悪感とともに、

節子に気を使わせてしまい、より夕紀は気が重かった。

「でも、甘い別れの時だったみたいね」

「？」

「声が少し上ずって聞こえるわ。それに何だが響きが甘いもの」

節子の耳から得る情報の鋭さに夕紀は絶句した。

慎一郎が帰った翌日、浩二が久しぶりに訪ねてきた。彼が滞在している時は、全く顔を出さなかった。

「浩二さんお久しぶり」

「うん。久しぶりかな？」

浩二はいつもの穏やかな笑顔だ。

「慎一郎さんは？」

「用事があるって、戻ったの」

「君を置いて？」

「ええ」

夕紀はおかしな事を言うものだと思っただが、『私を』というよりは、『婚約者を』という事なのだろうと解釈した。

「高崎さんが戻られるまで、叔母様のお手伝いがしたいの。」

私だって、少しはお役に立っているでしょ」

「少しはって……。それ以上だけど。彼は君を迎えに来たのかと思っただからね」

「そんな。いちいち私に関わってられないわ」

「婚約者なの？」

夕紀は何と答えるべきか迷った。

いままで、浩二に面と向かって問われた事はなかった。

彼にまで嘘を告げる事に戸惑い、出来るだけ真実に近い答えを探した。

「私によ」

浩二は納得いかない表情だが、気を取り直すかのように訪問の用件を伝える。

「近所の方が、ジャム用の苺をくれるって言うんだけど、ユキちゃん作る？」

「わあ、嬉しい。市販のジャムは甘すぎて好きじゃないの。」

「良かった。じゃあ、明日もらってくるよ」

「え？ついでの時でいいですよ」

「いいや、早い方がいいよ。そこで、お願いがあるんだけど」

「？。なんですか？」

「僕にも分けてもらえる？」

夕紀はその言葉に嬉しくなった。

誰かの為に作るのは、楽しいし、より作りがいがある。

まして、リクエストしてもらえるなんて、お菓子作りが趣味の夕紀にとつて、

嬉しい限りだ。

「もちろんですよ。要らないって言ってももらってももらいますからね」

夕紀の遠慮のない言葉に二人は弾んだ声で笑う。

「あらあら、賑やかだ事。浩二君が来てるのね。」

「こんにちは」

「叔母様！明日、苺ジャムを作りますね」

「苺ジャム？」

「ええ、浩二さんがジャム用の苺を持ってきてくれるんです。」

「浩二君が？」

訝しげな様子の節子に、浩二は穏やかに話しかける。

「ええ、近所の農家がジャム用の苺を分けてくれるんです。」

「去年まで、そんな事言った事無かったのに。」

「いや、だって去年までは作れる人がいなかったじゃないですか」

「それはそうだけど……。」

「叔母様？」

節子の浮かない声に夕紀はハッと気付いた。

「もしかして苺ジャム、お嫌いでした？」

「いいえ。好きよ」

「手作りジャムは苦手ですか？」

「いいえ。なぜ？」

「……それならいいんですが。」

夕紀は節子が何となくだが、楽しみにしていないように感じられる。いつもなら、夕紀がお菓子を作る話をする時、

話が弾み、楽しい時間となるはずなのに。

27 (後書き)

浩一・・・登場です。

びっくりするほど多くの方に訪れて頂き、
本当にありがとうございました。

この後も、引き続き訪れて頂けるような
お話をサクサクと展開できるといいのですが・・・。

グダグダ・ダラダラにしてしまわないかと・・・。
うーん、先行き不安。。。

お時間がありましたら、お立ち寄りくださいね。

翌朝、早い時間に浩二は苺を持ってきてくれた。

「おはようございます」

「あら、おはよう。浩二君、早いわね」

「ええ、少しでも新鮮な方がいいかと思って」

節子は浩二の早い訪問に驚いた。

「ユキちゃん！おはよう」

「え？おはようございます。もう持ってきてくれたんですか？」

「そうだよ。今から作る？」

「そうですね。砂糖を振りかけている間に、レモンを買いに行けば、今日中に出来ますからね」

夕紀は時計で今の時間を確認し、スーパーへ行く時間を考える。

「買い物に行くなら、僕が車でのせていこうか？」

「え？大丈夫ですよ」

「いや、僕も買い物があるし、ついでだよ」

「でも、私と一緒にじゃ、お仕事の都合がつきにくいでしょ」

「仕事なら、昨日でひと段落ついたから、今日は暇なんだよね。」

「そうですね？それならお言葉に甘えて、乗せて行ってもらおうかな」

翌日であれば、宅配してもらえらるが、すぐに必要なものは、バスに乗って、最寄りの大型スーパーへ足を運ぶ。

バスの本数が少ないので、浩二の提案は嬉しい限りだ。

浩二の好意に甘える事にした。

浩二はにっこり笑って言う

「お安いご用です」

「じゃ、用意をしてくるので、それまでコーヒーでも飲んで待ってて下さいね」

「お！朝からユキちゃんのコーヒーが飲めるなんてラッキーだな。」

「嬉しい事を言ってくれますね。でも、これ以上は何も出ませんよ」

「コーヒーだけで十分だよ。ユキちゃんが入ってくれるコーヒーは、本当に優しい味がして美味しいんだよね」

「豆がいいだけですって」

二人の間で言葉のキャッチボールが交わされている。

その言葉のニュアンスの間に、友情以外の感情が入り込んでいないか、

節子は耳から入る情報を聞き逃すまい気をつける。

ユキの事は信用している。

だが、浩二の紳士的な優しさとユキの柔らかさが溶け合うような事が起こってしまったら……。

取り越し苦労で終わればいいが、節子は慎一郎の事が気にかかって仕方がない。

甥の慎一郎は不器用な男だ。

優しさは人一倍持つているくせに、出し惜しみをしているかのように一部の人間にしか、示そうとしない。

彼が生まれながら持っているバツクグランドやその姿形、そして、溢れ出る才能に伴う華やかな世界に群がってくる人間関係に由来しているのかもしれない。

彼の周りにはいつもきらびやかな女性が集ってくる。

節子は、その女性たちが彼の心に巣食っている闇を和らげてくれるのか、いつも不安だった。

彼が親の影響からか、映画の世界に身を置いて以来、節子にもその交友関係は聞こえていた。

仕事は驚くほど順調だったのに、彼の私生活は安らぎや暖かさとは程遠いものだと思っている。

マスコミの取り上げる事が、すべて事実だとは思っていないが、これまで有名女優やモデルと幾つも浮名を流してきていた。

その噂を聞いたたびに、二人の間で幾度となく交わされる会話があった。

「今度の彼女とは結婚するの？」

「誰の事？」

「ほら、女優の、今、連ドラに出ている……」

「叔母さん。テレビなんて見ないだろ？」

「それでも、ラジオとかで知っているわよ」

慎一郎はヤレヤレと言った口調だったが無視する事はなかった。

「彼女とは、つきあっていないよ」

「もう終わったの？」

「違う。そんな付き合いじゃなかったただけだ」

節子はここでやめるべきかと思っただが、止まらなかった。

「慎一君、そろそろ家庭を持つべきよ。」

慎一君の事を大事に思って支えてくれる人があなたには必要よ」

「いい仕事、いい仲間に囲まれているさ」

「それだけじゃ、寂しいでしょ？」

「何が？」

「あなたを一番に思って、そして一番に思える存在がない事が」

慎一郎がその言葉を鼻で笑った様にした。

「大丈夫さ。俺には必要ない。」

節子のお小言を慎一郎は、いつも簡単に受け流していた。

きつと、一生誰とも結婚せず、こつやって人生をななめに見ながら

過ぎていくのだろう。

ほんの一握りの親しい友人だけに心を許し、
他の人とは一線を画してつき合っていくのだろう。

節子は、慎一郎が持っている心の中の負の大きさに、
自分の事も少しは関係しているのかと思うといたたまれなかった。

高崎が入院したことで、節子が不自由をしないようにと
婚約した女性を寄こすと、あの日突然言われた。

寝耳に水の話だ。

彼女の事を問うと、『美人』の一言だけ。

その口調には、何の熱情や愛しさも感じられなかった。

ただ、必要事項を伝える、そう、節子にはとらえられた。

やはり、甥は、その心に響く女性には出会えなかったのだ。

そんな事もあり、節子も婚約者に対して、全く期待していなかった。

2・3日で逃げ帰るか、表面だけの付き合いに終始するか
そんな女性に違いないと思っていた。

ところが節子の元に訪れたのは、予想から大いに外れた女性だった。

28 (後書き)

やっぱり、寄り道してしまいました。

節子叔母さんが出てきてしまいました。

悪い癖は、中々治らないかも……。

あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、

お話が飛んで行ってますね。

あまり長い寄り道にならないように、したいと思います。

呆れずにお読みいただけると嬉しいです。

「はじめまして、由紀子です」

甥の婚約者がやってきたのは、もうすぐお昼という時間だった。温かみのある耳馴染みのいい声だ。

「早速ですが、お昼にしましょうか？」

「え？」

「お腹すいてませんか？」

「あなた、来たばかりなんだからちょっと座りなさいな。

今日は何か取りましょう。」

「いいえ、もつたいないです。」

駅前のスーパーで鍋焼きうどんを買ってきました。

お昼なので、これで軽くていいですか？」

「ええ。いいけど……。」

由紀子と名乗った女性は、物おじせず、さっそくキッチンに行き、ガチャガチャと作り始めているようだ。

「慎一君は？」

「?・・・シンイチ君?・・・」

「そうよ。慎一君よ!」

「あ！ああ……国枝監督ですね……。きていませんよ」
「監督つて……。じゃあ、一人でどうやってきたの？」

自分の車？それともタクシー？」

「いいえ。バスで来ました。」

「バス？」

「ええ」

「バス停から結構歩いたでしょ。」

「そうですね。少し歩きましたけど、気持ちいい道ですね。」

由紀子は何の迷いもなく答える。

自分が思っている慎一郎の周りの女性なら、

まずは誰かにおくらせるだろうし、車でくるか、もしくは、

駅からここまでいくら距離があるつとタクシーを使うはずだと思っ
ていた。

程無くして、いいだし汁の匂いがしてきた。

「出来ました。鍋敷はどこですか？」

「一番下の引き出しよ」

ダイニングテーブルに座っているといい匂いのうどんが置かれたよ
うだ。

「見えますか？お鍋、気をつけて下さいね。お皿を洗うのが面倒だ
し、

何より、簡易鍋のおうどんなので、このままの方があったかいかと
思っ

移していません。」

気取ることなく話す由紀子に、節子はびっくりした。目の前に腰掛ける様子がうつすらと感じ取れる。

「頂きます」

元気な声の後、うどんをすすする音がし始める。

「叔母様、おうどん冷めますよ。」

節子の戸惑いなど気にもしていないようだ。

由紀子は早々に食べ終わると席を立り、キッチンへ向かっているようだ。

「コーヒーは好きですか？」

「ええ」

「いい香りのするコーヒー豆を持ってきたんですよ。食後のコーヒーを入れますね。」

あ！お夕食は、今日は豚汁と鯖の塩焼きにしようと思っんですが、大丈夫ですか？」

今、昼食を食べ終わったばかりなのに、もはや夕食の献立を言われ、節子は笑い出さなくなった。

それも、気取りのない、普段の献立だ。

この少しのやり取りだけで、節子はこの女性が気に入った。声といい、話し方といい、自分には心地よい。

そして飾り気のない性格も、感じ取れる。

キッチンの向こうから元気のいい声で話しかけられた。

「明日から、お散歩行きませんか？」

「え？散歩？」

「はい！」

「私、目がこんなだから、外はあまりね」

「でも、きつと気持ちいいですよ」

「そうかしら？」

楽しい口調に、無下に断る気になれない。

「そうですね。今の季節ならすごくいい気持ちになれるはずです。気分転換にもなるし、運動にもなるでしょ？一緒に散歩してくださいませんか？」

こんな素敵な並木道歩くの初めてなんです！」

彼女の生き生きとした声と前向きな言葉にいつの間にか節子は同意の返事をしていった。

明日からの生活が少し、楽しみになってきた。

どうやら、慎一郎は節子が思っているより、賢かったようだ。

29 (後書き)

期待してなかっただけに、予想外に印象が良かったというのはよくある事ですね。

次話からは、浩二との場面に戻る予定です。

ウロウロしてすみません。

浩二の車に乗せてもらい、少し離れた大型スーパーへ向かう。

夕紀の助手席に座る事への戸惑いを感じ、

浩二は何気ない仕草で、ドアを開き、その席に招いた。

「さあ、どうぞ」

「・・・お邪魔します」

軽快に走りだした車に後押しされるように、
すぐに、二人は会話の糸口を見つけた。

浩二との会話は、気軽で楽しい。

彼の穏やかな話しぶりは、夕紀を緊張させることなく会話が弾み、
眩しいぐらいの陽の光の中のドライブに、夕紀は素直に楽しいと感じた。

カートを浩二が押して、夕紀が食材を選ぶ。

ちょうど、いろいろ買いたい頃だったので、

浩二が、重いものや高張る物なども買えばいいと言いだしてくれて、
本当に助かった。

ああでもない、こうでもない、野菜を手に取り選んでいると
浩二を呼ぶ女性の声がした。

「浩二君？」

二人がその声と一緒に振り向くと、少し年配の女性がニコニコと近寄ってくる。

「浩二君じゃない」

「お久しぶりです」

「こんな時間に、こんな所で会うなんて、珍しい。お父さんの具合はいかが？」

高崎の入院の事も知っているとすれば、結構親しい知人だろう。

浩二は穏やかに対応している。

その女性は、夕紀を気にして、チラチラと視線を送ってくる。

夕紀はこの場においていいものか迷った。

「彼女？」

「いや……」

ズバリ聞いてきた問いへの、浩二の歯切れの悪い口調をその女性は冷やかし気味だ。

「分かっているわ。お父さんには内緒にしておくわよ。でも、さっきから見ていると楽しそうだったわ。」

「はぁ……」

「あらあら、ごめんなさい。デートの最中にお邪魔だったわね。」

意味ありげな視線を投げかけ、その言葉を残し、立ち去った女性の後ろ姿を見ながら、

二人は顔を見合わせて、思わず苦笑いしあう。

「ごめんよ。あの人、悪い人じゃないんだけど……」

「ううん。でも、浩二さんに変なうわさがたつたら、迷惑よね。」

「いや、別に……」

「あ！私、浩二さんに彼女がいてもおかしくないのに、いつも、甘えてばかりだったわよね。ごめんなさい」

「……」

「彼女、怒っていない？困ったことになっていない？」

「……」

「浩二さん？」

「そんな人、いないから大丈夫だけど、ただ、別の意味で困っている」

夕紀はこごぞとばかりに、彼の助けになるべきだと声をあげた。

「私で手伝えるなら、何でも言ってね。」

浩二さんには、お世話になりっぱなしだから、何でもするわ」

浩二は苦笑しながら、夕紀をみやった。

「ありがとう。君なら解決できるのかもしれないけど……。とりあえず、僕の提案を受け入れてくれるかな？」

夕紀は、自分で解決できる事なら、ぜひとも手伝わねばと意気込んだ。

「ええ、私で出来る事なら。どんな提案？」

「ユキちゃん、美味しいケーキ屋さんがこの近くにあるんだ。寄っていかないか？」

「え？提案って？」

「そう。これが提案。駄目かな？」

「でも、時間が……。」

「少しぐらい遅くなっても連絡を入れておけばいいよ。」

おやじだって、時々は出かけていたしね」

「……でも……。」

「雑誌で以前、取り上げられた事があるお店んだけど、お客が増えすぎて困ってからは、それ以降取材拒否。」

で、最近は落ち着いているんだけど、本当に美味しいんだ」

そこまで、言われては、夕紀としては興味を捨て切れなかった。

「んー、じゃあ、買って帰るのは？」

「いや、そこはコーヒも美味しいから、絶対イトインの方がいいよ」

お菓子作りが趣味という事もあり、ぜひ、行ってみたい。

もしかして、そこで、浩二は自分に何か相談を持ちかけたいのかもしれない。

夕紀は、節子に電話をすることにした。

「夕紀ゆしきです」

「え？ユキちゃん？」

慎一郎にばれた今となっては、節子の前でも嘘をつくのが辛くなっていた

つつい、自分の本当の名前を名乗っていた・

「ええ、由紀子です。あの、ちょっと遅くなってもいいですか？」

「何かあったの？」

「浩二さんが、近くに美味しいケーキ屋さんがあるから案内してくれるって言うので、

ぜひ、行ってみたいんです。」

「浩二君が……。」

「少し遅くなりますけど、いいですか？」

「……構わないわよ。」

「お昼の用意をしてきていないんですが」

「大丈夫よ。残り物ですませるわ」

「すみません」

「気にしないで。ここに来てから出かけた事無かったものね。」

「ありがとうございます」

「でも、帰ってきてね」

「？」

「待ってるわよ」

「はい……？ 食べ終わったらすぐに帰ります。」

なぜ、あんな風に言ったのだろうか？

夕紀は節子の電話を訝しげな気持ちで切った。

車の反対側でまっている浩二に、伝える。

「節子叔母様にOKを頂いたわ。」

「じゃ、行こうか」

浩二の優しい笑顔にうながされて、今度は戸惑うことなく助手席に乗り込んだ。

30 (後書き)

浩二が動きます。

頑張れ！って感じですね。

少し奥まった窓際の席に二人は案内された。

ワゴンに盛られて運ばれてくるケーキは、目も楽しませてくれるものばかりで、
夕紀が、選びきれなくて迷っていると、浩二が笑いながらアドバイ
スしてくれた

「ユキちゃんが好きなケーキを2つ選んだらいいよ。」

「え？でも、浩二さんは？」

「二人でシェアして食べようよ。」

その言葉が嬉しくて、夕紀は素直に頷いた。

「ありがとう。選べなくて困っていたの。嬉しい！
じゃあ、遠慮なく。」

夕紀は、その中から自分の食べたい物を選び、
目の前に差し出された、フルーツタルトを一口頬張った。

「おいしい！ん〜、幸せ」

浩二が優しいほほ笑みを浮かべて自分をじっと見つめているのに気が付き、

夕紀は居心地が悪かった。

「何？」

「いや。ユキちゃんて……」

「私？」

「ああ、本当に僕が思っていた人とは全く違ったよ」

「？」

「慎一郎さんの婚約者が君みたいな人だとは思ってもみなかった」

夕紀は、答えるつもりはなかった。

浩二に真実を言えない事が、申し訳なかった。

「僕がどんな人を想像してたか聞きたくない？」

「別に……」

浩二は、乗り気でない夕紀におかまいなしに続ける。

「皆が振り返るような美人で、スレンダーな上に、グラマラス。

いかにも、私を見てちょうだい！みたいな、男の目を引きまですって感じ？」

「……」

本来の婚約者の由紀子への表現としては、ぴったりだ。

「ネイルも完璧で、いつもブランド物に身をかため、自分の外見を磨くことに

生きがいを感じている。

スタイルを維持するために、間食は元より、カロリーを気にして、食べるという楽しみを放棄している」

「……」

「それが悪いと言っているわけじゃないよ。ただ、僕には全く共有できない世界を

生きている人だと、そう思ってたっただけ」

「……」

浩二は、肩をすくめた。

「そんな女性が、しぶしぶやってくると思っていたんだ」

「……そう……」

「まだ、続きが聞きたい？」

「もういいわ。そんな美人が現れなくて残念だったわね」

「そうだね。ある意味、君が慎一郎さんの婚約者で残念だよ」

「……浩二さん……」

確かに、自分は由紀子と比較にならないくらい、

十人並みの容姿であり、決して痩せているとは言えないスタイルだ。だが、彼から、こんなひどい言葉を言われるとは思っていなかった。

夕紀の落ち込んだ様子に気づかないように続ける。

「なんで、君が、慎一郎さんの婚約者なんだろう？」

どうして、僕と先に出会わなかったんだらう？」

「・・・浩二さん？」

彼はテーブルに肘をつき、両手を組んで口元に当てて考え込んでいく。

なぜか、悔しげな表情を滲ませて。

「彼が今まで選んできた女性は、どうでもいい、そんな人ばかりだったのに。」

なぜ、よりによって、婚約者としてここにいる君が、誰よりも僕にとって・・・」

「浩二さん？」

浩二は口元から外しテーブルの上に置いた手をぎゅっと拳骨を握った。

夕紀は、彼がこの先、何を言いたいのかわからなかった。ただ、今まで目にした事のない表情なのが心配だった。

「浩二さん？どうしたの？大丈夫？」

夕紀はテーブルに置かれている浩二の右手に自分の左手を重ね、彼を落ち着かせようとした。

浩二が、夕紀の左手をじっと見ていた。

その薬指に光っている、彼女の手にな似合いな大ぶりのダイヤを。ただ、それを凝視しているようだった。

「彼は君の事なんて、きつと、何も分かっていないだろうに！」

「何の事？」

「その指輪だつて……。」

そんな指輪を君に贈ること自体、彼は君を大事にしていないのがわかるよ！」

「……浩二さん？」

いつも、穏やかな浩二の、こんな吐き捨てるような口調は初めてだった。

自分の手にこの指輪が全く似合っていないのは、夕紀も気付いていた。仕方ないのだ。

これは、本物の婚約者の手じゃないのだから。

「でも、この指輪、すごく立派よ」

「君は、本当にその指輪でよかったの？」

本当に、この結婚でいいの？」

夕紀は眼を見開き、途方にくれて、浩二をじっと見つめた。夕紀はその問いかけへの答えを持っていない。そんな夕紀に気付き、浩二は力ない笑顔を浮かべる。

「ごめん……。僕は何を言いたかったんだろうね」

浩二の自嘲気味な言葉を不思議いながらも、彼に嘘をついている事に謝罪を言わずにはおれない。

「ごめんなさい」

「……何が？」

「……ううん。……」

浩二は大きな息を一つ吸い込むと、静かにその息を吐きだした。気を取り直すかのように、いつもの笑顔を浮かべた。

「ごめんよ。本当に変な事言っつて。」

さあ、ケーキを食べて、帰ろうか。節子叔母さんが待ってるはずだ」

浩二の言葉に、ホツとしながら頷き、夕紀はケーキを頬張った。だが、前ほどそのケーキがおいしいとは感じられなかった。

「ただいま」

ユキの明るい声が聞こえ、節子はホツとした。

浩二と二人で出て行ってから、なぜだか落ち着かなかった。

浩二は、誰に対しても穏やかで優しい青年だ。

だが、ユキに対してはより、気持ちが入っているように思う。

ユキも浩二を憎からず思っているだろうという事は見ていてわかる。

慎一郎は何をしているのだろうか？

ボヤボヤするな！と喝を入れたい気分だ。

キッチンの向こうでは、浩二が買い物袋からいろいろ取り出し、

ユキに手渡しているようだ。

楽しいな会話が聞こえてくる。

「はい、卵。気をつけて」

「あれ、牛乳買わなかった？」

まるで、新婚夫婦のようだ。

節子はこれ以上、浩二に深入りさせるのを止めさせなければと思っ

た。

「さあて、取りかかろうかしら。」

「どれぐらいで出来るの？」

「一時間ぐらいかしら？」

「じゃあ、ちよっと、出てくるよ。すぐに戻ってくる」

「浩二さんの分は作っておくから、取りに来るのは明日でも大丈夫よ」

「いや、明日の朝食で早速食べたいからね。取りに戻ってくるよ」

浩二が出ていく音を確認して節子は話しかけた。

「ケーキはどうだった？」

「すごく、美味しかったです。フレッシュなフルーツが

盛りだくさんにのっけていて、甘すぎずで、評判になるのも分かりません。

浩二さんと分けあって食べたから、違う種類のケーキを味わえて、得した気分でしたよ」

ユキの楽しげな声に節子は、ため息をつきたい気持ちだ。

「そう。浩二君とは気が合うのね」

「浩二さんが気づかってくれて。優しいですし、すごく気が利くし。

買い物でも浩二さんの方から、重いものも買えばいいと言ってくれて本当に助かりました。」

ユキは、何も含まない純粹な思いで答えている。

「そうね。彼も早くいい人を見つけないとね。」

慎一君があなたと出会えたように、彼にも素敵な人が見つかるというのよね。」

夕紀は皮肉を言われた訳ではないと分かっているが、答えに困った。これ以上、節子にこの話をされるのは、気まずすぎる。

「ジャム作りますね」

そそくさとキッチンへこもり、苺を潰さないように煮詰めていく。その作業の中でも、ケーキ屋の浩二の言葉を思い出す。

あの時の彼は、いつもの浩二ではなかった。

慎一郎の婚約者としておかしいと気付いたのだろうか？

浩二が言っていた。

いつも彼が連れている女性は自分とはまったく違うタイプだ。

華やかな世界の住人である慎一郎の横にいるのが

自分のようなタイプの人間ではないことぐらい誰でもわかるのだろ

う。

国枝慎一郎……。

彼のあの、人を小馬鹿にしたような態度。
傲慢ともいえる物言い。

だが、仕事に対する情熱と真摯な姿勢。
そして叔母に見せる優しい心づかいと笑顔には、ハッとさせられる。

夕紀は、由紀子と慎一郎の関係が理解しがたかった。
自分とは、異次元の二人のようだ。

だが、お互いがそれなりの形で想いあっているなら、
夕紀が理解し得なくてもいい事だ。

とにかく慎一郎の事を頭から追い出したかった。

いい感じで出来あがったようだ。
スプーンで味見を試みる。

甘すぎない、夕紀の味が作れた気がする。

「出来たの？」

「浩二さん、驚いた！」

「ごめんよ。節子叔母さんのお昼寝の時間だろ。」

チャイムを鳴らすのをどうしようかと思ってドアを見たら鍵が開いていたから、

申し訳ないけど、入らせてもらったよ」

「鍵開いていました？おかしいな？閉めたはずだったのに・・・。
気をつけます」

浩二はにっこりと笑う。

「そつだよ。僕だからいいけど、気をつけてね」

「はい」

「それより、どう、うまくできた？」

「うーん、まあまあかな？味見します？」

「いいの？」

「ええ！」

夕紀はどんな反応をしてくれるかワクワクしながら、

ジャムをすくい、買ってきたクラッカーにのせ、浩二に渡そうとしたのに、

浩二は口を開けて待っていた。

夕紀は思わず固まってしまったが、

ひな鳥が親鳥から餌をもらつのを待っている光景を思い出し、
笑いながらクラッカーを浩二の口に運んだ。

サクッ！

クラッカーを咀嚼している音が、二人の間に響く。

「どうですか？」

知らず知らずのうちに上目がちに尋ねている。

浩二は、夕紀の顔を真剣な表情で見つめ、少し間をおいて感想を述べる。

「程よい甘さで、すごくおいしいよ。」

夕紀は褒められて嬉しかった。

満面の笑顔が浮かんでいただろう。

「本当？嬉しい！」

「うん。……君の味だ……」

そう呟きながら、浩二は、キッチンのステンレスのシンクと自分との間に

閉じ込めるかのように、夕紀の両脇に両手を置いた。

浩二の頭が夕紀に覆い被さるうっしてくる。

夕紀が、ハツと口を開こうとした時、別の声が聞こえた。

「ユキが作るのは、何でも美味しいからな」

「慎一郎さん……」

浩二は、そのままの体勢で、視線だけを上げた。

32 (後書き)

又もや、こんなタイミングで……。

慎一郎がひと暴れ？するのでしょうか……。

慎一郎がゆつくりと2階から降りてくる。

浩二は、さして慌てた風もなく、いや、かえって不自然なぐらいゆつくりと

慎一郎に視線を据えたままシンクから手をどけた。

夕紀は、急いで体勢を立て直し、振り向くとともに慎一郎の姿をとらえると、

無表情な慎一郎が、かえって怖かった。

いつの間に、戻ってきたのだろうか？

自分がキッチンを離れたのは、……

ジャムを火から下ろし、洗濯物を取り込んで畳んでいた時だ。

もしかして玄関の鍵が開いていたのは……。

慎一郎は、刺すような視線を、一瞬、夕紀に投げつけたが
すぐさま、浩二に戻す。

男二人の視線がぶつかった様子に、夕紀は息を止め身動き出来ない

ままにいます。

「浩二もユキの料理が美味うまいいの知しっているか？」

「僕は、お菓子は頂いた事はありますが、食事は」

「そうか、一度食べに来いよ。ユキの料理は美味いぞ」

「……ありがとうございます。」

「俺を釣りあげる事が出来た一つは、料理の腕もあるんだ」

「……そうですね……」

浩二は、ユキの気まずそうな気配を感じ、緊張しきつた彼女の表情をみて、

視線を和らげた。

夕紀はその視線の変化に気付き、瓶詰めしたジャムを急いで手渡した。

「ありがとう。明日の朝食が楽しみだよ」

「いいえ、私の方こそ、買い物も付き合ってくれてありがとう」

二人の会話に、慎一郎は自分の眉がピクリと動くのを感じたが、夕紀が浩二を玄関まで送っていくのを、黙ってみていた。

キッチンに歩み寄り、置かれていたクラッカーを一つ手に取りジャムをのせ、口に運ぶ。

確かに美味しい。

そして、市販品ではない、素朴な夕紀の手作りの味がした。

その程よい甘さのジャムを、苦々しく味わいながら、

その甘さが、先ほどの二人の様子に覚えた怒りを沸々と増幅させてくるようだった。

厄介な用事を済ませ、慎一郎は急いで別荘への道を急いだ。

途中、夕紀と叔母へのお土産を何も買わなかった事に気付き、舌打ちした。

二人が喜ぶお菓子やフルーツでも買ってきてやればよかった。

ただ、用事を終わらせ、少しでも早く戻る事に気を取られ、

そんな事など、思いも浮かばなかったのだ。

そんな自分の考えに『土産物の一つや二つ、どうだっていい事じゃないか』と

心の中で呟きながらも、二人の喜んだ顔が見れないのを残念に思う。

夕紀は自分を見て驚くだろうか？

そしてその後、あの少し低く暖かい声で自分を『お帰り』と迎えるのだろうか？

この時間なら、叔母の昼寝の時間だろう。

慎一郎は、自分の少しはやる心に眉をひそめながら、合鍵でそっとはいった。

ドアを開けると、ほの酸っぱい甘い香りが慎一郎を迎えたが、期待した事はなかった。

夕紀がない。
買い物だろうか？

叔母の部屋を覗くと、やはり昼寝の時間だった。
2階の客間に自分の荷物を置き、上着を脱いで部屋を出ると話し声が聞こえる。

浩二の声だ。
慎一郎が以前見た、二人の様子が、一瞬、脳裏をよぎる。

急いで、階下へ降りようとして、階段の途中で、二人の会話が耳に入る。

「君の味だ」

聞いたことないほどの浩二の甘い囁き。
誰が聞いても、彼が自分を抑えられなくなっているのは分かる。

浩一の体が彼女に覆い被さるように傾いている。

慎一郎は、その光景に焦りと胸の痛みを感じ、

浩一と自分のこの痛みを止めるべく声をかけた。

「ユキが作るのは、何でも美味しいからな」

慎一郎は間の抜けた言葉を自分で発しているながら、舌打ちしたいくらいだった。

もっと、何か言う事があるだろう。

浩二が視線を上げて、慎一郎を見る。

その目は、浩二が自分に向けた事がない種類の強い視線だった。

夕紀が、帰る浩二を玄関まで見送りキッチンに戻ると、我が物顔でクラッカーにジャムをつけて食べている慎一郎が目に入った。

眉間に皺を寄せて、難しい顔で食べている。

無理やりに食べなくてもいいのに。

そう思わせる、苦行に耐えているかのような顔つきだ。

「そんなに、お気に召さないのなら、食べなくてもいいです」

「ああ？浩二には食べさせたの？」

ジャムをプレゼントまでしていたというのに、俺には食べるなっ
て？」

「浩二さんにはお味見をもらっただけです。」

それに、この苺は浩二さんから頂いた物で、差し上げるのは当然で
しょー！」

「それにしても、甘い雰囲気だったな」

夕紀は睨むように慎一郎を見上げるが、

そんな彼女の視線など全く気にならないようだ。

「それで、ああいうのが好みか？」

「え？」

「浩二みたいな、いかにも、優しいですって言う王子様タイプがいいのか？」

「別に……。そんな……。」

「浩二はユキちゃんに優しいしな」

「彼は気づかってくれているだけです。」

「ふくん。そうか？あいつも報われんな」

「どういう事です？」

「わかってないなら、いいさ」

「……」

「だが、やめた方がいい」

「……何をです？」

「与える事ができないのに、あいつに気を持たせるな！」

一際鋭い声に、一瞬、身もすくんだが、勘違いも甚だしい。

夕紀は眉を寄せながら慎一郎の勘ぐりを否定する。

「彼にそんな態度はしていません」

「いいや、君はあいつを振り回している。」

「奴のキスを期待していたらどう？」

夕紀の怒りの表情にも慎一郎はいたって平気だ。

「そんな事をしていませんし、思ってもいません。」

「浩二さんだって、私の事をそんなふうに見ていないはずですよ。」

「それは、わざとか？それとも鈍感なのか？」

「はい？」

「わかっててそう言っているのか、それとも気付いていないだけなのか？」

「……………」

「後者の方が、より始末に悪い」

吐き捨てるように言われ、

夕紀は謂れのない非難をされているようで、納得いかない。

反撃の言葉が口から飛び出す前に、慎一郎が先手を打った。

「でも、ユキちゃんは俺の婚約者なんだから、あいつに踏み込ますな！」

「婚約者って……………。それは、あくまでもここだけです！」

「ここを離れたら、浩二と連絡でもとりあつつもりか？」

慎一郎は、浩二と自分の間に何かあると疑っているのだろうか？夕紀は、彼の思い違いを訂正すべく、大声を張り上げ言いきった。

「そんな事しません！」

夕紀の怒りなどどうでもいいと言わんばかりに慎一郎は宣言した。

「残念だが、ここだけじゃなくなったから」

「何がですか？」

「婚約者だという事が。」

これ以上聞くのが怖かったが、確かめない訳にはいかない。

「……どういう事ですか？」

「これからもだ。」

「え？」

「君が俺の婚約者だという事がだ」

「？何をいつたい……」

「君が由紀子のかわりに叔母に会った時から、

いや、この家に足を踏み入れた時から君が俺の婚約者だ」

握っていたジャムの瓶が、ごろんと音を立てて床に転がった事にも、夕紀は気付かなかった。

34 (後書き)

慎一郎、あんたって本当に……。

こういう時だけ『ユキちゃん』って……。

こんな奴が身近にいたら、思わず「キーッ!」となりそう……。

彼に我慢頂ける方、良ければお付き合い頂けると嬉しいです。

これ以上、叔母の家の中では、話す事は出来ないと、二人は、リビングから裏庭へと場所を移した。

夕紀はいつから、どこからこんな話になったのか分からなかった。そして、慎一郎が言っている事の意味が全くわからない。

「どういう事ですか？」

「さっき、聞こえなかったのか？君が俺の婚約者だ」

「私をからかっているんですか？」

「いや、全然」

「あなたは、由紀子と結婚するんでしょ？」

「いや、俺は由紀子とは結婚しない。君と、夕紀と結婚するのさ」

「そ……まさか……そんな事……。」

頭が真つ白だ。

慎一郎が夕紀の顔を目を細めて見ている。

『冗談だ』

彼の口からその言葉が出てこないかと、夕紀も見つめ返した。だが、彼は夕紀が望む言葉を言う事はなかった。

ここで、なし崩しには出来ない。

慎一郎にさっきの言葉を取り消して欲しくて、必死で、言葉を繋げる。

「私がこれからも婚約者だって、私と結婚するって、冗談でしょ？からかっているに違いないわ！

そんなに、私を困せたいの？私が困ってるのを見るのがそんなに楽しい？」

「困らせる？何言ってる？俺は君に結婚を申し込んだというのに。ひどい言われようだな。俺はいたって本気だよ」

慎一郎は、口元を可笑しげに緩める。

「……………本気って……………そんなはずないわ……………どういう事？」

「別に、取り立てて驚く事じゃないだろ？」

「驚く事じゃないですって！ついこの間まで、あなたは由紀子と結婚するはずだったでしょ」

「でも、今は君と結婚するつもりさ」

彼は、軽い感じで応えてくる。

夕紀は、どこがどうなつて慎一郎がこんな事を言いだしたのか、まったくもつてわからなかった。

自分と結婚するなんて……

4、5日前までは、話した事もなかったのに……。

「そんな……無理です。無理に決まっています！」

「なぜ？」

「だって、結婚つて一生の事です！」

「一生？ はっ！ そんな事、思っているのか？」

「そんな事つて！」

「ユキチャンは、やっぱり世間知らずなんだ。」

永遠の愛を誓うとか言っておきながら、あっさりと皆、離婚している。

今、何秒に1組が離婚しているか知っているか？」

「それりや、そういう人達もいるだろうけど……」

それでも、そういう人たちだって、最初は相手の事を愛していたはずよ。

一生、共にと思つていたはずだわ」

「おめでたいな！」

「な……！ 結婚は愛し、^{いた}労わり、信じて敬う相手とするものだわ」

「労わる？ 敬う？ 君は一体、いつの時代に生きているんだ？」

愛？ そんなものユキチャンは、まだ、信じているのか？」

「そんなものつて……」

先ほどから慎一郎はあざけりの表情を浮かべ
夕紀をバカにしたように見下している。

「君の周りに、愛しあつて結婚し、愛し続けている夫婦がどれだけいる？」

「……」

「君を引き取ってくれた由紀子の両親はどうだ？」

娘と妻はきらびやかに着飾るだけが一番大事なようだが……」

「そんな！」

「彼らは虚栄心にあふれ、父親は金を稼ぐだけが生きがいのようにだし、

母親と娘は、その金をどうやって使おうかのみ、考えているようだ。そう思えば、あの一家もお互いを思いあつた、いい家族かも知れないし、

それがユキちゃんの言うところの愛情溢れる家族ってことになるのか？」

由紀子一家の事を庇おうにも、夕紀は慎一郎を納得させる言葉が見つからない。

「高崎や節子叔母もしかりだ。」

慎一郎の口から出てきた意外な名前に、夕紀は目を見開いた。

35 (後書き)

グダグダ、フラフラなのは、

夕紀の性格のなせる技でしょうか？

グダグダ感が漂っていますか？

よろしければ、お時間が許す限りお立ち寄り頂けると嬉しいです。

浩二の父親の高崎・・・
そして節子・・・

思いがけない名前が慎一郎の口から出てきた。

戸惑い気味の夕紀に気付きながらも、慎一郎は話を止めようとしな
い。

「叔母は自分の財産を目当てに寄ってきたどうしようもない男に騙
され、
家族の反対にも耳をかさず、縁を切られて駆け落ち同然で結婚した。
甘い言葉を囁かれ、世間知らずな叔母を騙すのは容易かっただろう
な。」

慎一郎は、なぜか楽しそうだ。

だが、夕紀は彼のその表情の中に、辛さと悔しさが隠れているのを、
見た様な気がした。

「馬鹿な男を盲目的に愛し、尽くしたのに、優しくされていたのは、
金があるまで。

金が尽きたらあっさり、捨てられたのさ。
男にとっても、誤算だったんだろう。

一生の金づるを捕まえたと思ったら、その金が尽きたんだからな」

「……そ……ん……な……」

「金さえあれば、一生だまされ続け、そんなウソの愛情に叔母は浸っていられたのに、」

残念ながら、祖父は、金に困ったのを知っていても一切援助をしなかった」

「……」

「目が悪くなったのだって、病気になっても医者にかかる金さえ残っていなかったんだと。祖父の許しを得て、国枝の家に戻ってきたときには、」

心身共にボロボロだったらしい。ひどい話さ。」

慎一郎の口調も表情も冷めきっていた。

夕紀は節子の辛すぎる、そんなひどい話は、もう聞きたくなかった。

「次は高崎か」

そんな夕紀の様子にもおかまいなしに、慎一郎は続ける。

「浩二の父親の高崎は、若いころから祖父の屋敷に仕えていた。

彼は、ずっと叔母を想っていたらしい。だが、所詮、使用人とそこのお嬢様だ。

馬鹿らしい考えだが、身分違いとでも思ったのか、

報われない想いを悶々と抱え、自分の想いを告げる事はしなかった。

……健気じゃないか？ ただ、心の中で思っているだけなんて」

慎一郎はその当時の高崎を思い出したのか、バカにしたような言葉

を付け加えた。

「そのうち、叔母は結婚し、高崎も浩二の母である、屋敷のメイドと結婚した。」

「ここで、お互いが幸せになれば、言うことなしだっただろうに。めでたしめでたしって奴か？」

慎一郎が、口元を歪める。

「だが、高崎の叔母を想う気持ちに浩二の母親も気付いてしまったし、

高崎自身も叔母への想いを立ち切れなかったらしい。

二人の仲はすぐに冷え切った物になり、女はメイドを辞め、

浩二と高崎の前から、姿を消したよ。

噂によると、屋敷内の他の使用人と手に手を取りあって逃げたって話だ」

何が面白いのだろう。

慎一郎は口元を歪めニヤリと笑った。

「叔母には、あんなに優しい高崎だが、自分の妻への態度は冷たいものだったそうだ。」

高崎は、叔母と結婚できないから、浩二の母親と

これでもいいかって結婚したようなものだ。

誰かをかわりにして、結婚するってというのは、昔も今も良くある話さ。」

慎一郎の周りのあまりにも、寂しすぎる話をこれ以上聞くのは辛い。浩二の笑顔を思い浮かべる事ができるだけに余計、心が痛んだ。

浩二だって、複雑な気持ちを持ちながら成長しただろうに、彼は、まっすぐな優しい人だ。

慎一郎の周りにも、愛のある暖かな人達がきつといたはずだ。彼にそれを思い出してほしい。

夕紀は、勇気をだして、慎一郎に告げる。

「でも……、貴方のご両親は？」

有名な映画プロデューサーと主演女優だったと聞きました。

大恋愛の末、結婚したって……。」

「何か勘違いしていないか？」

「そんなはずは……。だって。由紀子がそう言ってます……。」

慎一郎は、今度こそ、大声で笑った。

そして、夕紀の両肩に、両手を置き、揺さぶらんばかりに話した。た。

「ああ、プロダクションが作った話をみんな信じているんだっただな。

若い女優に押され気味の落ちぶれた、昔の名声にしがみついた女優が、
畏にかけるかのように、力のあるプロデューサーを手に入れた。
事實は、そんなひどい話さ。」

夕紀はこの話をこれ以上聞く強さがなかった。
思わず耳を塞ごうと手をやったとたん、
両肩から手を外し、夕紀のその手をむんずと掴んだ。

「なぜ、耳を塞ぐ？」

あまりにもひどい話に、世間知らずなユキチャンは耐えられなくな
ったか？」

「ごめんなさい・・・」

「何を謝る必要がある。真実を知るのは悪い事じゃない。聞いてき
たのは君だ。」

最後まで聞きたいだろう？それとも、そんな汚い話、君の耳には辛
すぎるか？」

だが、君はここにいる以上、俺の婚約者である以上聞く義務がある。

「

夕紀はこれほど憎しみをこもった目をしている人を見た事がなかつ
た。

目をそらしたいのに、魅入られたように彼を見つめてしまう。

心臓がドキドキしている。

恐怖からか、それとも・・・。

36 (後書き)

ちよつと、慎一郎のきつい言い方が、
せつかくのゴールデンウィークを台無しに……。

お読み頂いた方が、ぐったりされないといいのですが……。

多くの方に読んで頂けて本当に嬉しいです。

ありがとうございます。

慎一郎の話、まだ、続きます。

五月晴れに相応しくないかもしれませんが、
よろしければ、この後もお立ち寄り頂けると嬉しいです。

慎一郎から目を逸らそうにも、なぜか出来ない。

「交際がマスコミにばれて、結婚せずには許されない女優の年齢だ。世間的制裁を受け、自分の名声に傷がつくぐらいならと、男は仕方なしに結婚証明書にサインしたのさ。」

その事で、女優は、再びスポットライトを浴びる事ができ、舞台の中央に戻れた。

プロダクションは裏から手を回し、世紀のロマンスに仕立て上げた。これは、男にとっても女にとっても好都合だった。

映画なら、ここでENDマーク、二人は末永く幸せでしたって出来ただろうに、

そうは行かなかったんだ。」

「もういいです……」

「なぜ？ 続きがあるんだ。ぜひ、聞きたいだろう？」

再び、慎一郎が再び口をニヤリと歪めて夕紀に笑った。

だが、その表情は、傷ついた心がそのまま表れているかのようだった。

夕紀は首を力なく何度も振る。

口元を歪めつつ慎一郎はそんな夕紀を容赦なく、掴んだ夕紀の手を離そうとしない。

彼が覆い被さるように、夕紀に体を傾ける。

「ここからが一番いいところだ。聞き逃すなんてもつたいない事するな」

夕紀は、この結末を彼に語らせてはいけないと思った。
止めようと口を開きかけたが、遅かった。

慎一郎は、話を紡ぎだした。

「計算が狂ったのか、はたまた、失敗したのか、女優は妊娠してしまっただ。」

だが、女は遅しいよな。彼女はそれも一つの自分の売りにした。
すぐにマスコミに発表し、幸せなマタニティライフを延々と語っていたらしい。

マスコミも結婚、妊娠という幸せの数式のような道のりを面白おかしく報道したそうだ。

そして、産まれてきたのは男の子だった。」

夕紀は、もちろん、彼がその生まれた子で、これから語る話が、辛い話だと言うのは

聞かずともわかっていた。

彼の表情が雄弁に物語っていたから。

「女優は、子供がかわいいとは思えなかったらしい。

産まれてすぐに仕事に復帰するとともに、子育ては他人に任せた。

復帰当初は、何とか良かったんだが、だんだんと仕事の幅が狭まり、
だしたのに気付き、
我慢出来なかった。」

夕紀は、幼い慎一郎が一人部屋の片隅で涙を堪えている姿が目に見え
かぶようだった。

「生活感を出したくない女優は、子供の影が足かせになり、

男は、遊びを繰り返して、家には寄りつこうともしない。

もはや、子供は邪魔ものでしかなかった。

二人は離婚へ向けて話し合いを始めたが、最後までもめたのは、親
権だった。

二人とも相手に押し付け合い、何度話し合いを持っても平行線のみ
ま。

最後には、車の中までも、いがみ合っていたはずさ。気持ちが高ぶ
っていたんだろう。

スピードの出しすぎでカーブを曲がり切れず……。」

夕紀は息をする事も辛かった。

彼の表情の裏にある、その傷つけられた心を癒してあげたい。

「これが、一組のカップルの終焉さ。

君が夢見ているのとちよつと違ったな？」

最後の、慎一郎の悪魔のような心の葛藤を映し出した笑顔から
目を離せなかった。

彼の小さいころの姿が思い起こされ、その時の彼を抱きしめて、包み込んでやりたかった。

いや、自分をすごい力で掴んで、今でもその傷ついた心が癒されていない慎一郎を

反対に抱きしめたい思いで胸が苦しい。

「それで、その子供は、その後……。」

「子供か？」

せめて、彼の周りに、大事に包んでくれる誰かが傍にいてほしかった。

「彼の周りはいつも、使用人がいて、何一つ不自由はなかったさ。

幸いにも、金があり、力もあるバツクを目当てに寄ってくる奴は男女を問わず、大勢いた。

その子は、幼いころから、人のずるさを嫌ほど見て育った。

まあ、それが、今の仕事に役立つているのだから、人生は何一つ無駄な事はないな」

自分の結婚観を彼に話しても分かってもらえないのは仕方のない事だろう。

彼が人との絆に重きを置いていないのを、責めるのは夕紀には出来ないし、

また、自分の考えを押しつけても意味のない事だ。

自分の腕を掴んでいた慎一郎の手に、そっと包み込むように手をのせ、
やんわりと腕から彼の手をのけた。

「それなら、私じゃなくてもいいじゃないですか？

もっと、ドライに結婚を考えている女性はいくらでもいるんじゃない？」

「そうだ。誰でもいい。金があれば満足して俺の妻役をにこやかに笑ってやってくれるなら」

「分かっているんだったら」

「だが、叔母が気に入ったのは君だ。叔母を失望させたくない。」

「そんな理由で・・・」

「俺にとつては充分な理由だ。」

「両親が死んだあと、叔母だけが俺に無償の笑顔を降り注いでくれた」
「・・・」

「俺たちは結婚する。これは、君が叔母の前に現れた時に決まったんだ」

夕紀は、慎一郎の瞳を力なく見つめ返し、首を振る事しか出来なかった。

あの後、慎一郎は何事もなかったように、リビングに戻っていった。そして、自分の作った料理を以前と変わりなく食べ、節子とも、にこやかに会話をしている。

夕紀は、なぜかその平然とした慎一郎を見ていると涙が浮かびそうだった。

それからの数日は、幸せな疑似家族のようでもあった。

節子の楽しそうな笑顔と夕紀の湯気が立ち込めた手料理、そして、慎一郎の垣間見る優しさ。

叔母が気がねすることなく、それとなく暮らしやすいよう、彼は心配りをする。

ゴミ出しや風呂掃除も気付かぬうちに行っている。

雨が降りそうだからと、洗濯物を取り入れようとしたのには驚いた。

驚いている夕紀を横目に、節子はケラケラと笑う。

「驚いた？ 慎一君はいつもそうよ。
料理や洗濯は出来ないけど、掃除だってチャッチャといつの間にか
してくれるよの。結構、使えるわよ」

節子の遠慮のない物言いにも、慎一郎が声を荒げる事はない。

「自分が気付いた事や、出来る事ぐらいするぞ」

慎一郎は、事もなげに言う。

夕紀は、ますます、国枝慎一郎という人が分からなかった。
そして、彼の複雑な内面を理解したいと思っっている自分がある半面、
これ以上、理解する必要なんてないと
突っぱねる自分があるのに、矛盾を感じていた。

高崎が戻ってきた。

節子の嬉しそうな笑顔とはしゃいだ声に、慎一郎から聞いた話を思
い出しても、
夕紀は嬉しかった。

過去はどうあれ、今の二人はお互いを労わりあい、頼りあい、

支えあつて、共に暮らしていると思う。

横にたたずんでいる慎一郎を見上げると、表情からは何も読みとれない。

「なんだ？」

「いいえ……。いいんですよね？」

「何がだ？」

「……お二人……。」

「俺が何か言うと思うか？」

久しぶりの再会の華やきが終わった頃、
慎一郎が切り出した。

「高崎も戻ってきたし、ユキを連れて帰ろうと思います」

「そう。寂しくなるわね。でも、いつまでも、引き留めておけないわね。」

「ユキさん。私が留守の間、節子さんを見て頂き本当にありがとう
ございました」

浩二の父親の高崎は、浩二に似て、優しく、穏やかな笑顔を浮かべている。

その器の大きい表情に夕紀も思わず、笑顔を返す。

「いいえ。お役に立てたかわかりませんが、私もここに来て、
本当に楽しかったです。」

「ユキちゃんがいてくれて、すごく助かったわ。いつでも、遊びに
来てね。」

慎一君が連れて来てくれないなら、ユキちゃんだけでも大歓迎よ」「
「ありがとございます」

「そうですね。浩二とも仲良くなったみたいだし、いつでも迎えに行きますよ」

高崎の言葉に、慎一郎の表情が一瞬だが、変わったように思えた。もちろん目の不自由な節子と久しぶりの高崎にはわからないだろう。

「叔母さんからせつつかれる前に、また、二人できますよ」

「あら、珍しい。慎一君は呼んでも来ないのに」

夕紀は鼻声を隠しながら、節子に声をかけた。

「叔母様、お体に気をつけて下さいね。」

それと、健康のためにもお散歩は続けて下さいね。」

「ユキちゃん、何泣いているの。」

慎一君もあいつてくれるんだから、又、すぐに会えるわ。」

そういう節子も夕紀につられたのか、鼻声だった。

夕紀は、節子と会うのはこれが最後かもしれないと

この時間が終わるのを名残惜しく思いながら、

これ以上、踏み込んだ事は言えなかった。

部屋に漂う湿っぱいが暖かな時間に、慎一郎が穏やかに別れを告げた。

「ユキ、夕方の渋滞には巻き込まれたくないから早めに出よう。」

慎一郎の言葉に頷く夕紀に、高崎が声をかけた。

「浩二もすぐに来るよ」

荷物をまとめる為に踏み出した足が、一瞬とまった。

「そうですか。浩二さんに会ってお礼が言えますね」

「急だから驚いていたよ」

慎一郎の冷えた視線がいたかった。

やはり、彼を理解するのは難しいかもしれない。

38 (後書き)

ゴールデンウィークの間に訪れて頂いた方、
本当にありがとうございます。

嬉しいです。

心安らかな休日、慎一郎の無礼の数々?
あんたって 感じてしょうか?

これからも、よろしければお付き合いください。

夕紀が別荘を去ると聞いて、浩二は急いで駆けつけた。

道すがら、慎一郎の婚約者という夕紀に自分が何を言えるのだろうか。そんな自問自答を繰り返しながら、想いは一つだった。

ただ、顔を見たかった。

彼女から醸し出されている優しさ、暖かな声、そして穏やかな微笑みの
傍にいたかった。

浩二は夕紀の前に、口を開くのをためらっていた。

一度開いてしまえば、とめどなく、彼女をここにとどめておく言葉が流れ出るようで怖かった。

だが、彼女がここを去っても自分の事を忘れないでほしい。

何を伝えればいいのだろう……。

浩二は夕紀にいつものように笑いかけ、

ついに迷った挙句、ありきたりな言葉を口にした。

「戻るんだね」

「ええ。本当にいろいろお世話になりました」

「いいや。僕の方こそ、楽しかったよ。」

「浩二さんが、本当にいろいろ気にかけて下さったので、私も楽しく過ごせました」

「また……いや、ぜひ、来る時は、知らせてくれる？」

「もちろんです」

言葉が続かない。

浩二は、自分を見上げている夕紀の穏やかな表情を見つめる。

「もし……もし……」

「？」

浩二は歯切れ悪く、言い淀んだ。

慎一郎の視線が気になったが、意を決して想いのホンのひとかけらを伝える。

「何か、困った事があったら、僕を思い出して……」

「……浩二さん……」

夕紀は、この会話を慎一郎が聞いていなければと願った。そして、浩二の優しい言葉に何も返せない事と最後まで嘘をついている事に
心苦しい思いで一杯だった。

慎一郎は荷物を車のトランクに入れながら、二人の姿を眼の端にいれ、その会話、その雰囲気、全神経を尖らせていた。

浩二が切なそうに夕紀を見ている。

慎一郎は、浩二の想いの強さを感じた。

何がだ？

夕紀の何が、浩二にそんな顔をさせるのだろうか？
そして、浩二のそんな態度に腹を立てる自分に、合点がいかなかった。

彼女はどこにでもいる普通の女性なのに。

慎一郎には、わからなかった。

だが、浩二の想いを成就させてやるつもりなど毛頭ない。
夕紀は自分の婚約者だ。
その事を、かえるつもりはない。

「それじゃ、叔母さん気をつけて」

わざと大きな声で、浩二の視線を途切れさせた。

荷物を積み終わり、二人が節子に向かい合うなり、節子の何気ない言葉に夕紀は固まってしまった。

「結婚式はいつの予定？」

「用意が整い次第」

「あら！打てば響くように返ってきたわね。でも、そうね。

慎一君も一旦仕事が入ると、身動きとれないものね。早めにした方がいいわ。

公私ともにユキちゃんに支えてもらいなさい」

「ええ。出来れば、このオフの間に身近な人達だけにでも、正式にユキを紹介しようかと思っています。」

「そんな！」

「ユキちゃん？」

夕紀の叫びにも似た声に節子は驚いた。

そして、浩二は唇を噛みしめている。

そんな二人にお構いなしに慎一郎は悠々としている。

「ああ、ユキには何も言っていなかったな。」

驚かせようと思って黙ってて悪かった。」
「・・・・・・・・」

言葉とは裏腹に、慎一郎は全く悪いと思っていないようだ。

「そうなの。でも、慎一君、だめよ。結婚は女性にとって、すごく大事な行事なの。」

彼女の気持ちを尊重して進めてあげてね」

「ユキの気持ちを尊重していたら、一向に前に進まないんですよ」

「おや？ その言葉からすると、この結婚は慎一郎君の方が乗り気なんだね」

それまで黙って見ていた高崎の言葉に、

ニヤリと口元を歪め、これ見よがしに夕紀の手を握った。

「そうです。ユキが逃げないように明日にでも結婚したいぐらいです。」

その手を振りほどかないようにするのに、夕紀は神経を集中させた。

夕紀は、3週間ぶりに自分の本来のあるべき場所に戻ってきた。

ほんの少し、留守にしていただけなのに、この部屋に違和感を感じる。

自分の居場所はココデハナイト……。

荷解きもせずに、ベッドに横になり、慎一郎との車の中での会話を思い起こし、

夕紀は途方に暮れていた。

「どういう事です?」

「何がだ?」

「節子叔母様に言った事です!」

「そのままだ」

「結婚の話だって、私は同意していません。それなのに、紹介つて……。」

「まだ、そんな事言ってるのか?」

慎一郎のうんざりした声音に夕紀は怒りを抑えるのが難しい!

「まだって……！」

「もう話も進んでいる」

「進んでいるって？ 何がですか？」

「由紀子には話した」

「話した？」

「いつまでも黙っていては仕方のない事だろう？」

「そんな……ひどい……」

寝耳に水の話にショックを受けている夕紀を横目に

慎一郎はいたって平気な様子だ。

「ひどい？ 何がだ」

「私の了解も無しに、いない所で話を進めるなんて……」

「あの場所にいたかったのか？」

まさかな。でも、君があの場合にいても楽しめたかもな」

夕紀が訳がわからないと言った顔で、キョトンと慎一郎を見上げた。

「由紀子はまさかばれたとも知れず、俺の呼び出しに素直に応じてくれたよ」

夕紀は、慎一郎のこの後の話が、どう転ぶか、その場にいらなくても、分かるようだった。

「由紀子とは連絡を取り合っていたんだろう？」

彼女は叔母の様子や家の間取り、立地など、いろいろと、さも自分がいたかのように

話してくれたさ。でも、俺が、全てを知っているとわかると、最初は、自分が悪かったと、彼女にしてはかなり下手に出ていたが、婚約取り消しの俺の意志が固いとわかると、今度はすごい剣幕で怒りだしたよ」

目を丸くしている夕紀をみながら慎一郎は思い出し笑いをしている。

「何をニヤニヤ笑っているんですか？

何も可笑しなことじゃないでしょ！

急に婚約破棄を言われた由紀子の気持ちを考えると笑うなんて出来ないはずだわ！」

その言葉を鼻で笑うかのように反論をしてくる。

「君は本当に、従妹の事を知らないらしい。安心しろ。

彼女は、すぐに立ち直ったさ」

「立ち直るって……」

「今回来れなかった理由、ユキも知っているんだろ？」

映画のオーディションを受けていたらしいじゃないか」

「……それは……」

「由紀子を責めているんじゃないさ。

スポットライトを浴びたいという彼女の願望は知っていたからね。」

「それなら、由紀子を許して結婚をしたっていいはずよ。」

「いや、もう、君を見つけてしまった以上、自惚れの強い、

目立ちたがり屋の奥さんはいらない」

「……どうせ、私は地味です」

夕紀は自分を卑下するつもりはないが、ついつい嫌味っぽく言ってしまう。

慎一郎は夕紀の言葉に眉をひそめる。

「そうは言っていないだろう?」

「でも、由紀子と結婚の約束をした時は、誰が見ても素敵な奥様が良かったんでしょ」

「そうだな。確かに由紀子は美人だから、目を引くさ。

彼女は、延々と自分の美しさについて語っていたよ。

そして、自分と結婚する事がどんなに、素晴らしいかを俺にわからせて、

婚約破棄を考え直させたかったようだな」

夕紀はその光景が目には浮かぶようだ。

由紀子の釣り上がった目を脳裏に浮かべ、ぞっとした。

「まあ、自分の魅力が通じなかったと知るのは、彼女にとって、屈辱的なことだろうしな」

「由紀子はスタイルもいいし、美人だし……。英会話だってできるわ。」

きつと、外国へ行っても自慢の奥さんになれるはずです」

「確かにそうかもな。でも、彼女との婚約はなくなった。

別荘で君が叔母と仲良くやっているのを見て、思い直したのさ」

「そんな事で……」

「いや、俺にとっては、叔母の嬉しい顔を見るのは、大事なことだ。」

「だからって、好きな人を悲しませるなんて……」

「好きな人って誰の事だ? 君は馬鹿か?」

わざと、君は理解してないフリをしているのか？それとも、余程おめでたいのか？」

「？」

「もしかして、俺を怒らせたいのか？」

慎一郎は、夕紀との噛みあわない会話にイライラの頂点が来ようとしていた。

40 (後書き)

夕紀のグダグダがまた……。

慎一郎、イラついています。

クレパスもイラついています。

この足踏み状態いつまで続くのでしょうか？

いつも、お立ち寄り頂きありがとうございます。

今回のイライラも少し、続きます。

よろしければ、お付き合ってください。

いつの間にか、車は路肩に止まっていた。

それもそうだろう。

慎一郎は、シートベルトをはずし、片手をハンドルに、もう片方の手を夕紀のシートヘッドにのせて、体ごと夕紀の方を向いていた。

彼が眉間に皺を寄せて自分を見ている。

夕紀は堅い態度で、口をぎゅっと結び、顔だけ向けて慎一郎の目を見返す。

「俺は、由紀子を好きだった訳ではないし、彼女も俺の事を愛していたわけじゃない。

何度言ったらわかる！」

「でも、少しは好意があったんでしょ？だから、結婚しよう」と

「彼女が俺の妻というポジションを文句言わず好んでやると判断したから

結婚しようとしただけだ。」

「？」

「何度も言わすな！彼女なら俺が構ってやらなくても、好きに金を使い、

楽しむだろう事を予測できたからだ。

俺は、仕事で何カ月もいなかったり、不規則な生活ですれ違いになる事も多い。

家をかえりみる事はないだろう。
だからといって、そういう事に、ぐちぐち文句を言われたくない。
彼女はそんな事、全く気にしないだろう。俺の妻という肩書が手に
入ればな。」

何度聞かされても、夕紀には納得のいかない話だ。

二人の間に少なからず、好意のカケラがあったはずだろう。
じゃなければ、どうして結婚しようと思ったのだろう。

彼の、周りの人の結婚の事は確かにつらいものばかりだったかもし
れない。

だからといって、どうして自分まで、好きでもない人と結婚するの
だろう？

腑に落ちない顔をしている夕紀に、慎一郎はイラついた様子を見せ
る。

「そろそろ、同じ事を何とかの一つ覚えのように繰り返すのはやめ
た方がいい。」

「でも、私は……」

「止めないなら無理やり、塞いだ方がいいのか？」

「何を？」

「その口だ」

夕紀はその言葉に目を丸くした。

「塞ぐって……？ べつやって？」

「…………ユキちゃんは、それをお望みですか？」

彼の口の端が上がり、ゆっくりと顔が近づいてくる。

夕紀はハッと、一際大きな声を出した。

「それなら！」

慎一郎は、そのままの位置で動作をとめ、視線を少しの間、宙にやった後、ゆっくりと夕紀に戻した。

「まだ、何が言いたい？」

「でも、それなら結婚しなくても構わなかったんじゃないんですか？」

「そこか…………。いい所に気がついたな！」

この期に及んで、慎一郎は自分を馬鹿にしているようだ。

慎一郎は手を夕紀のシートから外し、自分のシートに深く座り直し、車を再び走らせる。

「別にしなくてもいいんだが、面倒なんだ」

「？」

「パーティや事ある」ことに、あわよくばとすり寄ってくる女たちが、

「

「あわよくば？」

「そうだ。売り込もうと必死なのさ。夢を掴みたいんだ。

その心意気は買うが、ベッドまで押しかけられる方はたまったもんじゃない」

「ベッド……」

「一々相手もしてられないし、断れば、耳にするのも気分が悪い捨て台詞を吐かれる。

ひどい時には、マスコミに嘘八百流されて、スキャンダルからでもいいから

自分が有名になりたいのさ。

だから、そんな災難から避けるには、結婚している事が一番だ」

「災難って……」

「由紀子なら、まあ、浮気を見つけても大事にはしないとと思ってたが」

「……」

「なんだ？」

「浮気……」

「ああ？」

「結婚しても浮気するつもりなんですか？」

「その質問するって事は、俺との結婚を了承したととってもいいんだな」

「それは！」

「ユキチャンが、ちゃんと俺を満足させてくれたら、浮気はしない約束するよ」

慎一郎は、これ見よがしにウィンクして見せる。

夕紀は顔を赤くしながら、なんて無理な事を言うのかと齒ぎしりしそだった。

経験のない夕紀がどうやって、慎一郎を満足させる事ができるのだらう。

という事は、浮気する事を了承したうえで結婚しろといていると同じだ。

ぐらぐらと沸騰しそうなほど、頭の中が怒りで煮えたぎっている。

どうやってたら、この話を取りやめる事ができるか、

夕紀はその事に気を取られていると、いつの間にか車は停まっていた、

気付いたら夕紀のマンションの前だった。

「何よりも叔母を安心させたいというのが第一だがな」

節子の事を言われると、夕紀は何も言えなくなる。

話が平行線のまま、夕紀は助手席のドアを開け、車から降りようとした時、慎一郎が思い出したように付け加えた。

「そつだ、あの時は怒っていたが、今は大丈夫なはずだ」

「え？」

「由紀子だ。オーディションには落ちたが、別の映画に出演できるよう

口添えしてやったんだ。

だから、俺たちが結婚する事に彼女はもう反対していないはずだ。」

なんて、用意周到なのだろう。
全ての面において、ぬかりのない男なんだと、より忌々しく思った。

41 (後書き)

ご指摘を頂き、誤字を訂正させて頂きました。
ご連絡頂き、ありがとうございます。

どれくらいボーっとしていただろう。

夕紀が物思いにふけっていると、

由紀子が鼻歌交じりの、上機嫌の様子で帰ってきた。

慎一郎はああ言ったが、それでも由紀子がどう出てくるかわからず、夕紀は、こわごわ声をかけた。

「由紀子？」

「あら、夕紀！ 帰ってきたの？」

「ええ、あの」

「ああ、婚約云々のことなら、慎一郎に聞いているわ。」

あっけらかんと言いつつ。

「そ、そう。それで・・・」

「いいのよ。別に。」

彼、その代わり私をあの有名な監督の映画に推薦してくれたのよ。

それも、その映画、アメリカ公開を視野に入れているらしく、

誰でもが出演出来る訳じゃないのよ

「いや・・・そうじゃなくて」

「私もしかしたら、演技への天性の才能があつたのかもしれないわ。カメラテスト一発で合格したのよ」

由紀子は、夕紀が言葉を挟む隙を与えない。

「そう、それは凄いわね。それで」

「セリフだってあるのよ。」

「・・・良かったわね・・・」

「だから、この家、売る事にしたから！」「売る！？」

「そう。撮影所が遠いし、アメリカでも撮影があるんですって。

私のこの機会にハリウッドに行ってみようかと思って」

「ハリウッド？」

「ええ、うまくいけば、向こうのエージェントに目をつけられるかもしれないしね」

由紀子は夢のような事を真顔で話している。

そんな事、余程の実力と運を兼ね備えた者にしか起きるはずない。

「由、由紀子、落ち着いて」

「何を？」

「落ち着いて良く考えてみて」

「充分、落ち着いているわ。だから何を考えるの？」

「そんな、何でもうまくいくなんてまずあり得ないわ」

「どういう意味？」

「ハリウッドに拠点を移してどうするの？」

「目に留まるまで演技と英語の勉強でもしておくわ。」

でも、そんなことする間もなく、お呼びが掛るかもしれないけどね。

まあ、時間が少しくらいかかって、大丈夫よ。

パパがいくらでも出してくれるわ。」

だめだ。

今の由紀子に何を言っても聞く耳を持つとうとしない。

だが、自分にとって引つ越すなんて無理な話だ。

彼女とルームシェアを強制的に決められて、前を移ったばかりだし、休みがちな働き方だった為に、蓄えもほとんどない。

「だから、夕紀、荷物の整理を始めてね。

来月には、ここを引き払う事になっているから」

「ちよつと、待って、引き払うって………。私はどうすればいいの？」

来月なんて急すぎるわ」

「あら！慎一郎のマンションでも行けばいいじゃない。

凄いいマンションに住んでいるっていう噂よ」

「そんな……」

「結婚するんでしょ。あなたにとって、これ以上の男性は見つからないわよ。

私のお古で申し訳ないけど。」

「……」

「でも、洋服だって化粧品だって、私のお古をあげていたんだから、結婚相手だって、お古で十分よね」

ひどすぎる言葉に、夕紀は頭痛がしてきた。

彼の事をそんなふうにするなんて！

慎一郎の事を、お下がりのように言われたのに、とにかく腹が立たた。

夕紀は、由紀子の呆れた言葉の数々の中で

語られていない事があるのに気付いた。

「本当にそれでいいの？」

「何が？」

「だって、彼を愛しているんでしょ？」

「誰を？」

「慎一郎さんよ」

「ああ、慎一郎ね。そうね。彼が、今まで出会った中で、

私にとって、一番、夢に近い男性だった事は本当よ」

「夢に近い？」

「そうよ。私が女優になりたかったのは知っているでしょ。

彼のあの人を引き付けるオーラは、映画界でも特別よ。

彼の横にいたから、オーディションの話が舞い込んできたのは、事

実よ」

「……そんな……」

「今までは、そんな人たちの目にとまる所にいる事が出来なかったけど、

国枝慎一郎の横にいただけで、芸能関係者は注目してくれるわ」

「……まさか……」

「私が注目されたのは、彼と知り合って横にいる権利を得たからと、言う人もいるけど、そんなことどうだっていいわ」

「……彼を利用するために近づいたの？」

由紀子の言葉に夕紀は自分の耳を疑った。

42 (後書き)

とうとう、由紀子登場です。

期待通りの働きをしてきているか？です……。頑張ってくれているとよいのですが。。。。

大勢の方に、お立ち寄り頂き、本当にありがとうございます。嬉しいです。

途中、へこたれないように更新していきたいと思います。お時間のある方、これかもよろしくお願いします。

夕紀の言葉に、笑みすら口元に浮かべながら、小首を傾げた。
由紀子が人に取り回している時にする仕草だ。

「人聞きの悪い事、言わないで」

「でも、そう言う事でしょ！」

「あら、彼だつて、私を体のいい虫よけぐらいにしか思っていないか
つたんじゃない？」

「・・・・・・・・」

「女優になれないのなら、彼女たちが羨むポジションを手に入れた
かったの。」

彼は、自分の隣の席への争奪戦に飽き飽きしていたみたいだしね。
需要と供給がうまくいったって事かしら？」

先ほどから夕紀の強張った顔を見ながら、由紀子は悪びれもせず、
艶やかに笑う。

「・・・・・・・・信じられない・・・・・・・・」

「でも、もう、彼はいらさないわ。」

私、自分の力で夢を掴んだんですもの。だから、遠慮なく彼と結婚
していいわよ」

夕紀は、急展開した話についていけない。

彼の事を愛していたのではないのか？

だから、泣き落しのように夕紀に節子の世話を頼んだはずじゃなかったのか？

自分の勝手な思い込みだったのか？

夕紀子が彼の事を愛しているから、身代わりを引き受けたのに、それが根底から覆される。

「彼を愛しているって言ってたじゃないの！」

「あら？ そうだったかしら？」

「由紀子が慎一郎さんと結婚を望んでいたから、彼と必ず結婚したいからって、

私が嘘をついて叔母様の世話をする事にしたんでしょ！

それなのに……。」

「あの時はそう思っていたのかもね」

「あの時はって……。」

「もういいじゃない。夕紀だって、どうしても嫌だったら断ってくれたらよかったのに。」

夕紀にも何かしら思う所はあったから、引き受けたんじゃない？

でも、そのおかげであなたは彼と結婚できる事になったんだから、感謝してほしいくらいだわ」

由紀子の言い草に、夕紀は口を開けても何を言えばいいのかわからず、

パクパクするばかりだ。

あの時、やはり断るべきだった。
だが、由紀子や叔父たちから、一刻も早く逃れたかった。
そんな自分の思惑に気を取られ、付け入る隙を与えたのかもしれない。

「慎一郎は、あなたが夢見るようなマイホーム型の男じゃないけど、才能もあってお金もあってお買い得よ。

夕紀、良かったじゃない！

たとえ、うまくいかなかったとしても、離婚のときには
がっばり慰謝料が貰えて、この後食べて行くのに困らないわね」

夕紀の鬼のような形相にも気付きもせず、
いや気付いているはずなのに、知らないふりで由紀子はバスルーム
に消えた。

夕紀は怒りを鎮めるべく、何度何度も大きな深呼吸を繰り返さなければならなかった。
いや、繰り返したが無駄だったといえればいいだろうか。

この憤りは何に、誰にぶつければいいのだろうか。

翌日、目が覚めるとまだ、頭痛が続いているかのようだった。

ここ数日の自分の周りに起こった事について行けていない。

それなのに、追い打ちをかけるように慎一郎から連絡がきた。

来週の日曜日、彼が監督をした映画の興行成功の記念パーティーへの
出席要請だった。

慎一郎は、オフィスの大きな窓に左肩をもたせかけ、外の景色を見ながら携帯を取り出し、電話帳を開いた。

『夕紀』

携帯が彼女を呼び出し始める。

我知らず口元に笑みが浮んでくる。

別荘から帰るという時に、彼女と赤外線データ交換をした。

お互いの連絡先が必要だとしぶしぶ納得させ、彼女の困った顔に気付かぬふりして強引に携帯を取り出させた。

パステルピンクの自分の携帯を見ながら、

小柄な彼女が頭を右に左に動かし、

自分の顎の下で彼女のつむじがカクカクしていたのが思い出される。

「あれ？ 赤外線ってどうやってするんですっけ？」

的外れなことを聞いてくる。

まさか、さっき困っていたのは、赤外線でのやり取りが分からなかったからなのだろうか？

柔らかな手で、携帯のいろいろな所を触っては、首を傾げている。慌てて困っているはずなのに、なぜか、おっとりとして見えるのは、彼女の持つ雰囲気だろう。

「やったことないのか？」

「あります！」

「でも、出来ないじゃないか……」

「……ド忘れただけです。」

「かしてみる」

夕紀がすつと携帯を渡してきた。

自分の携帯を人に触られる事に、抵抗はないようだ。

普通の夕紀はおっとりとして素直で、おおらかなうえ、許容範囲が大きいと慎一郎は感じていた。

「すごい！すごい！違う機種でも出来ちゃうなんて。」

「だいたい、分かるだろう？」

「そうですね？」

「それより、自分の携帯も扱えないって……もしかして、機械オンチか？」

「……興味がないだけです」

「他に興味がないのは？」

「……他にですか？……うんん……」

そんな真剣に考える事でもないだろうに、また、つむじがカクカク

している。

それを見ているとつい、からかいの言葉が出てくる。

「俺か？」

その言葉に、夕紀は応戦しようときっと慎一郎を見上げる。

彼を負かす言葉を考えているのだろう。

思っている事が顔に出すぎだ。

それじゃ、夕紀の応戦などたちまち、慎一郎の返り討に合うのは目に見えている。

彼女をからかう言葉をならいくらでも、繰り出せる。

慎一郎は夕紀とのやり取りの時間が楽しかった。

叔母の家での彼女は、少し調子つばずれの歌を口ずさみながら、いつも楽しげに家事している。

慎一郎はそれを時には笑いながら、ソファに寝転んで書類を読んだり、

考え事をしていた。

普通なら、気が散る所だろうが、なぜだが、夕紀の少し低い声は気にならない。

その声をバックミュージックに、いつの間にかうたた寝をしてしまっている。

起きた時には、必ずブランケットが掛っていた。

そのブランケットの感触が、軽く暖かに感じられ、起きるのが残念なくらい、いつも気持ちのいいうたた寝が楽しめた。

7回のコールで夕紀が電話に出てきた。

「はい」

「明日の事、覚えているだろうな」

「・・・何の事？」

外のビル街にやっていた視線が、宙を浮いた。

「やっぱりな・・・ 映画のパーティーの件だ」

「・・・私に行く必要がありますか？」

「あるに決まっているだろう。そこで、君をみんなに紹介する」

「・・・」

「夕紀！」

「まだ、結婚するって」

素直だと思っているのに、夕紀はこの件に関してだけは、何度言っても頷こうとしない。

最後には、いつも脅かすようにして、やっと彼女を黙らせる。

「何度言わせればわかるんだ。グダグダ言うようなら、」

パーティーの前にマスコミに発表しても構わない。」

「そんな……」

「明日は、必ず来てくれ」

「……私……」

「由紀子もこのパーティーに来ることになっている。」

彼女と一緒に来るんだ。」

「……」

「来ると約束しないなら、迎えに行く」

「行きます！ 行きますから、何も言わないでください」

「何も言っな？」

「ええ。結婚の事とかいろいろ……」

「なぜだ？」

「お願いですから、明日は何も言わないでください。」

「それじゃ、君を婚約者として紹介出来ないだろう」

「紹介してくれなくてもいいです」

「来る意味がないじゃないか！」

「あります。あなたの世界を少しは知る事ができます！」

慎一郎はその言葉にハッとさせられた。

確かに、彼女は映画界に身を置いている時の自分を知らない。

それは新鮮な感覚だった。

だれもが、慎一郎を、【映画監督】という冠のもとで見ている。

それに釣られて寄って来る人間が多い中、

彼女とは、別荘で、普段の何の装飾もない自分と出会ったのだ。

「私は、別荘以外での貴方をほとんど知りません。まず、そこから始めさせて下さい」

思わずため息がでたが、『始める』その言葉で、慎一郎は引き下がった。

彼女にとっては、格段の進歩かもしれない。

「わかった。明日は何も言わないでおくよ。

でも、友人には、顔合わせだけはするからな」

「婚約の事は触れないでくださいね」

「……とりあえず譲歩しよう」

慎一郎の中では、夕紀が婚約者だという事実にもはやどっぴりだ
というのに、

彼女は今から始めるといふ事か。

二人の感覚の違いが可笑しくも、苛立たしくもあつた。

44 (後書き)

すみません。

又、飛んでしまいました。

ウロウロ・グダグダの悪い癖は中々治りません。

我慢頂ける方、よろしく願います。

パーティ当日、夕紀は昼ごはんの後片付けをした後、時計を見上げた。

まだ、出かけるには早すぎる。

のんびりとソファに腰をかけ、住宅情報誌を読んでいると、由紀子が、美容院から帰ってきた。

夕紀は、その姿を『完璧だわ』とポカーンと見上げる。

由紀子はそんな夕紀の顔を《どう！》と言わんばかりに見下ろす。

「夕紀は何を着ていくの？」

去年の春に、必要に迫られ買ったスーツを着ていくつもりだ。自分の部屋から持ち出し、由紀子に見せた。

由紀子は呆れたように首を振る。

「夕紀。あなた頭おかしいんじゃない？」

パーティにそんなスーツ着て行ったら、係の人に間違えられて、グラスを預けられちゃうわよ。」

「これぐらいしか・・・」

「慎一郎は何も言わなかったの？」

「別に・・・」

「呆れた！こっちへ来て」

由紀子に手を引っ張られ彼女のクローゼットの前に立たされた。

「あなたを連れて行く事が条件で、パーティの招待状をもらったんだから、

何とかしない訳にはいかないわね。

ましてや、私と一緒に会場入りするんだから、ちょっとはましな力ツコさせなきゃ。」

ああでもない、こうでもないとなつかえひつかえ服を当てられ、

肩も露わなドレスやスリットが深く切り込んだもの、目にも鮮やかな真っ赤なドレスと

自分には到底着れそうもない服が、どんどんクローゼットから出てくる。

無理だ。絶対に似合うはずない。

どうにかお願いして、彼女が持っている一番地味な

胸元でシフォンと黒のベロアに切り替えられているワンピースを借りることにした。

「これ昨シーズンのワンピースよ。本当にこれでいいの？」

「ええ。それぐらいしか、似合わないと思うし」

「でも、こんな地味な服じゃ、目立たないわ。誰も見てくれないわよ。」

「別に目立とうと思って行く訳じゃないし……」

「まあ、夕紀はそうかもしれないけど……慎一郎と一緒にいるんでしょ。」

「……どうかしら？ 来いとは言っていたけど……」

「まあ、私はどうでもいいけど」

仕方ないとばかりに由紀子は首をすくめる。

「お化粧品は私がしてあげるわ。じゃないととんでもない事になりそうなもの」

美容部員のように彼女は手際よく、下地からはじめていった。

芸能界のニュースに詳しくない自分でもよく知っている人たちが目の前を歩いていく。

女性たちは皆、きらびやかなドレスに身を包み、入口付近で雑誌の取材に応えている。

男性は、フォーマルなスーツに身をかためていた。

デニムを履いている人もいるにはいたが、きつとそれだって、自分にはわからないがヴェンテージやブランド物で目を見張るほど

高価なのだろう。

夕紀は恐る恐る会場に足を踏み入れる。

前を歩いていた由紀子は、ターゲットを見つけたのか、足早に年配の男性に近寄って行った。

会場中央に一際目を引く一団に視線が吸い寄せられた。

この映画の監督であり、世界からも注目の的人が夕紀の目に飛び込んできた。

彼を取り囲むように作られた輪の中央にいる慎一郎は、シンプルなスーツをすっきり着こなしている。

先ほどまで一緒にいた由紀子いわくアルマーニらしい。

その両脇には、この映画の主演と助演女優が自らの美貌とスタイル良さを

強調させるドレスと髪型で、がっちり固めている。

3人を囲むように、夕紀でも知っている演技派の俳優や、

主題歌を担当した歌手など、有名無名問わず、彼の周りに輪ができていて、

話しが弾んでいるようだ。

そして、その輪に加わりたいたばかりに遠巻きに羨望と嫉妬の眼差しで

見ている人たちがいる。

きっと彼の両隣を虎視眈々と狙っているのだろう。
もし、自分が彼の横にいても、あまりにも場違いで、抑制になるとは思えなかった。

そんな事を考えながら、冷めた目をして壁際から、慎一郎達を見つめている自分がここにるのが不思議だった。

初めてみる彼のスーツ姿は、周りにいる俳優たちよりもオーラをまとって見え、

夕紀には近寄りがたく、到底自分から、声をかけることなど出来な
いまま、

遠くを見るような眼差しでその一群を見つめていた。

会場の雑踏と熱気に気圧され、一息着けようと周りを見渡すと、ウェイターがトレイ片手に人の間を回って夕紀の前でトレイを差し出した。

その中からおずおずとフレッシュなグレープフルーツジュースを選び、一口飲む。

あの独特の苦みと爽やかさにホツとしたとばかりに、夕紀は口元を緩める。

「何を飲んでいるんですか？」

突然声を掛けられ、思わず持っていたグラスが傾き、ジュースがこぼれる。

「すみません。あまりに君が美味しそうに飲んでいたので大丈夫ですか？」

その男性は、慌てながら申し訳なさそうに、ハンカチを差し出してくれている。

「ええ、だ、大丈夫です。」

夕紀はそのハンカチをチラリと見ただけで、傍のテーブルにグラスを置き、自分のバッグからハンカチを取り出し、ジュースで濡れたワンピースをふいた。

「汚れちゃいましたか？」

すぐに洗った方がいいと判断した夕紀は、申し訳なさそうにしているその人に会釈を残し、化粧室に急いだ。

水で濡らしたハンカチで、ワンピースを叩きながら、帰ったらクリーニングに出さなければと思い、ため息をついた。

約束通りにパーティには来た。
やはり、場違いで気づまりなだけ。
このまま帰ってしまおうか？

廊下にはホテルのスタッフが数人いた。
その視線を避けるかのように歩きながら、会場に戻るべきか悩んでいると、

先ほどの男性が、廊下のソファに腰を掛けていた。

夕紀の顔を見るなり、立ち上がり駆け寄ってくる。

「服、大丈夫でしたか？」

気にしてくれていたのだ。

夕紀はかえって申し訳なく思い、笑顔で返事をする。

「少しだけでしたから、大丈夫です」

「ああ、良かった。でも、クーリーニングですよ。弁償します」

「そんな！あなたが悪い訳ではないので、結構です」

「いや、それでは、僕の気がおさまりません。」

良ければ、連絡先を教えてくださいませんか？ 後から、必ず連絡します」

「いいえ。結構」

「夕紀」

その会話の途中で、厳しい声が割って入ってきた。

「慎一郎さん」

夕紀は振り向くと、彼が大股で歩いてくる。

自分がここにいてどうしてわかったのかしら？

先ほどまで美女に囲まれていたくせに。

「どうした？」

「あ……別に……」

二人を見ていた、その男が驚いたように声を上げた。

「国枝監督！」

「本条さん、彼女が何か？」

「いや……僕のせいで、飲み物が服に零れてしまったもんだから」

「こぼれた？ 大丈夫か？」

「ええ。たいした事はないの」

二人の会話を本条は不思議そうな顔で聞いていた。

「監督？ 彼女とは知り合いなんですか？」

「彼女は俺の」

「知人です」

夕紀は、慎一郎の表情を見て、彼が何か言い出す前に、思わず言葉の後を続けた。

夕紀のその言葉はやはり、慎一郎は気に食わないようで、眉をひそめた。

「夕紀？」

「知人？」

「ええ、彼の叔母様の……。」

「そうですか。いやあ、映画関係者にしてはお会いしたことなかったし、

芸能関係者にしては、染まっていないなあと思って見ていたんですよ」

夕紀はその言葉に、やはり、自分がこの世界、すなわち慎一郎の世界に
相応しくないと改めて確信した。

「この映画の脚本を担当した本条です」

名乗られたら、自分も名乗るしかない。

「佐伯夕紀です」

「佐伯？もしかして、あの佐伯由紀子さんと知り合いですか？」

「あの？」

夕紀はそれが何を意味するのか分からなかった。

本条は眼鏡の奥の細い目を一層にこやかに細くし、説明してくれた。

「監督が他の作品に誰かを推薦したりするのって聞いた事がなかったんで、

業界内ではちょっと噂だったんですよ。

聞いた事がないというより、頑として受け入れなかったというか・・・。

だから佐伯さんはそれだけ、注目の新人さんなのかなってね」

「そうなんですか・・・。」

夕紀は、慎一郎がこれまでの信念を曲げてまで、由紀子の映画出演に骨を折ったと知り、少し複雑だった。

彼女の夢を応援してやったのだろう。

彼が、由紀子を気にかけている証拠だ。

慎一郎は、夕紀の考え込んだ表情を見て、彼女の手を握った。

「本条さん、ちょっと夕紀と話があるので、失礼します」

二人の繋いだ手をじっと思案顔で見ている本条に一言断りを入れて、慎一郎は夕紀をその場から連れ去った。

46 (後書き)

ムム！ 話が遅々として進みません。

こんなんでも、よろしければ、お立ち寄り頂けると嬉しいです。
出来るだけ、サクサク更新を目指します！

慎一郎は視界の端に映った由紀子の姿に夕紀が会場に着いた事を知った。

自分の傍にやってくるのももうじきだろう。

右隣にべったりとひっついていいる主演女優の香水がムツとする。

当たり障りのない会話を交わしながら、夕紀が自分の名前を呼ぶのを今だ遅しと待つ。

この匂いから早く逃れたいと思っているのに、夕紀がやって来ない。

イライラする気持ちを抑えながら、場内を見渡す。

壁際にみつけた彼女が小走りに会場を出て行く後ろ姿が目に入った。

『帰るつもりか!』

来た事実だけを残して、帰られるなんてたまったもんじゃない。

慎一郎が急いで後を追おうとした時、左隣から媚びるような視線を投げかけながら、助演女優が腕に手をかけてきた。

「ねえ、監督。私もあの映画に出たいです。推薦して下さいよ。」

「あの映画？」

「ええ。」

「どの映画の事だ？」

「佐伯さんが出る事になった映画です」

慎一郎は、自分の行動が思った以上にこの業界で噂になった事に舌打ちしたい気持だった。

由紀子へ婚約解消を告げるのを考えた時、彼女がどう出るかは予測が付きにくかった。

自分にとっては、由紀子のどんな行動も罵詈雑言も痛くも痒くもなかったが、夕紀が困った顔で、俯いている姿が目についた。

何とかしなければ……。

オーディションに落ちた事は、他の所から耳に入っていた。それもそうだろう。

容姿とプロポーションはそこらの女優より優れているのは認める。だが、演技はど素人で今の彼女が自分から発信できるものがあるかと問われれば、

慎一郎はNOというだろう。

上辺がいくら良くても、内面から滲みでる何かがあれば、スクリーンで見るに耐えがたいものがある。

そして、いつも中心にいないければ気が済まない由紀子の気性は、自分の映画では絶対に使いたくない、扱いつらい類のものだ。

だが、慎一郎はすぐに、行動を起こした。

監督仲間に声をかけると驚いた事に彼女が素でいけるようなピッタリの役柄の女性を探していた。

慎一郎の口利きという事もあり、トントン拍子で話が進んだ。

思った通り、最初の剣幕はどこへやら、由紀子にその事を告げると掌をあつさりと返し、自分の事は全く心配ないからと夕紀との結婚を認めた。

慎一郎は笑い出すのをおさえるのに、必死だった。

これほど、あからさまなのはお目にかかった事がない。

お互いが利用しあっているのは分かっていたが、彼女の豹変ぶりが面白い。

もしかしたら、あの役は、彼女以上の人選はなかったかもしれないと思えるほどだった。

しかし、この業界、甘くはない。
きっかけはどうであれ、自分の力で欲しいものは掴みとって行くも
のだ。
メッキはすぐにはがれる。

この後は彼女次第だ。
これ以上関わるつもりは、全くなかった。

夕紀の辛い顔を見たくない……。
ただ、それだけで、自分が今まで良しとしなかった事をするなんて。

慎一郎は、両脇の女優達が何か話しかけてくるのを気づかない振り
をして
それとなく談笑から抜け、夕紀が慌てたように出て行った会場の外
に、足を運んだ。

少し離れたソファ付近で夕紀が男と向かい合っていた。

今度こそ、面白くないとばかりに慎一郎は舌打ちした。
それを聞き咎める者がいなかったのが、彼にとっては幸이었다。

夕紀は、パーティ会場に足を再び踏み入れた。

このまま慎一郎に手を引かれたままの勢いだと中央まで引っ張っていかれそうに感じ、

夕紀は足を踏ん張り、何とか入口付近で慎一郎の手をそれとなく外した。

「待って」

「どうした？」

「どこへ行くの？」

その質問を可笑しそうに返す。

「仲間の所に決まっているだろう」

「二人で？」

「もちろん二人で。」

夕紀はギュッと口元を結び、難しい顔をする。

慎一郎はその頬をピツと指ではじいた後、再び夕紀の手を取った。

「それより、着いたのならどうしてすぐに俺の所に来なかったんだ」

「どうしてって・・・。」

「だから探しに行く羽目になっただろう」

「別に探してもらわなくても・・・。」

「あ？」

慎一郎は夕紀の言葉に、機嫌悪そうに片眉を上げる。

「だって、美人に囲まれて楽しそうでしたよ？」

「なんだそれ？ やきもちか？」

「そんな事あるはずないでしょ！」

夕紀は彼の思い違いをすぐさま訂正した。

「安心しろ。確かに美人はそこらへんにゴロゴロいるが、
婚約者は夕紀だけだ」

夕紀は何の気なしに言ったであろう慎一郎の言葉に思わず俯く。
顔が赤くなっていないだろうか？

そんな夕紀を慎一郎は覗きこむように見る。

「うまく化けたな」

脈絡のない彼の言葉に顔を上げた。

「？」

「で、その服は？」

「由紀子に借りたんです」

「……悪い。気付かなかった」

「？」

「今まで、誰が何を着ていようと興味なかったから」

「？」

「今日のパーティは急だったな。用意するの大変だったろ？」

「別に……。やっぱり似合いませんか？」

「いや、そんなことない。でも、今度は前もって知らせるよ」

「今度って……」

「俺の婚約者なんだから、これからいくらでもこういう機会はあるさ。」

「行こう。仲間に紹介する。」

「言わないでくださいね」

「さっきだって言わなかったらどう？」

「……言いそうな顔をしてたくせに……」

夕紀の小さなつぶやきが聞こえたのか、

慎一郎は片眉を上げた。

「わかっているじゃないか」

「約束したでしょ」

「はいはい。言わないよ。」

出会ってから数週間、一緒にいた時間を合わせるとほんの数日だろう。

だが、夕紀は彼がこう決めたら必ず実行する人だということは何となくわかっていた。

ここで押し問答をつづけていても、かえって目をひくだけだ。

夕紀はしぶしぶと手を引かれて、会場の中央のグループに近づいてく。

二人に、いや、慎一郎に気付いた背の高い男性がまず声を掛けてきた。

「シンー！」

その声に、全員が二人を振り返る。

女性達は興味丸出しで、つないでいる手を見て表情を硬くする。

慎一郎は女性達に目もくれずに、そこにいる男性3人の正面で足をとめた。

「紹介するよ。佐伯夕紀さん。叔母の手伝いをしてくれてる」

最初に声を掛けてきた男性が驚いたように尋ねる。

「節子叔母さんの？」

「ああ」

「へえ・・・」

顎にトントンと人差し指をやりながら、夕紀をまじまじと観察し、その後、まだ繋いでいた手に視線を移した。

夕紀は、その視線を感じ、急いで慎一郎から手を引き、ペコリと頭を下げた。

そしてため息が出そうだった。

そこにいる女優達のあからさまな視線と『佐伯って』というヒソヒソ声が聞こえたからだ。

夕紀は知らんぷりした。

先ほどの本条の話から、由紀子の事は、業界内では周知の事なのだろう。

慎一郎の影響力の大きさが夕紀でさえわかる。

「夕紀。こっちは俺の映画のプロデューサーの白石卓。高校の時から腐れ縁。」

その横にいる二人が、青木と吉田。二人は大学からの付き合いだ。映画を作る上でブレンであり、悪友さ」

3人とも、夕紀を覗きこまんばかりに見つめている。

「はじめまして。」

夕紀はがんとして、よろしくとは言わないつもりだった。

ここにいる人達とは、今回だけのつもりだ。

自分とはまったく違う世界にいる人たちだ。

「プロデューサーとは名ばかりで、資金調達係と言ってもらった方が正しいけど」

白石は何か楽しい事を見つけたという表情だ。

「聞いてもいい？」

「はい？」

「佐伯由紀子とは関係あり？」

「……従姉です。」

「ふ〜ん、あまり似てないね。でも、そうなんだ。」

もしかして、そうことなのか……だからか……」

白石は少し眼を丸くして、慎一郎に意味ありげな視線を投げかけ

誰に言うでもない答えを求めない、自己完結の眩きをしていた。

夕紀は白石がそんなつもりで言っただけでも、由紀子に比べて自分が見劣りすると

そんな風に聞いてしまう自分が嫌だった。

そして、自覚していた事とはいえ、傷ついている自分を認めた。

紹介してもらった、残りの二人は、そのやり取りを興味深げ聞きながら

夕紀を驚いたようにマジマジと見つめたままだ。

居心地が悪すぎる。

「監督。次の映画は決まったんですか？」

「香港との共同制作の話はどこまで進んでいるんですか？」

その場にいた、女優が口火を切り、次回作の話しへと話題がそれる。夕紀は、その話しが興味のないものではなかったが、異次元の事のように、

ぼんやりと聞きながら、女優達のめらめらとした瞳にただただ圧倒されていた。

自分を彼に売り込もうと、美しく見せる仕草や言葉遣いが夕紀を息苦しくさせる。

他のメンバーも映画への熱い情熱がほとばしっており、あの慎一郎でさえ、いつになく饒舌だ。

夕紀はいたたまれなく、そっと、その場を離れた。誰一人、夕紀がその場になくても困らないし、気付きもしないだろう。

《帰ろう》

クロークへ向かう途中、由紀子に声を掛けられた。

「帰るの？」

「ええ。」

「私はもう少しいるわ」

「わかった」

由紀子は、夕紀の疲れた様子を呆れたように見つめる。

「夕紀。これが慎一郎の世界よ。あなたに耐えられるかしら？」

「.....」

「よく、考える事ね。お手伝いさんのままで良ければいいけど」

由紀子があんなに、上機嫌で手伝ってくれたのは、この現実を知らしめるためだったのだろうか？

「わかってるわ」

別に、慎一郎との結婚を望んでいるなんて決してない。

だが、ここが、自分のいる場所ではない事がわかり、ひどく疲れた。慣れないところに連れてこられただけではない。

ただ、自分と慎一郎との世界の差が、なぜか、夕紀を打ちのめした。

48 (後書き)

6/20 少しだけ訂正入れました。

ブログでUPさせて頂いています、このページに関連した番外編と辻褃？合わせの為です。

さして、筋には、関係ないので、読み返して頂かなくてもOKかと思えます。

こちらを先に気付かれた方は下記 のアドレスから番外編もお楽しみ頂ければ嬉しいです。

[http://kyurepasu.blog.fc2.com/
blog-entry-2.html](http://kyurepasu.blog.fc2.com/blog-entry-2.html)

パーティーの翌日、夕紀は昨日の疲れが抜けきらぬまま
ぼんやりとお昼休みの休憩室でテレビを見ていた。

お昼のワイドショーが昨日のパーティーの様様を映しており、
芸能レポーターが、参加者の服装やコメントを興奮気味に声高に伝
えている。

ハッと画面に釘付けになった。

慎一郎が主演女優と一緒にこやかに歓談しているのが映し出され
た。

自分もあの場にいたはずなのに、テレビに映し出されている映像は、
まるで、絵空事のようなと思った。
隣で、同僚がウツトリと呟いている。

「ほんと、この国枝監督ってかつこいいよね。
顔立ちが特別にハンサムって訳でもないんだけど、
スタイルがいいし、雰囲気は何ともいえないよね」

「・・・・・・・・」
「夕紀もそう思うでしょ？ まあ、現実にはこんな人、お目にかか
れないわね」

夕紀は同僚に苦笑いを返しながら、自分の世界はこんなもんだとしみじみ感じていた。

貸出カウンターに座っていると目の前に本が差し出された。本だけを見て、ただ、事務的に決められた言葉を告げた。

「ご自分の図書館カードをお願いします」

「持ってないんです」

「それなら、新規作成を、あ！」

「こんにちは」

「ジューズの……」

「ええ。昨日会いました」

「あの……え……つと」

確かに昨日紹介されたはずなのに、目の前の人の名前を思い出せない。

気を悪くした風でもなく、黒ぶちの丸っこい眼鏡の奥の瞳が柔らかく笑い、自ら名乗ってくれた。

「本条です」

「ああ。ごめんなさい。貸出ですか？」

「いや。ホントはこの本持っているんだけど、君と話がしたくて」「え？」

夕紀が茫然としていると、本条の後ろに並んでいる人の、

イライラとした靴音が聞こえた。

「あ……でも……今、仕事中で……」

「何時に終わるの？」

「今日は、4時」

「じゃあ、横のカフェで待ってるよ」

「え！……でも……」

靴音が一層大きくなる。

「じゃね！」

本条は本を本棚に戻し、手をひらひらとさせながらスタスタと出ていった。

啞然としている夕紀に、たまりかねた様に厳しい声が飛んできた。

「待っているんですけど！」

「すみません！お待たせしました」

夕紀は冷や汗をかきながら謝り、急いで貸し出し手続きを行う。

「お先に失礼します」

同僚のニヤニヤとした顔に見送られ、居心地の悪い思いで図書館を後にした。

本条は、宣言通り、そのカフェで待っていた。彼は何の用で、自分に会いに来たのだろうか？夕紀は戸惑いを隠せなかった。

「お待たせしました。」

「ごめんね。急がした？」

「いいえ」

注文した、カフェオレを一口飲んで、ホッと一息ついた。

「誰に聞いたんですか？」

「図書館の事？ 君の従弟」

「由紀子ですか？」

「ああ、最初は渋っていたけど、彼女が今度出演するかもしれないテレビドラマ、

僕の脚本なんだよ。しぶしぶながら教えてくれた。」

「そうですか・・・」

夕紀はもう一口、カフェオレを飲んだ。

本条は、相変わらずニコニコと上機嫌だ。

「やっぱり、ドレスの事が気になってね」

「それは、もう」

「というのは、口実で、もう一度会ってみたかったんだ。」

「どうしてですか？」

「自分の直感を試してみたかったというべきかな」

「直感？」

「そう。」

おもむろに、本条は鞆からハードブックを取り出し、ズズッと夕紀の前に差し出した。

「少し感想を聞きたくて。」

「感想？」

「読んでみてくれないか？　すぐでなくてもいい。読んで感想を聞かせてほしい」

夕紀はまじまじとその本の表紙を眺め、真剣なまなざしの本条にニッコリほほ笑んだ。

「その本、もう、読みましたよ。」

「読んだ？」

「はい。」

「話題にもならなかったし、評価も良くなかったけど」「本を選ぶ基準は人それぞれでしょ」

夕紀は可笑しく思う。

「そうだけど……。で、どうだった？」

彼は夕紀の表情を何一つ見過ごすまいと真剣な視線を据えたままだ。

「う……。奇抜な発想だと思いました。ただ……。」「ただ？」

夕紀はその本の感想をありのままに述べた。

「そうか……」

本条が少し気落ちしたような表情で考え込んでいる。

「あの……これが？」

「それ、俺が別の名前で書いた処女作なんだよね。」

「え！そうなんですか？ズケズケとごめんなさい」

「いいや。業界の人や俺の知り合いで、これを読んだ人は俺の作品だと知ってるからね。」

彼らに何を聞いても、当てにならなくて。

俺の作品だと知らずに読んだ人の感想が聞きたくて……。」

「……すみません。勝手な事を言つて……」

「いや、率直な意見嬉しかったよ。そして、君への直感は正しかったと感じた。」

「はい？」

本条は人の良さそうな顔を、一層綻ばした。

「ねえ、俺の仕事手伝わない？」

49 (後書き)

場面かわりました。

本条さんの関わり方が微妙かも・・・？
期待薄です。

次回もまた、場面が飛ぶ予定です。

コロコロで本当にすみません。

それでも、我慢頂ける方引き続きお立ち寄り頂けると嬉しいです。

慎一郎から話があると言われて、マンションに呼び出されたのは、パーティの翌週の土曜日の事だった。

「必ず来てくれ。来ないのなら夕紀の家に押し掛けるからな」

再び、脅かされるように言われ、仕方なく教えられた住所にたどり着くと

見上げるような高層マンションがそびえ立っていた。

まだ、新しい豪華なマンションを見上げながら、脅しに負けるようにここに

立っている自分を不甲斐なく思う。

パーティの時の二の舞にならなければいいけど……。

断ろうと思えば、断れるはずなのに……。

夕紀は自分の行動に何らかのいい訳を見つけない気持だ。

部屋番号を押すと、機械を通して彼の不機嫌な声が聞こえてくる。

ドアが開いて、コンシェルジュが待機しているロビーを素通りし、エレベーターに乗り込み、25階で降りた。長い廊下にポツンとドアが一つだった。ベルを鳴らすとドアが開いた。

「いらっしやい」

慎一郎が出てくると思っていたら、ドアを開けてくれたのは、パーティで紹介された白石だった。

たしか彼は、慎一郎の友人であり、彼の映画のプロデューサーだと言っていたはずだ。

どうして今ここに、この人がいるのだろうか？

びっくりした顔をしていると夕紀に白石が可笑しそうに笑う。

「俺たちがいるって、聞いてなかったんだ？」

「ええ」

「シンらしい。さあ、どうぞ」

「お邪魔します」

俺たち？夕紀は怪訝な表情で白石の後について、おずおずと部屋に入る。

40畳はあるだろうか？

すっきりと広がっている空間のリビングに、驚くほど、大きなテレ

ビがまず目に入り、
圧倒された。

中央にドンと置かれているシンプルな革張りの黒いソファに
慎一郎の他にあのパーティーで紹介された吉田と青木がL字型に座っ
ており、
テーブルには隙間のないほど、書類や本が広げられ、
難しい顔で頭を突き合わせている。

「シン！」

白石が声をかける。

慎一郎はその声に反応し、顔を上げ、チラリと夕紀を見た。

「ちょっと待ってて」

一言、言い捨てるとすぐさま書類に視線を戻し話を続ける。
白石と夕紀には目もくれず、書類の字面を追いながら、吉田と青木
に堅い声音で話している。
意見の対立があるようだ。

白石は、そんな慎一郎に肩をすぼめ、
夕紀にダイニングの椅子をすすめてくれた。

「とりあえず、ここにでも座ってて。
すぐに……？うん、どうだろう？」

でも、君に話があるから呼び出したんだろうし、ああ言ってるしね。

白石も、そういうなり、慎一郎の対面のソファに座り、3人の話に加わった。

時折、声を張り上げたり、沈黙が続いたりと居合わせた夕紀でさえも、話し合いが難航しているとわかる。

黙って待つ事、1時間。

呼び出されたのは午前11時。

今は12時を過ぎている。

呼び出しておいて、ほったらかしにするなんて、夕紀は段々腹が立ってきて、

それに比例するようにお腹も猛烈に空きだした。

目の前の男性たちは、平気なのだろうか？

お昼ご飯を食べる気がないのだろうか？

思いきって声をかけた。

「あ……」

聞こえないのか、返事がない。

もう一度、今度は声を張り上げた。

「あの！」

話しを邪魔されたのが気に入らなかったのか、慎一郎が目元を釣りあげて
振り返る。

「私、帰っていいですか？」

「あ？」

「帰りたいんですけど！」

「なぜ？」

「お腹が空いたんです！」

その夕紀のいい方に、慎一郎が少し驚いた後、笑った。

「適当に食べて！」

「食べてって……」

「何でもその辺にあるもの食べて、待っていて」

そういうなり、4人の話は続く。

夕紀は、こうなったらと、キッチンへ向かった。

シヨールームに並んでいるような最新鋭の設備のキッチンが
まるで、使われた事のないくらい綺麗なまま、広がっている。
その壁面にピッタリのサイズで置かれている、
鍋が丸ごと何個でも入るぐらい大きな冷蔵庫を開けた。

閑散とした庫内に、ポカーンと口が開いてしまった。
この羨むほどの立派な冷蔵庫が、宝の持ち腐れ状態だった。

ガランとした庫内にかろうじて入っていた卵と牛乳、食パンを取り
出しながら、
作れるメニューを頭の中で、探し出した。

作りつけの戸棚の引き出しを次々に見る。

あつた！

多分、お土産なのだろう。

棚には封の開いていない楓の模様のラベルが貼られたメイプルシロ
ップを見つけた。

嬉しく思いながら、手早く取り掛かる。

夕紀の頭には、甘いシロップとバターが絶妙のフレンチトーストが
すでに

焼き上がっていた。

50 (後書き)

やっぱり、場面飛んでしまいました。

あれ、本条さんは？とまたもや？？？とお思いの方もいらっしゃるのでは？

この場は彼の事はスルーしてください。

本当に多くの方にお立ち寄り頂きありがとうございます。
すごく、嬉しいです。

お話はもう少し続く予定です。

よろしければ、お付き合い頂けると嬉しいです。

慎一郎達は、甘い香りに誘われて会話が止まる。言われなくても、匂いの出所はキッチンだ。

夕紀が楽しそうにフライパンからお皿に移し、何やらしている。コーヒーの香しい匂いまでしてきた。

トレイに乗せ、運ぶ姿に自然と視線がつけられる。

ダイニングテーブルに座り、自分たちの視線に気づきもせず、美味しそうに食べ始めた。

4人は顔を見合わせ、無言の会話を交わした後、慎一郎はおもむろに立ち上がり、夕紀に近寄る。

「何食べてる？」

夕紀はフレンチトーストの甘さに口元をほころばせながら、キョトンと見上げた。

「？ フレンチトーストです」

「そんなの、ここにあったか？」

「簡単に作れますよ」

夕紀は慎一郎の表情が面白かった。
まるで、お腹をすかせた子供のように、目がランランとしていた。

その目の意味が分かると我知らずに、夕紀の目も輝いた。
言葉を掛けずにおれなかった。

「食べますか？」

夕紀の問いかけに、慎一郎が問いかけで返すと同時に、
他の3人からの遠慮のない声の上から響いた。

「出来るのか？」

「俺たちも食べる！」

夕紀はその声たちのハモリ具合と元気良さに目を丸くした。

「すぐに作りますから、少し待っていてください。」

可笑しすぎる。

大きな男性4人が、夕紀にお願いの眼差しを向けている。
まるで、大型犬がシッポを振っておねだりしているようだ。

夕紀は大急ぎで、ありったけの卵と牛乳、パンを用意しながら、

コーヒーも入れ直す。
2つのフライパンで手早く焼き上げる。

焼き上がったフレンチトーストとコーヒーが見る見るうちに
男性4人の腹の中に消えていった。
黙々と食べながらも、嬉しそうだ。

焼いても焼いても追いつかないんじゃないかと思うぐらいだった。

「ああ、腹いっぱい」

「生き返った」

「ご馳走さま」

「美味しかった」

4人が満足顔で口々に言うなり、また、話しを再開した。
だが、先ほどよりは、険しさが取れたように感じられた。

彼女の事は4人の頭の中から消えたようだったが、
先ほどの疎外感はずいぶん、感じなかった。

後片付けを終えて、夕紀は仕事の邪魔になるのでは思い、
帰ろうかと考えながらも、先ほどとは違い、少し余裕をもった目で
部屋を見渡す。

コーナーにある書棚の前で足をとめ、蔵書に目をやると読みたい本
がいくつもある。

「読ませてもらってもいいですか？」

慎一郎は顔も上げずに、「ああ」とだけ。

聞いているのか聞いていないのかわからない慎一郎の態度に
夕紀は首を振りながら、ダイニングテーブルで本の扉を開いたとた
ん、

その世界に吸い込まれていった。

横で話している男4人の声も気にならない。

その中の馴染みのある低い声が、とりわけ心地よく、
程よいバックミュージックの役割をしている。

夕紀にとって、穏やかな時間が過ぎる。

自分が飲みたいと思った時にコーヒーを入れ、彼らにも差し入れた。
4人は書類から顔も上げず、もごもごとお礼を言うなり、コーヒー
に口をつける。

部屋には夕紀が丁寧にドリップしたコーヒーの匂いで満たされてい
た。

夕紀は窓から差し込む陽がつくる影の変化にハツとした。時計を見上げるともう、夕方だ。

男性たちは、まだ、難しい顔をしている。放っておけば、夜中までこのままだろう。

彼らの集中力と情熱に驚かされる。

夕紀は、お米があつたのを思い出し、お米を研ぎ、炊飯器が見当たらなかったなので、鍋でご飯を炊いた。

シンプな塩おにぎりを、握る。

ひい、ふう、みい……

幾つ握っただろう？

夕紀は、慎一郎の背後に近寄り、思い切って声をかけた。

「あの……」

「え？」

彼がハツと振り向く。

夕紀がここにいた事をやはり、忘れていたようだ。

「もう、夜なので私帰ります。」
「ええ？」

慎一郎は時計を見て驚いた。

夜の7時を過ぎている。

結婚へ向けたこれからの事を具体的に決めようと、ゆっくりと時間をかけ、

話しあつもりだった。

渋る夕紀を強引に呼びつけた事も自覚していたのに、連絡した直後、思いもかけず、映画の話しが好条件で舞い込んで、

メインスタッフが押しかけてきたのだ。

すぐに終わるつもりだったが、ついついのめり込んでいたようだ。

自分の悪い癖だ。

映画の事になると周りが見えなくなる。

いつもは腹が減ったり、のどが乾いたり、体の方から時間の経過を知らせてくれるはずが、

今日は夕紀の思いがけない気づかいが、自分たちの情熱を保たせてくれた。

「ああ・・・」

慎一郎は頭を掻きながら立ち上がった。

夕紀はそのすまなそうな顔を見て、穏やかに笑った。

「さしでがましいとは思ったんですが、おにぎりしておきました。良かったら、食べて下さいね。」

「ああ……ありがとうございます。」

「じゃ」

「家まで送るよ」

「いいえ、まだ早いから大丈夫です。それに、途中でしょ」

夕紀はひょいと慎一郎の背後に目をやった。

他の3人は夕紀の言葉を聞くなり、行動を起こしていた様で、すでにおにぎりを食べ始めていた。

「悪い。呼び出しておいて。」

「読みたい本が読めたので、私も得しました」

夕紀は呼び出されて放っておかれた事よりも、

彼の映画にかける情熱が、また少し理解できたような気がして
もう、怒る気持ちは持っていなかった。

慎一郎が、微塵の不機嫌さも含まない穏やかな夕紀の顔を見下ろしながら、

今度は首の後ろに手を当てている。

本当にすまないと思っっているようだ。

彼の表情が雄弁にその思いを語っている。

「お邪魔しました」

「ほんと。悪かった」

他の3人も、大きな声で「美味しかった」だの「ありがとう」だの言ってくれているようだが、おにぎりが口に押し込まれているので、はっきりとはわからなかった。

それがまた、夕紀には可笑しくて、思わず笑ってしまった。

そして、慎一郎を見上げると、彼の情けない顔が、一層夕紀の笑顔を誘う。

彼の表情は、図書館に本を返しに来た少年が、返済期日を過ぎていると注意され、

バツが悪そうにしている、そんな表情と重なった。

自分でも見上げるほどの大男の慎一郎に、少年を当てはめて考えるなんてと、

夕紀は口元から笑みが消えなかった。

玄関で靴をはき、『それじゃ』とばかりに振り返ると、

いきなり、慎一郎の片手が夕紀の腰を抱きこみ、顎をもう片方の手で持ち上げられた。

ゆっくりと唇が重なりあった。

夕紀の入れたコーヒーの香りのするキスだった。

たっぷりと時間をかけたキスに夕紀はボウツと慎一郎を見上げた。

「美味かった。　ありがとう。　気をつけて帰れよ」

コツンと額と額をぶつけられ目を見つめながら、眩かれた。そしてゆっくり手が離れていった。

夕紀は、胸のときめきから逃れるように、息が切れるのも構わずに夜の道を走った。

あのキスをしてきた慎一郎は、キスをする事になれた大人の男だった。

52 (後書き)

穏やかなマンションでの1日でした。
次から場面が変わります。

「え？」とお思になるかもしれませんが、
スルーして読み進めて頂けるとありがたいです。

多くの方に目をとめて頂き、すごく嬉しいです。

お気に入りの件数に、これだけの方たちが続きを待って下さっている方がいるのだと、
それを励みにお話を続けさせて頂いています。

本当にありがとうございます。

夕紀は、焦っていた。

この部屋を出ていかなければならない期日が迫ってきている。不動産屋を回っているが、自分の条件にあう物件がなかなか見つからない。

慎一郎に、相談する事も考えないではなかったが、

それが彼の行動を加速させてしまうのではないかと危惧してしまい、何も言えず終いだった。

幸いにも、ここ数日、慎一郎は連絡してこない。

彼も落ち着いて考えると無謀な事だと気付いたのだろうか？

先行きの不安を抱えつつ、荷造りだけでもしておこうと、

時間を見つけて作っていった段ボール箱が部屋の片隅にこんもりと積まれている。

仕事が休みの日も、近くの不動産屋を見て回る。

今日もそうやって過ごそうかと、朝食後、住宅情報誌をみていると叔父が、すごい剣幕でやってきた。

「夕紀、どういう事だ!」

「何がです?」

「婚約の事だ」

「.....」

「昨日、由紀子から話しを聞いた。

国枝氏は、お前と結婚すると言い出しているらしいじゃないか」

「それは.....」

「お前が、国枝氏をたぶらかして、婚約を迫ったのか?」

「まさか、そんな.....」

「目の不自由な叔母さんに、うまいこととりいったんだってな?」

どうな風に叔父に話したのか聞いていないが、

この調子だと、由紀子が、自分に都合のいいように話を捻じ曲げて伝えているようだ。

「違うわ!」

「違うことないだろう。現に、由紀子と国枝氏との婚約は取りやめになった。」

あの子になんてことを。従妹同士なのに。」

「私は」

「私たちにもすまないと思わないのか」

「だから」

「とにかく、すぐにここを出て行ってくれ。お前の顔を見るのも不愉快だ。」

そんな恩知らずを今まで世話をしていたとは

「でも」

「早く出ていくんだ！」

夕紀は叔父の怒りになすべがなかった。

身の回りの物をとりあえずトランクに詰め込むしかなかった。

叔父は、夕紀が出ていくまで、リビングで見張っているようだ。

「残りの荷物は」

「業者に送らせるから、住所を後から連絡して来なさい」

叔父は夕紀の顔を見ようとしめない。

今は、何を言っても無駄だろう。

「お世話になりました。」

夕紀は頭を下げて、部屋を後にした。

その日は何とか、近くのビジネスホテルに宿をとり、

翌日からは、親友が自分の家に泊まればいいとの言葉に甘え、身を寄せた。

親友は、夕紀の話の黙って最後まで聞き終わると暖かい眼差しを向

けた。

「学生の頃からそうだったけど、夕紀って本当にこういう事に疎いよね。」

「疎い？ なにが？」

「何がって……でも、こういう事は自分で気付かないと何も解決しないしね。」

それに相手も夕紀以上にひどいわ。夕紀以上にダメダメじゃん。」

夕紀は、自分と彼女の仲だからか、何気にひどい、いわれ様な気がする。

「婚約の話が解消されれば、すべて解決するのだけど……」

「そうじゃないでしょ」

「そりゃ、住む所を見つけないといけなくなっただけど、由紀子から離れられると思えば、

これで良かったんだろうし……。」

親友は、フーと大きなため息をついた。

「ここにはいつまででもいてもいいよ。」

でも、私が言っているのはそんなことじゃないんだけど……まあ、そこが夕紀といわれる所以なんだけど……

それで、相手って？ 従妹の元カレなんだよね？ 私が知る訳ないか……。」

夕紀は言葉を詰まらせる。

彼女の事は信用している。

だが、あまりにも自分とは接点のなさすぎる相手の名を言うのは戸惑われた。

でも、誰かに打ち明けたかった。

夕紀は思い切って慎一郎の名を告げる。

「国枝慎一郎って知ってる？」

「？ 映画監督の？」

夕紀はコクリと頷く。

「知ってるに決まってんじゃない。彼がどうしたの？」

「彼よ」

「何が」

「相手……。由紀子の元カレで、今は私の婚約者？」

【婚約者】という言葉が自分が使うのが適切かわからず、思わず語尾が上がる。

「？」

やはり、親友は絶句していた。

そして、我に返ったとおもったら、大声で叫ぶように話した。

親友の驚きももつともだろう。

夕紀からは想像もできない人物だ。

「本当？ あの国枝慎一郎？ ちよいイケメンの？」

彼女の問いかけに、夕紀はコクコクと頷く。

「えー 信じられない！ ホント？ アッソー！ そうなんだ！
えー！ そう？」

夕紀の従妹がそういう方面にすごい事は聞いていたけど、そう来たか！

それを捕まえたか？ いや、損ねたか？ それでもすごい！ やるなー！」

意味の通らない単語を発しながら、彼女はウンウン、頷いている。

「そうなんだ。それで、夕紀とね〜。へえ〜。
ダメダメ君くんだけど、ちゃんと見る目はあるんだ。」

彼女は、またしても、ダメを連発しはじめる。

「だけど、意外！ あの監督って、人間の深い部分にも切り込んだ心理サスペンスはお手の物だし、これまでのどの作品だって、人の感情の機微をすくく上手に描いた

映画なのに、自分の事となるとテンデダメなんだ」

「ダメって？何が？」

「いやはや、そうですか！ フーン、そうですか！」

夕紀はいつまで、この彼女の意味の通らない言葉が続くのかと思いつつながら、

黙って聞いている

「ちょっと驚きだけど、人って自分事になると分からないんだ。よく勉強になったわ」

「？」

急に楽しげになりだした親友を横目に夕紀は住宅情報誌を読み始めた。

いつまでも甘える事が出来ないのは、夕紀も充分に分かっていた。このワンルームマンションは、彼女の城だ。自分も見つけなければ。

とにかく一刻も早く見つけなければ……。

.....

- - - - -
- - - - -
- - - - -

遅番上がりの為、もう夜の時間帯になっていたが、不動産屋を回る
うと、
少し遠くへ足を伸ばした。

道の反対側で、人だかりが出来ていた。

マスコミや雑誌でよく取り上げられている有名なレストランの前だ
った。

煌々とした店の明かりで、まるでそこだけスポットライトがあたって
パツと浮かびあがっているようだ。

夕紀が何気なしに、その光景に目をとめていると、歓声が上がる。
大きな外車が停まって、ちょうど中から人が降りてくるのが目に入
った。

夕紀でも良く知っている、いま旬の女優だ
まっすぐな黒髪をなびかせ、颯爽と振り返り、後から降りてくる人
を待っているようだ。

降りてきた男性は、片手を彼女に差し伸べ、もう一方の手は彼女の
ウエストを掴んで、
頭をかがませた。

遠目にはキスをしているように見えた。

その二人の姿に、再び大きな歓声が聞こえた。
そのまま、男性に腰を抱かれ、密着したまま寄り添いながら、店に入っていた。

その男性が、離れていても誰なのか、夕紀には分かってしまった。

夕紀は、その光景を、まるでスクリーン上の出来事のようにと見ていた。

二人が店の中に姿を消して、野次馬も解散したというのに、ぼんやりとまだ立っていた。

唇に塩っ辛い味がするのが不思議だった。

可笑しく思いながら、頬に手を当てると濡れていた。
いつのまにか涙が伝わっていたようだ。

慌てて、その頬を拭いながら何で涙なんて……と思った途端、
自分を笑いたくなくなった。

こんなことになって、やっと気付いたのだ。

親友は話を聞いただけで、一瞬で分かったというのに。
自分の鈍感さに、自分でもあきれれる。

彼の怒った顔。笑った顔。情けなさそうな顔。

自分の作ったものを食べるその姿。

傲慢でこうと決めたら譲らない、自分を通す我儘さ。

それなのに、節子へはもちろん、自分へも時折かいま見せる優しい態度。

どこから見ても立派な大人の男のはずなのに、少年のようだった。

映画への情熱と広がる夢を追い求める少年のような大男だ。

そのどれも、彼女は鮮明に覚えていた。

出会ってからの彼の言動を些細なことでさえ思い出す事ができた。いつの間にか、彼の事をずっと考えていた。

夕紀との結婚を宣言しておきながら、今は、自分の目の前で別の女性を伴っている、

慎一郎の事を本当は求めていたのだ。

心のどこかで、もしかしたら、自分だけには愛の言葉を囁いてくれるのでは？

愛に気付き、それを自分に向けてくれるのではないか？

そんな甘い期待をしていたのだ。

彼のこじつけた結婚の話を真に受けて傷つくのを恐れて自分の気持ちを見ないふりをしていただけ。

彼に強引にこの状況に置かれたと思っていたが、自分の中に彼と離れがたい気持ちがあったから、

彼の押し進められるまま、この状況に留まっていたのだ。

彼を愛していると自覚した瞬間は、
その想いが報われる事はないと、自分の想いを心の奥に沈めた瞬間
だった。

夕紀にとって譲れない大事なものを、彼が信じる事も持つ事もない。

慎一郎の中では、愛というものは、目に見えない不確かな、そして、
流動的な物。

それをこの先、彼は自分の人生に関わらせる事はしないだろうし、
また、望む事もないだろう。

54 (後書き)

やっと、気づいたか……。
今さらって感じですね。

夕紀の親友は、この後の登場はないかもしれないので、
名無しのままなのですが、
突然、登場回数が増えるかもしれません。
その時こそ、名付けたいと思っています。

いい加減すぎかもしれませんが……。

いつも、お立ち寄り頂きありがとうございます。
少しでも、楽しんで頂けると嬉しいです。
次話、又もや、慎一郎Sideにお話飛びます。

いつもながら、コロコロウロウロすみません。
よろしければお付き合ってください。

急に夕紀と連絡が取れなくなり、慎一郎は焦っていた。

公開された映画のプロモーションで忙しかった。

メディアや雑誌の取材に、いろいろなパーティーでの顔つなぎ、そして、新たな映画の話しが本格的になり、彼女の事が後回しになっていた。

昼は昼で、スタッフと打ち合わせにこもり、

夜は夜で、話題づくりに女優達を伴い、食事に出かけた。

映画作りに欠かせないのは、資金集めだ。

プロデューサーの白石は、そのあたりからもメディアへの露出も操作し、

自分たちの映画への関心を世間から浴びるように、

話題を提供すべく精力的に慎一郎やスタッフを駒のように動かす。

人使いの荒い白石のせいで夕紀との結婚の話が、遅々として進まない。

慎一郎は、彼女がこの結婚に対して乗り気ではないと口では言っている、
いても、
説き伏せる自信があったし、彼女の行動から、押せば落ちると思っ
ていた。

そして、最後には祭壇前で自分の手を握って微笑んでいる夕紀を想
像できた。

自分の為に食事を作ってくれたり、叔母を親身になって世話をし
てくれたりと

自分の事を憎からず思っていなければ、しないはずだ。

そして、自分と結婚することで彼女が得るメリットは計り知れない。

317

世界的な映画監督の妻としての、羨望。

彼女が今まで経験した事のない、経済的余裕。

叔父の家で間借りしていた事を思えば、

自分と結婚したら、好きなだけ服も宝石も買うことができる。

海外の仕事にだって連れて行ってやろう。

向こうでのパーティだって彼女が喜ぶ事、間違いないはずだ。

彼女もバカではない。

きっとすぐに気付くだろう。

自分の生活を垣間見て、もう気付いているかもしれない。

自分の妻というポジションがどれだけ世の中の女性に羨まれるかを。

自分の目の届かないところに行くはずないと高をくくっていた。

携帯も繋がらなかった。

家の電話も取り外されていた。

慌てて、マンションを訪れるとすでに他の名前の表札がかかっていた。

管理人に聞くと、随分前には引越しの意志を伝えており、1週間以上前に引越し屋が荷物を運び出していったらしい。

職場の図書館を何度見に行っても、彼女の姿は見えなかった。たまらずカウンターで問い合わせたが、やっと聞き出せた答えが退職した事だけだった。

どこへ行ったのか。

今、どうしているのか。

慎一郎は、イライラが募り、仕事にも支障がきたし始めていた。考えるのは、彼女の事だけだった。

もしかしたら、浩二に連絡しているかも……。

何度、連絡してみようと思ったか。

だが、プライドが邪魔をして、連絡できない。

いや、そこに夕紀がいたらという最悪の事態を想像すると連絡なんてもつてのほかだ。

八方塞がりで、闇雲に当たり散らしたい気分だ。

「シン、いい加減にしる。おまえ、煙草の吸いすぎ」

白石が慎一郎のマンションに入るなり、小言を言う。

マンション自体が空気の循環を常時行っている空調システムをもつてしても、

この部屋のタバコとアルコールの入り混じった匂いはひどいものだった。

事務所での打ち合わせも

最近慎一郎のイラつきぶりで一向に進まない。

関係者の中にも最近の慎一郎の機嫌の悪さに勘づく者も出てきた。業界内では、彼の新しい映画に対する姿勢に、不安視する声も聞こえたきた。

白石達は、慎一郎の不機嫌さがどこから来ているのかわからず、困惑していた。

それでも、何とかしなければとマンションに押しかける。

「何をそんなにイラついている。映画の話はいつも以上にこっちの要望どおりに事が運んでいるというのに」

「別にイラついてない」

「その顔のどこが、イラついてないって言うんだ」

「そうだよ。シン、お前、煙草やめたのに、何吸ってんだよ」

「いいだろ。煙草ぐらい吸おうが吸うまいが」

仲間の言葉に嫌な顔で煙草に火をつける。

「飯食ってるのか？」

長年の親友であり、慎一郎の右腕と言っても過言ではない白石はキッチンに雑然と置かれているアルコールの缶や瓶に眉をひそめる。

青木と吉田も訳がわからないといった顔で首を振る。

慎一郎のこんな姿を見た事がなかった。
仕事でうまくいかずイライラする事はあっても、
プライベートが仕事を邪魔する事など、かつてなかった事だ。

「何があつた？」

「・・・・・・・・」

「シン！」

「何もないさ！」

投げやりな言葉に白石は、どうする事も出来ない。

「あの子に来てもらえよ。」

「あの子？」

「そうだよ。夕紀ちゃんって言ったっけ。」

「パーティで紹介してもらった後、ここでも会ったじゃないか」
「・・・・・・・・」

慎一郎があらたまつて女性を自分達に紹介したのは、
彼女がはじめてだった。

叔母の世話を頼んだ事も、驚きだった。

慎一郎は、節子叔母の事を、本当に親身になつて心配していた。
彼が、表向きだけでない親戚付き合いをしているのは、彼女だけだ
ろう。

白石は慎一郎が女性に対して、いやもしかしたら、人間に対してかもしれない。

不信心を持つている事は嫌というほど知っていた。

それを拭^{ぬぐ}える女性が彼の前に現れるとは思ってもみなかった。

だが、夕紀はこれまでの女性と違っていた様に思う。

確固たる言葉があつたわけではないが、白石は慎一郎が夕紀を信用し始めているのを感じていた。

パーティで慎一郎が夕紀と手を繋いでいたのにもびっくりしたが、彼女をマンションに呼んだ事で、

白石は、慎一郎が夕紀を特別な人だと位置づけられていると確信していた。

縄張り意識の強い慎一郎は、相手を自分の懐に入れるまでは、警戒心が強く、付き合つた歴代の彼女でさえ、この部屋に自分から招き入れたのは

ごくわずかだろう。

いや、もしかしたら、いなかつたかもしれない。

ただ、この事を慎一郎が気付いているとは思えなかつた。

人間観察は鋭いのに、自分の事は分かつていない。

いや、分かりたくないのかももしれない。

慎一郎はある意味、臆病な奴だ。

白石は、何重にも壁を張り巡らした奥にある飢えた心に
慎一郎が自分で一日でも早く気付かないと取り返しのつかない事になるのではないかと危惧していた。

それは、他の二人も同じだったようで、あっと思い出したという表情で

白石の言葉を後押しするように話しを継いでいく。

「そうそう、あのフレンチトースト美味しかったよな」

「俺はただの塩おにぎりの方が好みだ。あの塩の利かし方が絶妙だったな」

「それにコーヒーだって、何も言わなくてもいつの間にか入れてくれて、

旨かったよな」

慎一郎の顔が強張っている。

白石はそんな慎一郎におかまいなしに言っただけ。

「連絡して、今晚の夕食作ってもらおうぜ。

あの子なら、きっと美味しいご飯を食べさせてくれて、お前のイライラも解消されるさ。」

信じられない事だが、慎一郎の表情を見て、

このイラつきが夕紀にあると白石は確信した。
大かた、彼の横柄な態度に呆れられたかで、揉めているのかもしれない。

慎一郎は頑固だが、自分の非を認める潔さは持っている。
何かのきっかけを今回はかりは自分たちが作ってやらねばと思った。

慎一郎は、その言葉を苦々しい思いで聞いていた。
『それが出来るなら、とうの昔にしていたさ。』
怒鳴りたい気持だった。

慎一郎は我慢ならず立ち上がった。

「悪いが帰ってくれ」

「？」

「今日はこれ以上やっても成果なしだ」

「おい。でも、」

「解散だ」

3人は手の施しようのないこの状態を打開できないまま、帰っていた。

一人部屋に残された、慎一郎は、このイラツキの元凶を早く見つけ
出さなければ、
映画もままならないと、頭を抱えた。

住む所が見つからない。

いつまでも、親友の家に居候もしてもらえない。

夕紀はあの時の、本条の言葉を不意に思いだした。

迷った末に電話をかけると、思った以上にとんとん拍子で話が運んだ。

夕紀の仕事が終わる時間に、本条が都合をつけてくれて落ち合った。

手伝う仕事の内容はいわば、秘書のようなものだった。

仕事場の掃除や、掛ってくる電話・尋ねてくる仕事関係者への対応に脚本の推敲と資料集め e t c

今までの司書の仕事とは、勝手の違う仕事だった。

だが、今の生活を変えたいと思っていた夕紀は、迷わず彼の仕事を手伝う事を決断した。

住まいも、本条が懇意にしている不動産屋が、彼の仕事場の近くで、条件的にも合う物件をすぐに見つけてくれた。

慎一郎との接点を恐れたが、本条は映画よりどちらかというテレ

ビの脚本が

主な仕事で、ここしばらくはそれにかかりきりだと聞き、それとなく慎一郎への口止めもお願いし、本条を頼ることにした。

新しい生活に馴染んで行きながらも慎一郎の事が頭から離れなかった。

彼は自分の事など、忘れてしまっているだろう。

そう言い聞かせても、夕紀は慎一郎の事を考えずにはおれなかった。

自分の新しい城のワンルームマンションで、彼の撮った映画を見ながら、

ボーっと過ごす夜を幾夜も過ごした。

本条の仕事は、今まで夕紀が経験した事のない新しい分野だ。特に本条が自分の脚本に対して夕紀の意見を求めてくるのは新鮮であり、また、彼の柔軟な発想は驚きでもあった。

本条の仕事を手伝いだして、1か月過ぎた。仕事も慣れて、毎日のペースも掴んだ。

最初、本条を男として警戒していたが、彼は長年付き合っている秘めた相手があり、

恋愛対象として夕紀を見ることが全くないと分かり、

より安心して、本条に心を許す事が出来た。

本条は、テレビ局との打ち合わせから戻るたび、いつも、夕紀を複雑な表情で見つめてくる。

一度だけ彼が聞いてきた事があった。

「ねえ、佐伯さん、本当にここにいていいの？」

「え？ どうしてですか？」

「僕以上に君を必要としている人が、いるんじゃない？」

「……そんな人、いません。」

「そうなのかな？……。」

納得いかないばかり、首を振るが、彼がそれ以上、夕紀を問いた
だすことはなかった。

取材旅行で本条が一週間、事務所を留守にした。

夕紀は、今までできなかったファイリングや掃除に励んでいた。

本条が留守の為か、自分のペースで仕事がかどり、

あっという間に予定していた仕事が付いていく。

久しぶりにゆつくりと、食後のコーヒーの時間を持った。

ふと、静かすぎるリビングが気になり、テレビをつける。

各局がワイドショーの時間だった。

驚いた事に由紀子が映っている。

彼女が、ある映画の公開記念のイベントでレッドカーペットを歩いていた。

相変わらず綺麗だった。

いや、以前にもまして磨きがかかったようだ。

多くの人の目にさらされ、自分でも夢を掴んだという自信が彼女の美しさをさらに輝かしていた。

その腕を組んでいるエスコート役は、慎一郎だった。

芸能リポーターが大声で中継している。

【映画監督の国枝慎一郎さんが現れました。

監督が映画デビューのきっかけを作った言われている佐伯由紀子さんをエスコートしています。

国枝監督が後押しされた事もあり、期待の新人女優さんですね。

また、一説には、お二人は恋人同士との噂があります。
聞いてみますね。

国枝監督！国枝監督！

今日は佐伯さんをエスコートですが、お二人のご関係は？】

チラツとそのレポーターを見るも、笑いかける事もなく通り過ぎて行く。

画面を通して彼の目力のある視線が伝わってくる。

横で由紀子が彼の腕に自分の腕をからませニツコリと笑っている。

臆することなく堂々とした笑顔だ。

カメラは一部始終をとらえている。

【美男美女のお二人でした】

芸能リポーターの熱のこもったコメントを聞き終わると、テレビを消した。

二人の仲が戻ったのだろうか？

自分には、もう関係のない事なのに、レポーターの発言通り、

見た目にも釣り合いのとれた二人の姿が、頭から離れない。

胸が痛い。

ギュツと唇を噛みしめる。

未練たらしい自分が嫌になる。

「もう！ いい加減にしなさい！」

誰もいない事務所で、自分自信を叱りつけるような夕紀の独り言が空しく響く。

玄関チャイムが鳴る。

「はい」

「Nテレビの使いでお願いしていた原稿を取りに来ました」

「どうぞ」

本条から、今日、テレビ局の人が脚本を取りに来ると言われていたのを思い出した。

夕紀は鍵を開けた。

ドアを開けて、相手の顔を見て驚いた。

慎一郎を介して会った白石が目の前に立っていた。

57 (後書き)

こんな所で・・・。

偶然って怖いですね。

お気に入りになくさんの方がご登録頂き、ありがとうございます。
息切れ?してきた頃なので、本当に励みになります。

この後もよろしければ、訪れて頂けると嬉しいです。

玄関口での意外な対面に、二人は固まっていた。だが、白石の方が、立ち直りは早かった。

「夕紀……さん？」

「……………」

「俺の事覚えてる？」

夕紀は分からないふりをすべきか迷った。

「ほら！パーティでシンから紹介された白石です。

奴のマンションでもあったよね。

あの時ご馳走になったフレンチトーストは忘れられないよ」

白石はニコニコ笑いながら、話しかけてきた。

こうまで言われては、認めるしかない。

「……………こんにちは」

「良かった。思い出してくれて」

「あの……白石さんが取りに？」

「そうなんだ。ちょっと頼まれてね。でも夕紀さんがどうしてここに？」

「……その……本条さんの仕事を手伝って……」

「そうだよ。ここ、本条のオフィスだし……」

え！ 本条と知り合いだったの？」

「え……ええ。」

「どんな？」

「それは……」

「いつから……」

「……少し前から……」

言いつらそうにしている夕紀を、白石は見逃さなかった。

「ああ、ごめん。まずい事、聞いたかな？」

「……」。 脚本、持ってきますから、待ってて下さいね」

白石は原稿を受け取り「またね」と帰っていった。

今日の事が、慎一郎の耳に入ることはあるだろうか？

口止めしておくべきだったかもしれないが、それもおかしな話だ。

それに、そんなお願いしようものなら、きっといろいろ聞かれるだろう。

夕紀はその帰る後ろ姿を見ながら、一抹の不安を拭えなかったが、白石のあのあっさり帰って行った感じから、彼が何か行動を起こすことはないはずだ。

慎一郎がまだ、自分を望んでいるはずなどない。

少しの希望を抱いては、自分が見じめになるだけだ。

根競べとばかりに、どれくらいコールし続けたらう。
やっと機嫌の悪い声が聞こえてきた。

「何だ」

「俺。昨日、面白い所で意外な人に出会ったぞ」

「……そんなことでわざわざ？」

「聞きたいか？」

「別に。お前に頼んでまで、聞きたい事なんてない」

「いいのか？シン、そんなすげない事言って」

「……」

「今度奢ってくれるなら、教えてやってもいいぞ」

「……」

「シン。どうする？」

慎一郎は電話の向こうの楽しげな口調で話す白石に殴りかけたい気分だった。

何の為に電話してきたんだ？

奴のバカ話を聞かせる為か？

あいつの酒量は、半端じゃない。

それを承知で、今までに奢って聞かせてもらった話で、それに見合う価値があった話など一つもなかった。

先ほどより、もっと不機嫌な声で、最後通告をする。

「切るぞ」

「おいおい！ 待て待て。俺、夕紀さんに会ったよ」

慎一郎は携帯が潰れるかと思うぐらい握りしめ、
ごくりと唾を一飲みした後、呟いた。

「何処でだ」

自分の声が震えていなければいいと、慎一郎は願った。

58 (後書き)

ご指摘いただいて、訂正しました。

本条が取材旅行から戻ってきた。

いつもは、どちらかというところ、確実に仕事のやり取りをしていく本条だが、

今日は、会つとすぐに怒涛のように旅行中の事を伝えられ、又、留守の間の連絡事項を口を挟むことなく頷いている。

玄関のチャイムが鳴った。

「ああ、どうぞ」

本条が応対してドアを開けている。

夕紀は来客の為に、机に広げられた書類を整理しながら、入ってくる人物を確認しようと視線を上げた。

「！」

慎一郎が不機嫌極まりない表情で仁王立ちして、自分を見下ろして

いる。

本条は事前に慎一郎の来訪を知っていたのか、
それ程驚いた様子はなかったが二人の空気を察したようだ。

すぐさま、自分の上着を手取る。

「夕紀ちゃん。君に用があるんだって。俺は1時間ほど外すよ」

「えーいや・・・そ・・・んな」

「すみません」

慎一郎は、夕紀を見据えたまま、本条の言葉に謝りを告げるも、
一刻もここを立ち去れと言わんばかりだ。

本条は夕紀を力づけるように笑った後、出て行った。

夕紀は困惑していた。

本条が今朝からの仕事の急ぎぶりは、きっと慎一郎が来る事を了解
していたのだ。

慎一郎は自分を見つめたまま、言葉を発しない。

「お茶、入れますね」

その場を離れようとすると、後ろ手に右手を掴まれ振り向かされた。

目の前に慎一郎が迫っている。
彼の目を見る事ができない。
足元のラグをじっと見つめる。

「なぜ、ここにいる？」

「……………」

「なぜ、何も言わず居なくなった？」

「……………」

「なぜ、俺に何も知らせてこない？」

噛みつかれるように、畳みかけるように言われ、
彼の怒りが伝わってくる。

「……………」

「なんとか言え！」

乱暴な慎一郎の言い方に、夕紀はかっとなり、
視線をあげ、慎一郎を睨んだ。

「あなたに、そんな事言われる筋合いありません」

「なんだと？」

「私がどうしようが、勝手でしょ！」

「それが、婚約者に対して言う言葉か！」

「私は結婚することに頷いていません」

「いや、俺たちは結婚するんだ」

「しません。絶対にしません」

夕紀はこの事だけは、はっきりと伝えなければと、
負けじときっぱりと言いつつ切った。

慎一郎はギリギリと歯を食いしばり、苦々しく思った。
自分の周りにいる女性なら、喜んでOKするはずなのに、
夕紀は頑なに頷こうとしない。

金もあり、名声もある。

自分と結婚すれば、楽な人生が送れるとなぜ彼女は思わない。
慎一郎はどうすれば、夕紀を納得させる事ができるか、わからな
かった。

だが、どうしても彼女を諦めるといふ選択肢が頭に浮かばなかった。

「それに、身代わりじゃなくて、本当の婚約者がいるでしょ」

本当の婚約者？

夕紀の言葉に合点がいかない。

「何を言っている？」

「由紀子と会っていたじゃないですか」

「いつだ？」

「この間、ワイドショーで見ました」

慎一郎は思い出した。

夕紀の行方を聞き出そうと、彼女に連絡を取った時だ。
プライベートで逢うつもりは全くなかった。

公の場の方が、下手に期待されずにいいと思い、イベントのエスコ
ートを引き受けた。

だが、散々引きずりまわされた揚句、由紀子からは聞き出す事は出
来ず、

パーティ途中で早々に引き揚げた、あの散々だった日の事だ。

そう言えば会場前で、どこかのテレビ局が取材をしていた。

「あれは……、何となく流れた。それに、由紀子は元婚約者
だろ」

「流れ？」

「そうだ。」

「何ですかそれ？ 流れで元婚約者と連れ立って出かけるなんて・
」

夕紀から疑いの目を向けられ、慎一郎はそうなった経緯を伝える。

「仕方ないだろ！ 夕紀との接点は彼女だけなんだから」

「接点？」

「そうだ。」

「もしかして、私を探したの？」

「当たり前だろ！」

「なぜ？」

もしかしたら、自分の望んでいる言葉のカケラでも慎一郎が言ってくれるのではないか？

夕紀は、彼の返答をわずかな望みを込めて問いかけた。

「来週、一緒に叔母の所へ行つてほしい」

慎一郎の予想外の返事に、ただ目を開いた。

夕紀は、節子の名が出てきた事にびっくりした。
どこか、具合でも悪いのだろうか？
高崎の腰痛がまた、再発したのだろうか？

心配げに慎一郎に問う。

「節子叔母様の？」

「ああ。目の手術をようやく決心してくれた」

「手術？ 直るの？」

「そうだ。日常生活には支障がない程度まで回復する」

「良かった！」

夕紀は節子の今までの不自由さが少しでも緩和されるのは喜ばしい事だ。

自然と笑顔になった。

「でも、今までなぜ、手術なさらなかったの？」

「手術の安全性が確認された事もあるが、これまでは高崎がずっとそばにいて、

それで充分だったんだろう。

だが、今回の事で、決心したらしい。それに……。」

「それに？」

途中で言葉を止めた慎一郎を夕紀は問いかけるように見上げた。

「叔母のこれまでの人生、見たくないものが多かったのだろう。その気持ちは、俺だって少しはわかるさ」

夕紀は慎一郎の言葉に、なんと応えればいいのか分からず、当たり前障りのない言葉でその場を濁す。

「そう……」

高崎さんの怪我が、結果的にいい方に事がおさまれば、無駄ではなかったのね」

慎一郎は夕紀の神妙な顔をじっと見つめている。

「俺たちの結婚式も楽しみなんだとさ」

「そんな……」

夕紀は途方に暮れた。

望んでも彼から帰ってきた答えは、節子を喜ばせたいとの思いだけ。

「お見舞いに行くのは……」
「叔母が、逢いたがっている。心配のない手術だと言いつ聞かせても、不安はあると思う。」

高崎も傍にいたのだが、どうしても君を連れてきてほしいとせがまれている

「……」

「何を戸惑う事がある？」

「お会いすることになるわ」

「もう、会ってるだろ」

「目が治ってお会いするのは……。」

慎一郎は、天を仰ぎ見る。

「何を戸惑う事がある？ もう、君が俺の婚約者だ。」

名前の事やこれまでの事なら、俺がうまく言う」

「そういうことじゃないでしょ」

「いい加減にしてくれ！」

叔母は君に手を握っていてほしいと願っている。

俺は、少しでも不安を取り除いてやりたい。

君が傍にいる事で、安心できるなら、攫ってでも引つ張ってでも連れて行く。

来週には、二人で病院に行く。そのつもりでいてくれ」

「仕事が……。」

「本条さんには、俺から話す。何の心配もない」

「いえ、自分で話します」

「じゃ、決まりだ。迎えに行く」

「び、病院を教えてください……。」

「今、どこに住んでいる？」

「・・・・・・・・」

「手を焼かすな。家まで迎えに行く！」

慎一郎は、一々逆らってくる夕紀に手を挙げないのが自分でも不思議なぐらい、腹が立った。

これが男なら、完全に胸倉を掴み殴っていただろう。

いいや、今、自分は彼女を殴るところか、

その忌々しい口を別の方法で塞ぎたいと考えていた。

もう一言でも、彼女が反論でもしようものなら、その行動に出るべきだ。

慎一郎は、彼女の反論を待っていると言ってもいいぐらいだった。

「家は・・・・・・・・」

慎一郎は待ち切れず、グイッと夕紀の腰を抱き寄せ、片手で顎を持ち上げ、

ぶつけるように唇を重ねた。

今まで心配させられ、イライラさせられた腹いせとも言える、激しいキスだ。

突然の事に、夕紀は目を見開き、慎一郎と視線があつた。

「たまには、俺の言う事も聞いてくれ。

一緒に叔母の所へ行こう」

慎一郎は、先ほどのキスで少し気持ちが落ち着いたのか、夕紀の口元で優しく呟き、再び唇を重ねた。
今度は、優しいキスだ。

夕紀は、キスにボーっとしながら、無意識のうちに住所を呟いていた。

そんな夕紀を見て、三度、慎一郎はキスを重ねる。

啄ばむように、名残を惜しむように、いつまでもキスを重ねた。

夕紀はされるがままに、慎一郎のキスに酔いしれた。

慎一郎はやっと、唇を離し、このままここにいたらきりがないとばかりに首を振る。

「10時に」

慎一郎は迎えの時間を告げ、最後に、夕紀の頬に軽くキスを落とす事務所を出て行った。

近くに停めてあった車に乗り込み、抑えきれない気持の高ぶりを鎮めるように大きな息を吐き、

慎一郎は、先ほどのキスを思い出す。

彼女をこの手の中に閉じ込めた安堵感とキスを交わした時の高揚感。

今までに、感じた事のないものだった。

この感覚、この想いをどう形容すべきなのか……。

考えながらも、じわじわと充足感までもが湧いてきた。

いつの間にか拳を作っていた。

携帯を取り出す。

「俺だ。今から1時間後にミーティングだ。

いいアイデアを思いついた。集まってくれ」

白石にいつものメンバーを召集するように電話を入れた。

頭から爪の先まで力がみなぎり、アイデアが湧き出でてくるようだった。

白石がからかい気味に聞いてきた。

「会えたか？」

「……会えた。……ありがとう。今度奢るよ」

「遠慮なく、高い酒飲ませてもらうぞ」

「ああ、覚悟してるさ」

「その価値はあっただろ？」

慎一郎は、白石の電話の向こうでニヤついている顔が浮かんだが、構わなかった。

「これまでで初めてだな」

慎一郎は携帯を切った後、片手で口元を覆う。

電話で良かった。

きつと、自分の今の顔はみっともないほど、緩んでいるだろう。

60 (後書き)

ニヤついている場合か！

慎一郎の俺様に喝を入れたくなりますが・・・。

この後、場面は別荘地の病院へ移る予定です。

という事は。。。。

いつもお立ち寄り頂きありがとうございます。

イライラしつつも、読んで頂けると嬉しいです。

別荘のあるその地域でも、指折りの大きな総合病院へむかう。

思ったより、道中は平和だった。

慎一郎は夕紀にこれまで見た映画の感想を聞いてくる。

最初、ポツリポツリと感想を述べる夕紀に対して、口を挟んだり、異議を唱えたりすることなく、面白そうに聞いており、そして、より深く夕紀の映画への見方を探ってくる。

彼は、映画の話になると、途端に饒舌になり、目を輝かせ、ガキ大将のような顔つきで、話題が尽きる事がないようだ。

又、彼は驚くほど読書家だった。

それを知った夕紀は、今度は自分からお互いが読んだ事のある本への感想を求める。

夕紀とは全く異なる感想を述べてくる事もあり、慎一郎の洞察力を強く感じた。

夕紀はそんな慎一郎と接して、浮き立つ気分でのを自覚していた。

自分の心に必死でブレーキをかける。

彼に引きずられるようにこの関係を進めるべきではない。

夕紀は分かっていた。

分かっていたが、彼を突っぱねる事が出来ない自分が腹立たしい。

- - - - -

病室に入ると、高崎が息子の浩二とともに振り返った。久しぶりの再会だ。

夕紀は懐かしく思いながら、ニッコリと挨拶した。

「高崎さん。ご無沙汰しています。お体はもう大丈夫ですか？」

「・・・ええ、何ともありません。・・・」

「浩二さんも、お元気でした？」

「・・・」

以前に会った時の二人はもつとにこやかに夕紀に接してきてくれたのに、

今は、よそよそしい感じた。

慎一郎も、二人の歯切れの悪い口調が気になる。

「浩二も来てくれたのか」

「.....」

「節子叔母さんは？」

「検査中」

やはり、高崎親子の様子に合点がいかない。

いつになく、強張った表情の高崎と

浩二らしくない突き放すような言い方も気になる。

叔母の体調が思わしくないのだろうか？

それぐらいしか思い当たらないが、

昨日の電話では、そんな事、一言も言っていなかった。

その場の雰囲気居たたまれなくなり、夕紀は持ってきた花束に目をやる。

「花瓶はありますか？お花を生けたいから」

「水道がわからないだろう。案内するよ」

ここに来てから、やっと浩二が夕紀に口を開き、花瓶を手に病室を出て行った。

夕紀は浩二のあの優しい笑顔が見られない事に、不安になりながらも、

慎一郎に合図を送るかのように視線を合わせたのち、浩二の後を追う。

「浩二さん。待って。ちょっと待って」

スタスタと自分を待つことなく廊下を進んでいく浩二の背中に呼びかけた。

角を曲がり、彼の姿が見えなくなる。

夕紀が知っている浩二では考えられない事だ。

以前なら、夕紀を置いて、先を歩く事などしないはずだ。

彼の態度、強張った表情全てに、不安が募る。

浩二は誰もいない給湯室のシンクに花瓶を無造作に置くなり、夕紀に強い視線を送った。

「君は誰？」

「！」

慎一郎や自分から、これまでのいきさつを説明する前に自分を慎一郎の婚約者として、家族のように迎えてくれた優しい人達に

嘘が露見した事を思い知らされ、後悔の思いで、項垂れるしかなかった。

61 (後書き)

浩二、再び、登場です。

ついに、浩二、知ってしまいました。

多くの方がお立ち寄り頂き、本当にありがとうございます。

又、お気に入りのご登録を頂いた方も本当にたくさんいて下さり、本当に嬉しいです。

更新の励みです!!!

かなり、へたつて来ていますが、更新重ねて行きたいと思っています。

この後もお付き合い頂けると嬉しいです。

腕から花束が落ちる。

その花束を浩二はゆっくり拾い、水の入った花瓶に投げ込むように飾る。

「もう一度聞けど、君は誰？」

「……なぜ？」

声が震えているのに気付いたが、隠す事ができない。

慎一郎が説明してくれるはずだった。

彼なら、うまくこの場を納める事が出来るだろう。

どこまで、自分が打ち明けるべきか悩む。

「この間、たまたまだけど、ワイドショーである映画の記念イベントを見たよ。」

あの時の由紀子と慎一郎を見たのだ。

「慎一郎さんが、綺麗な女性をエスコートしていた。女性は華やかな笑顔を振りまいていたっけ。」

レポーターが彼女の名前をこっぴど叫んでいたよ。

『新進女優の佐伯由紀子さん』てね」

由紀子は思わず両手を合わせて握り締め、ギョッと目をつぶる。

「僕や父が知っている佐伯由紀子さんとは似ても似つかぬ女性だったよ」

夕紀はどう説明したらいいか、迷った。

慎一郎が傍にいれば、助けてもらえるだろうが、彼は隣にいない。

彼のあの皮肉そうに、だが、どこか頼りにしてしまっている笑顔が思い浮かぶ。

「どこか他の場所で・・・」

どうにせよ、いつ誰か来るとはわからない、この場所で話す事ではない。

大きな息を吐いた後、夕紀はどこか別の場所へ移る事を持ちかけた。

気持ちを立て直す時間がほしい。

浩二は動揺を隠せない夕紀をじっと見つめ、彼女を中庭に促した。

並んでベンチに座る。

夕紀は暖かな日差しを浴びているのに、震えてしまいそうだ。

心の中で慎一郎に助けを求めながら、自分でまいた種は自分で刈り取るべきだと心を決めた。

これ以上、嘘を吐くべきではないと夕紀は口を開く決意をした。

夕紀の方へ体を向けた浩二の今まで見た事がない厳しい視線は曝されながら、話し始めた。

「本来なら、ここにいるのは、あなた見た佐伯由紀子のはずでした。

夕紀は出来るだけ、感情を入れず、シンプルにそして真実だけを述べる事に努めた。

本当の婚約者である由紀子が用事があつて、急に節子の世話に行けなくなった事。
それを気に病み、夕紀に相談を持ちかけ、自分が身代わりに世話に来た事。

節子が予想外に自分を気に入り、慎一郎が訂正していない事。
そして、婚約者のまま、今に至っている事。

夕紀の説明を浩二は、驚きながら、納得がいかないと首を振りながらそれでも話を遮ることなく、夕紀の説明を一言も逃すまいと、じっと耳を傾けた。

「ごめんなさい。そんなつもりは決してなかったんです。

こんな大事おまじことになるとは……。

高崎さんも浩二さんも巻き込んでしまい、結果的に騙すことになってしまつて……。」

「……。」

「そして、何よりも節子叔母様の目が不自由なのを利用して、嘘をついていた事に……本当に申し訳なく思ってます。」

「最初から嘘をつく事を承知の上でやってきたの？」

「……そうです。」

「僕には、わからないよ。

何が君にそうさせたのか。」

「……わかつてもらえとは思っていません。

許してもらえとも……。」

「でも、全てが嘘だとは思わないよ。」

浩二は、夕紀の話が理解できた訳ではないだろう。

彼の表情が物語っている。

だが、彼から出てきた言葉に、夕紀は驚いた。

「君が、叔母さんをわざと騙そうとしたというけど、僕には信じられない。

止むに止まれずだったんだよね。

きつと何か、もつと何か理由があつたんだろう?」

やはり、浩二は優しい。

自分を非難するどころか、許して慰めようとしてくれている。

こんな優しい人に嘘をついていたなんて……

浩二のその優しさが、かえって夕紀の罪悪感を募らせる。

「名前と慎一郎さんとの関係は嘘だったけど、他は全て本物だった
と思いたい。」

君の叔母さんへの態度、言葉、あれが嘘だとは思えない。
それに、僕との関係だって……。本物に違いない!」

「浩二さん……。」

浩二は難しい表情から考え込むような表情へ変えて、聞いてきた。

「ということとは、君は慎一郎さんの婚約者じゃないのだよね?」

でも、慎一郎さんは、嘘だとわかってても婚約者だと言ってる。。。。

「。

「……彼は、叔母様が私を気に入って下さってるので、
もう、それだけでいいと思ってるみたい。。。」

「君の事が好きじゃないのに? 愛していないのに?」

「ええ、私の事を好きで結婚するって言っている訳ではないの」

「でも、結婚するつもりでいる?」

「……そう彼は言っているけど、どこまで本気かわからないわ」

夕紀は首を振りながら、慎一郎の気持ちを自分が言ってもいいのか、悩みながらも答える。

「君は？」

「え？」

「君はどうなの？」

「……………」

「ユキちゃん。君は慎一郎さんと結婚したいの？」

「私は……………」

私は、愛し愛してくれた人と結婚したいと思っています」

夕紀はその言葉を発した後、自分の望みはこれなんだと自覚した。早くに家族を亡くした。

その為、人一倍、暖かな家庭を望んでいた。

自分の愛する人の横に一生寄り添っていきたい、暖かな家庭を育んでいきたい。

そう望んでいた。

浩二は夕紀の暗い表情が気になったが、この時を逃すつもりはなかった。

「それなら、僕の事を考えてくれる？」

夕紀は浩二の発言に驚き、彼の顔を凝視すると、彼が熱い目で夕紀

を見つめていた。

62 (後書き)

ついに・・・浩二君、動きます。

頑張ってるって、声をかけたいと思います！

毎日、暑い中、本当に多くの方がお立ち寄り頂き、
ありがとうございます。

お気に入り件数もびつくりするぐらい多くの方が
ご登録頂き、本当に嬉しいです。

(御礼の言葉がいつも同じで、ボキャブラリーの無さが露呈して
います・・・。
本当に有り難いです)

これからも、お時間があれば、お立ち寄り頂けると嬉しいです。

浩二は自分が夕紀に落とした言葉の重さを知ってか知らずか熱のこもった目で、彼女を見ている。

「君の節子叔母さんへの接している態度をずっと見ているうちに、君の人となりを少しは知ったつもりだよ。」

君は思いやりがあつて、人を包み込む温かさと大きな心を持った女性だ。」

「買いかぶりすぎだわ」

「そうかな？ あの節子叔母さんだって、君をすぐに好きになつて安心して君に全てをゆだねているじゃないか？」

「……」

「君は一緒に生活して、人に安らぎを与えられる人だよ」

夕紀はフルフルと首を振った。

嘘をついた自分がこんな風に言ってもらふ資格などない。

「父が入院することになって、慎一郎さんが婚約者を手伝いによこすと聞いても、

興味も何も湧かなかつた。

彼がいつもマスコミを賑わしている女性たちの事は知っていたし、彼の婚約者もその彼女たちのうちの一人だろうと思っていた。

だから、どれだけの事が出来るか、全く期待してなかったよ。きつと、自分がすぐに尻拭いに呼び出されるんだと、思ってた。」

夕紀は、浩二のこの言葉が当たらずとも遠からずだと由紀子の顔を思い浮かべながら思った。

「それがいつまでたっても、叔母さんからも誰からも連絡が来ない。訝いぶかしく思いながら、こっそり、君たちを尋ねたのさ」

「……」

「外に出たがらない叔母さんが、君に手を取られて、散歩道を歩いているじゃないか。それも楽しげに穏やかな笑顔を浮かべてだよ。」

本当に驚いた」

「……」

「きつとその時からだったのかもしれない……」

「？」

夕紀は、その言葉は意味を計りかねた。

浩二は夕紀の、小首を傾げた表情も気にせず言葉を続ける。

「それから、君と接するようになって、君は今まで見ていた

煌びやかな慎一郎さんの周りを飾っている女性じゃないってわかつ

て……」

「がっかりしたでしょ。私は美人でもないし、スタイルだって、こんなだし」

夕紀は、いつも慎一郎の周りにいる女優やモデル達とは

顔立ち一つとっても、また、スタイルという点でも自分と比べ物にならない。

「そうじゃないよ。そんな事いつてるんじゃない。」

確かに、君はいつも慎一郎さんが連れてくる女性たちとはいろいろな面で違うけど、

君という婚約者がいる彼を、初めて羨ましく思ったよ。」

「そんな風に言ってもらえる事は何もしていないわ」

「違うよ。君は、特に何をしたとは思っていないかもしれないが、そんな風に人に接する事ができるのは、君のいい所の一つだ」

「もう止めて。」

「君が慎一郎さんの婚約者だと思っていたから、

僕は自分を必死で止めてたんだ。」

夕紀は浩二にこれ以上言わすのは、卑怯だと感じた。

いくら、夕紀がこれまでこういった事に縁遠かったとはいえ、

浩二が何を言いたいのかぐらい見当がつく。

でも、何といえばいいのだろう……。

「僕の事は嫌い？」

「……いいえ。」

「じゃあ、少しは好きでいてくれる？」

いつになく、浩二らしくない強引な話の進め方に夕紀は戸惑うばかりだった。

夕紀は困り果てていた。
彼を傷つけない。

拒絶の言葉を出れば言いたくなかった。

「君が慎一郎さんの婚約者じゃないなら、僕は、君を諦める必要はないはずだ」

「・・・浩二さん・・・」

浩二は思い切ったように、次の言葉を言う。

「僕の事を、一人の男として見てほしいんだ。」

「！」

「君に僕の傍にいてほしい。そして、君のその笑顔を僕に守らせてほしい」

ここまで言わせてしまった、自分の優柔不断さを
夕紀は呪いたくなった。

「浩二さん・・・。」

思い切って、口を開こうとした時・・・。

二人の張りつめた空気を裂くように、夕紀の名を呼ぶ声がした。

「夕紀」

慎一郎が少し離れた所で厳しい顔つきで自分を呼んだ。
彼はその表情を緩めることなく、数歩で夕紀の傍までやってくると、
彼女の手を掴んだ。

「夕紀。節子叔母さんが戻って来た」

慎一郎は浩二にきつい視線を送ると何も言わず、手を引き歩き出した。

浩二の声が聞こえた。

「考えてほしい！僕は真剣だよ。」

慎一郎は、浩二の声を夕紀に聞かせまいとするかのように足音を立てながら、
足早に彼女を院内へ引っ張った。

仏頂面の慎一郎に引きずられるように歩きながら、

夕紀は慎一郎に掴まれている手を意識せずにはいらなかった。

「そんなに、引つ張らなくてもちやんとついていきます」

「引つ張ってないだろう。」

そんな風を感じるのは、歩くのが遅いからだ」

何をそんなに怒っているのだろう。

もしかして、浩二との話が聞こえていたのだろうか？

先ほどの事を説明しなければと、夕紀は立ち止った。

それに気付いた慎一郎が眉間にしわを寄せて振り返る。

「浩二さん気づいています」

「らしいな。高崎にも聞かれた」

「……………そうですか……………。私……………だから……………話しました。」

「……………なんて？」

「身代わりだと……………」

「でも、今はそうじゃないと言っただろ？」

「……………」

「なぜ、黙る？」

「……………」

「最初はどうぞであれ、結婚すると伝えただろ？」

「……………」

「夕紀！」

夕紀はポツリと言う。

「やっぱりおかしい……………」

「何がだ！」

「私がここにいる事が！」

「なぜ？ 俺の婚約者だからここにいるのは当然だ」

「違うでしょ！」

「何も違わない！」

痛いほど夕紀の手をにぎりしめている目の前の慎一郎を見上げる。

なぜ、彼なんだろう？

どうして、浩二じゃ駄目なんだろう？

慎一郎に引きずられるようにここにいてるのはどうしてなんだろう？

それでも、彼に握られている手を振りほどく気持ちになれなかった。かすかな望みを抱いていってしまう自分が愚かだと思う。

「浩二は優しいからな」

「え？」

「浩二は騙されていた事もあっさり許して、おまけに口説いてきたんだろう？」

「・・・別に・・・」

「嬉しかったか？ 奴に乗り換えるか？」

「そんな・・・」

「浩二となら、その愛のある生活とやらを送れるのか？」

慎一郎は本気で言っているのだろうか？

「俺との結婚はそんなにひどい事か？」

「・・・」

「世の中、こんなもので結婚している夫婦は、山ほどいる。それが、そんなに悪い事か？」

畳みかけるように言われ、夕紀は返す言葉が見つからない。

「でも、私は愛している人と結婚したい」

「じゃあ、俺がそう言えば納得するのか？」

「？」

「俺が口先だけでも『愛している』とそう言えば、満足か？」

慎一郎の口から出た、信じられない言葉を耳にし、夕紀は顔を真っ赤にして大声を出した。

「そんなはずないでしょ！ そんな事望んでいないわ！」

「それなら何を望んでいる？ それで夕紀が結婚する事に戸惑いがなくなるなら、

何でも、何度でも言っただけでいいわ！」

慎一郎が歯を食いしばるように、言葉を吐き捨てる。

「俺は、君を手放すつもりも、浩二にくれてやるつもりもない」

「私は、物じゃないわ！」

「いや、君は俺のものだ。」

「どうして……。」

「いい加減に諦めろ。俺は何かあっても君を祭壇の前に引きずって
いく」

「……。」

「何が欲しい？俺に何を言っただけ？」

『執着』

今の慎一郎はそれだけだ。

逃げるから追ってくる。

ただ、それだけだろう。

子供のようには、一時の気まぐれで執着しているだけだ。

自分を睨むように見下ろしている慎一郎をじっと見つめる。

どうしようもない、自分勝手な男。
驚くほどの才能と人を引き付ける魅力を持ち合わせておきながら、
愛を信じられない、寂しい男。

夕紀の事をなど何とも思っていない、いや、もしかしたら、都合の
いい女性とでも
思っているのかもしれない。
それなのに、彼の事を嫌いになれない、そんな自分を笑うしかなか
った。

彼の手の熱さが、強さをそれでも望んでしまう。

自分の気持ちがすでに確かな想いである事が痛いぐらいだった。

それなら流されるままに、ほんの少しの間だけでも彼の傍にいても
いいじゃないか。
しばらくすると彼も平凡な自分に飽きるだろう。

その時は胸が抉られるような痛みが自分を蝕むかもしれない。
でも……..
それまでは、きっと今までに感じ得なかった幸せも味わえよう。

愛する人の傍かたわらにいる。
そんな一瞬の夢に浸ってみよう。

夕紀は静かに息を吐きだした。

「叔母様に会いに行きましょう」

夕紀は慎一郎とともに歩きだした。

64 (後書き)

煮詰まっています。

慎一郎も夕紀も同じように煮詰まっています。

本当に多くの方がお立ち寄り頂いているのに、

こんなにグツグツしてて、いいのかと不安でいっぱいです。

それでも、よろしければこの後もお立ち寄り頂けると嬉しいのです。

手術を明日に控え、術前の検査が無事に終わり、節子がホッとした表情でベッドに腰掛けており、その横には高崎が寄り添っていた。

慎一郎がそつと節子の手を握り、優しく話しかける。

「叔母さん。夕紀も来ている」

その声に、パツと顔が華やいだ。

「ユキちゃん。来てくれたの？」

「ええ。叔母様、ご無沙汰しています。」

「ほんとよ。あれ以来、全然訪れてくれないなんて……。ちよつと薄情じゃない？」

節子の嬉しい言葉に、夕紀の顔も自然とほころぶ。

「すみません。いろいろあって……。

でも、検査の結果もいよいよだし、この調子なら、明日の手術は成功間違いなしですね」

「そうだといいんだけど……。」

心配そうな節子を勇気づけるように高崎が節子の肩に優しく手を置

いた。

「節子さん、大丈夫ですよ。必ず成功しますよ」

高崎の手と言葉と表情すべてに、節子への愛情が見て取れる。

二人の間に確かに固い絆があるのがわかる。

その優しい高崎の言葉に促される様に、節子が肩に置かれた手に自分の手を重ね、

おずおずと慎一郎に話し始めた。

「慎一君、この手術がどんな形で終わろうとも、私たち結婚する事にしたの」

「……………結婚ですか……………」

「そうよ。彼が入院した時に思ったの。」

これまでは、私が頼ってばかりだったけど、

これからは私も彼を支えられるようになりたい。

いいえ、違うわね。私が支えたいって思ったわ」

「……………」

「慎一君、認めてくれるかしら……………」

「お二人ともいい大人なんだし、別に俺の許可が必要じゃないですよ」

「それはそうだけど、慎一君には賛成してほしいの」

「高崎さんが叔母さんを大事にしてくれている事は分かっています」

「……………じゃあ、いいのね」

慎一郎は穏やかな口調で話しながらも首を傾げる。

「でも、なぜ、みんながみんな、結婚に拘るかがわからない」

反対している訳ではないが、もろ手を挙げて賛成とイかない様子の慎一郎に高崎が問う。

「君だって、結婚するじゃないか？」

「……」

慎一郎が考え込む。

節子は慎一郎の沈黙を否定ととったのか、取り成すように告げる。

「これからお互いに何があっても、それぞれが一番に助けあい、思いつている存在だと、

世間にも知ってもらいたいよ。」

「今でもそうでしょ」

「いいえ。もし、どこかで私が不慮の事態にあつたら、彼に連絡が入るのか、

いつになるのかと不安だったわ。それは、反対の時だってそう。」

確かに、公的書類で認められなければ、いろいろな対応がむずかしい場合もあるだろう。

慎一郎は以前として何かを考え込んだままだ。

「若い時は、情熱だけで一緒にいたいと結婚を口にする事もあるのかもかもしれないけど

この年になるとそれだけではなく、ありきたりな日々を一日一日大事にしていく中、

二人で過ごす時間を誰に何を言われることなく、持ちたいのよ」

節子が穏やかな笑顔で話すのを、慎一郎はじっと見つめたままだった。

「彼が入院して気づいたの。彼との時間が自分にとって、普通であり、特別なのだということに」

夕紀は慎一郎が、戸惑っているのが手に取るようにわかる。この何ともいえない閉塞感を破りたくて、口を開いた。

「おめでとつございます。結婚式はされるんですか？」

夕紀の明るい声に、すぐさま節子も反応した。

「ええ、こんな年なんだけど、近くの教会で挙げようかと」
「素敵ですね。」

「そう思う？この年で恥ずかしくないかしら？」
「全然大丈夫です！幸せはみんなにお裾分けしないと！
ぜひ、ウエディングドレス着て下さいね」

女性二人は、ドレスや指輪の話でひとしきり盛り上がった。その間も慎一郎は、黙って節子とその横で穏やかな表情で座っている高崎を見つめていた。

日が暮れたのを機に慎一郎と夕紀は、病院を後にする。

帰りの車の中、慎一郎はやはりまだ何か考え込んでいるようで、黙ったままだった。

余程、節子の結婚の話が意外だったのだろう。

確かに、二人はもう若くはない。

結婚したからといって、子供を望むとか、そういう事ではないはずだ。

それに、財産云々など、浩二も独り立ちしている今となっては、関係ないはずだ。

二人は、今までとあまり変わらない生活を送る事だろう。

そして、これから老いに向けての二人には、辛い事もやってくる。

それが見えていながら、お互い支えあいたいと節子は手術を決心し、そして、結婚を決めた。

慎一郎はきつと、あの二人が結婚する必要があるのかと考えを巡らしているのだろう。

だが、夕紀には、節子の気持ちが分かる気がする。

慎一郎の健康を考えて食事を作り、穏やかな、彼がリラックスできる空間をセッティングする。

彼の癩癢や我儘をいなしながら、笑いあう。

彼の映画への情熱を損なうことなくサポートしていく。

彼との平凡な日常を望んでしまう。

信号待ちで慎一郎が口元に拳をあて、首を振った。

「どうしました？」

「え？」

「さっきから、黙ったままだけど……」

「ああ。少し、驚いた」

「お二人の結婚の事？」

「そうだ。叔母が何を考えているのか俺にはわからん」

「……そうでしょうね……」

「夕紀にはわかるのか？」

「ええ、何となくけど……」

慎一郎は不思議なものをみるかのように夕紀を改めて見つめる。

「そうか。分かるのか……」

「慎一郎さん？」

「俺はもしかして、見つけたいのかもしれない」

「何を？」

「さあ？ 何だろう？ まだ、それが何かわからないんだ」

慎一郎は再び首を振った。

後ろから急かすようなクラクションで、慎一郎は夕紀から視線を外し、
車を走らせる。

夕紀は、慎一郎がそれを見つける事が怖くもあり、しかし、彼が間違った道へと進む事の歯止めになればと思った。

彼が見つけたいたいののは、きっと《愛》だろう。

それが形に見えないから気付かないだけだ。

彼がそれを見つけた時は、きっと自分は傍にいない。

節子の手術は何事もなく短時間で終わった。

術後の経過が良好なら、夕刻にでも面会できるとの事だった。

その間に、高崎と慎一郎は事務手続きをしてくと、夕紀を一人おいて、

待合室から、出て行った。

男二人は廊下の突き当りに立ち止り、窓の外に目をやりながら、高崎が話し始めた。

「慎一郎さん、彼女を節子さんに会わせていいんですか？」

「どういう事ですか？」

「浩二から、詳しく聞きました」

「彼がどう伝えたか知らないが、夕紀は俺の婚約者だ」

「節子さんを悲しませないと、約束してくれますか？」

慎一郎は高崎の言葉に眉をひそめた。

「悲しませる？どういう意味だ」

「彼女は本来のあなたの婚約者じゃない。」

「今は、婚約者だ」

「彼女は、あなたを受け入れてくれたんですか？」

「今一緒にここにいるのがそうだと思えないのか？」

「自分の都合を押しつける関係は、最初うまくいっても、すぐに破綻しますよ」

「……浩二の母親との結婚のようには？」

高崎は、慎一郎から視線を外し、足元を見つめた。

「……あれは……」

「誰も、最初から破綻すると思って結婚する訳じゃないだろう？」

もちろん、あなただってそうだったはずだ」

「ですが……。節子さんには、なんて……」

「叔母にはうっかり名前を伝え間違えたとも言つた。

夕紀を気に入っているんだ。疑う事はない」

「……」

「まだ、何か？」

「あなたは、彼女をどう思っているんですか？」

「俺？」

高崎の批判的な視線も慎一郎にとっては気にならないものだった。

「あなたにそんな非難の目を向けられるとは、思わなかったな。

あなたの最初の結婚だって誉められたものじゃないでしょ。」

「私は……」

「彼女に期待を持たせていないだけでも、俺は正直ですよ」

高崎は、慎一郎に対して、自分たちや彼の両親が与えた影響の大きさを

あらためて気付かされた。

慎一郎の夕紀への執着が、彼が自分で思い込んでいる理由ではない事に

早く気付く事を祈るしかなかった。

高崎が考え込んでいると、今度は慎一郎の方から質問してきた。

「それより、本当にするつもりですか？」

「・・・節子さんとの結婚ですか？」

「その年になって・・・。思いついたとしか言いようがない」

「そうですね。あなたから見ると、意味がないでしょうね」

高崎の痛烈な言葉に慎一郎は眉をひそめる。

「私は・・・。彼女を支えられればそれで満足です。」

私は今の生活でも充分幸せです。

そして、これからもこの生活が、崩される事はないと思っています。

私が彼女から離れる事はありません。

それでも節子さんが新たな二人の関係を望んでくれて、嬉しかったです。

「何も望まない？ 離れないって・・・それって男の純情か？」

慎一郎は馬鹿にしたように笑う。

「浩二の母親と結婚した同じ男とは思えない言葉だな」

「確かに、浩二の母親との結婚の経緯は誉められた物ではありませんせん。

いや、あれは間違いだったと認めましょう。

彼女には本当にすまない事をしたと今でも思っていますよ。

だからこそ、あなたには真剣に相手の事を考えてほしいのです。そして自分の気持ちを見つめてほしい。

慎一郎さん。あなたには、後悔してほしくない。」

慎一郎は高崎の忠告が的外れだと思いつつも受けとめた。だが、彼の言った言葉に一つだけ頷ける所もあった。

『後悔してほしくない』

その通りだ。

だから、夕紀と結婚するんだ。

慎一郎はなぜだか分かっていた。

夕紀と結婚しないと自分はきつと後悔すると。

慎一郎は、昨日から自分の身に潜みだした何かが、なんなのか？早く見つけなければと焦る気持ちに慎一郎は苛立っていた。

66 (後書き)

そろそろ、終わりに向けて準備です。

慎一郎も終わりに向けて焦り(？)つつあります。

グダグダがダラダラ続いて……？

蝉の声と話のダラダラが重なり、それでも、我慢頂ける方、お立ち寄り頂けると嬉しいです。

一足先に面会を許された高崎から少しの間を置き、二人は病室に向かった。

慎一郎の大きな背に隠れるようにしながら、そっと入っていく。夕紀は不安でいっぱいだった。

はじめて、自分の顔を節子に曝すことになる。

節子は高崎の手を握り、涙を流していた。

でも、涙でうるんでいるその目は穏やかな喜びに包まれている。

節子が物音で二人に気付いた。

「慎一君？」

「叔母さん、見えますか？」

「ええ。慎一君・・・まあ、ハンサムになって・・・それに、兄さんによく似ているわ」

今までは、霏がかかったようにしか見えていなかったのが、メガネをかけるとかなりはっきりと、見る事が出来る。

幼いころの昔の面影が少し残っているが、大人としての慎一郎の顔をマジマジと見上げる。

精悍な顔つきが、亡くなった慎一郎の父親と重なる。

「目元も口元も、国枝似ね……。
本当に、あの小さかった男の子がこんな大きくなって……」

節子の感慨深い言葉に慎一郎はに、照れくさそうに笑う。

「叔母さん、見えるようになって本当に良かった。本当に……。
そうだ、夕紀を紹介するよ」

慎一郎は自分の背を振り返り、隠れるように立っていた、夕紀の手を引いて、
叔母の前に並んだ。

「夕紀ゆい?　ユキちゃん？」

夕紀は緊張で心臓の鳴り響く音が部屋にこだましていないかと不安なほどだったが、
ゆっくりと頷き口を開いた。

「はい。……はじめまして……」
「ユキちゃん！　ああ、ユキちゃんだわ！　私が思っていた通りのユキちゃんだわ」

節子が手を差し出してきたので、ベッドに近寄り、そっとのその手を握ると、

ギュッと引き寄せられ、抱きしめられた。

節子の暖かい体温が夕紀を包み込む。

そして、体を離すと、覗き込むように夕紀の顔を見入る。

「もっと、よく顔を見せて。本当にユキちゃんね。

ああ、嬉しいわ。あなたが、こんな優しい目で。穏やかな口元で。そして、肌もすべすべね。ほっぺもホント可愛いのね！

気にしてたけど、ユキちゃん、全然太っていないわよ。」

夕紀のふっくらとした輪郭を節子の手がなぞった後、再びギュッと抱きしめられた。

夕紀は、節子が無条件に自分を受け入れてくれることに、申し訳なく思う。

慎一郎が、叔母の感激ぶりを壊さないように、穏やかに声をかけた。

「叔母さんに一つ言っておかないといけないんだ」

「なに？」

「由紀子って伝えたけど、俺が伝え間違っていたんだ。」

「間違い？」

「彼女の従姉が由紀子って言う名前で、そっちと最初に出会ったものだから

俺の中で、ごちゃごちゃになってしまっていて・・・

本当は夕紀なんだ」

「だって、ユキちゃんだって……。由紀子ですって」

「俺が訂正するのめんどくさいから、口裏合わせるように言い含めたんだ」

「面倒って、何が？」

確かに、こんないいわけでは納得しないだろう。

「映画の話が本格的になりだしたところで、俺もあの時は別荘には行くつもりなかったから、

また、ゆっくり会えた時でもいいかと思ってたんだ。」

「一言、伝えれば済む話じゃない？」

「まあ、そうなんだけど、いろいろあつたんだよ」

「何よ。いろいろって……」

「叔母さん、えらく追及してくるなあ」

慎一郎は、それがたいした間違いではないと思わすような軽い口調を心がけた。

節子は慎一郎に疑わしい目を向ける。

「そりゃ、ユキちゃんだからよ！」

もう少し、何かを付け加えておくべきだろうと、

少しの真実を混ぜた嘘を慎一郎は重ねた。

「夕紀はある時期まで、俺から逃げたがっていたから、デビュー間近の従姉の名前を名乗ってたんだ。

でも、もう、心配ないから」

「心配ないって?」
「逃がさないってことだよ」

慎一郎は適当にのらりくらりと言い繕いながら、最後だけは真実を告げた。

それ以上、節子が追及してくることはなかった。

呼び方が変わるわけではない。

目の前にいるこの女性が慎一郎の婚約者だという事も変わらない。節子と夕紀の関係が、以前と変わりないものであると確信できた。そして、甥の夕紀への想いは本物だろう。

節子は名前ぐらいの事で、この幸せを壊したくなかった。

そして、夕紀も、名前の件に関して、どうであれ、節子が受け入れた事を感じ、
思わずホッとしていた。

本当は、ここで真実を伝えるべきなのかもしれないが、
術後という事もあり、事を荒立てるのは、得策ではないと判断していたからだ。

夕紀は節子の目の回復ぶりを、まるで自分の事のように喜び、

結婚式の準備を手伝ってほしいとの節子の願いに、大きく頷いた。

慎一郎はその様子を窓にもたれ眺めながら、夕紀の頑固さに手間取りつつも、

自分の思い通りに事が進んでいるのに満足を覚えた。

叔母の結婚式が終わり次第、仕事の合間をみて、結婚式の準備に取り掛かるうと決めた。

戻ったらすぐにでも、白石に連絡を入れよう。

最優先事項が変わったのだから、スケジュールを調整をさせなければ。

驚愕するであろう白石の顔を思い浮かべ、秘かに人の悪い笑みを口元に浮かべた。

別荘地のはずれにある静かな森の中の小さな教会で節子達の結婚式が行われていた。

祭壇の前で白いドレスに身を包んだ節子と、スーツを着込んだ高崎が手と手を重ねあつて、神父の言葉の後を復唱していく。

【良いときも悪いときも、富めるときも貧しきときも、病めるときも健やかなるときも、死がふたりを分かつまで、愛し慈しむことをここに誓います。】

節子が涙を浮かべながら幸せな笑みを浮かべている。

高崎がその節子の手を握り、優しい笑顔で慈しみの眼差しを降り注いでいる。

その言葉の重みと二人のお互いを思いやる表情に、夕紀は胸が締め付けられるようだった。

参列している誰もが微笑んでいる。

そつと、横の慎一郎を見上げる。

彼はギュッと口元を結び、目を細めて二人をじっと見つめている。

まだ、戸惑っているのだろうか？

彼のそんな表情でさえ、愛おしかった。

本当の婚約者として、ここに参列していれば、全く違っていただろう。

きつとせり上がってきた気持ちに押され、感激の涙で目を赤くはらしていたのに違いない。

不意に視線を感じたのか、慎一郎が夕紀に顔を向けた。

慎一郎は、ギョツとした。

二人の視線が絡みあったと思った途端、夕紀の瞳から涙がハラハラと零れた。

その涙を見て、感激の涙とは思えなかった。

節子の結婚が嬉しくて、流したのではないと、なぜか確信できた。

夕紀の涙をすぐに拭ってやりたかった。

何が、彼女に涙を流させることになったのか、

問いただし、それを原因を取り除いてやりたかった。

彼が手を上げてその頬を拭おうとした矢先、

参列者から拍手が起こった。

節子と高崎が、祭壇横の机上の広げられた婚姻届にそれぞれ署名を済ませ、列席者へ向かって頭を下げていた。

夕紀も涙をぬぐった手で大きな拍手を送った。

慎一郎は、得体の知れないこの宙に浮いた気持ちをどうすればわからないまま、

節子達が自分の脇を通り過ぎるのを拍手で送った。

その後、親しい人達だけの内輪のパーティには、双方の親族や友人が集い、和やかに談笑が交わされていた。

もちろん浩二も出席している。

壁際で、目立たないようにひっそりと夕紀はパーティを傍観していた。

節子と高崎は主役の席で、出席者からの祝福を受けて笑っていた。その脇で慎一郎は、年配の人達に囲まれて、グラスを傾けていた。

慎一郎の実家は、代々受け継がれている資産家の家系だ。

若い時には、節子達の結婚は許されなかったかもしれないが、今は、こんなに穏やかな祝いの場がもたれている。

婚約者面して彼と並んで、囲んでいる人達に、混じるつもりはなかった。

慎一郎は、どんな気持ちでこの場にいるのだろうか？

ぼんやり慎一郎の姿を見ながら、グラスを口にしようとした時、浩二がシャンパングラスを片手に近づいてきた。

「いいお式だったね」

「浩二さん・・・本当に素敵なお式でしたね。」

叔母様も高崎さんも幸せそうだったわ」

「うん、その通りだ。夕紀ちゃんは、泣いていたね」

「・・・わかりました？ 感激しちゃって・・・。」

「・・・そうなの？ 僕には、ユキちゃんの涙が、うれし涙には見えなかったな」

「・・・」

「いつまで、慎一郎さんの婚約者のふりをするの？」

「・・・」

「このまま、押し切られて、結婚してしまうの？」

「・・・」

「君は、それでいいの？ 身代わりのまま、愛がなくて。」

夕紀も、慎一郎との、この関係を断ち切るべきだと頭では分かっていた。

だが、彼との時間を捨てがたかった。

彼の為に食事を作り、美味しそうな顔で食べてくれる。

彼と二人の時間は、思っていたよりもずっと和やかで、かつ、賑やかな日々だった。

慎一郎が夕紀をからかう。

弾む会話の声。

同じ空間での各々が過ごす静寂な時間。

そして、その合間に絡まる親密な視線は、慎一郎が一步踏み出す夕イミングを

見計らっているようだった。

彼の仕事仲間とも、マンションで会う事がたびたびあり、だんだんと打ち解ける事が出来た。

仕事の合間の、いろいろな話に夕紀も臆することなく加われるようになった。

見た目の華やかな世界とは無縁の、地味でそして、努力が日の目を見ない仕事にさえ

喜々として精力を傾けた彼らの仕事ぶりにも触れ、一種の感動を覚えていた。

それは、今まで感じた事のない、充実した時間だった。

何よりも、自分の横で慎一郎が穏やかな表情で寄り添ってくれる。その言葉には出来ない、幸せが夕紀を包んでいた。

感じている幸せは、自分だけの思い込みかもしれない。

彼が自分に愛情を感じてくれていなくても、

結婚するのに都合のよい相手だと、それだけの存在でしか

自分を見ていなくてもいい、そう思う時もあったのは確かだ。

自分の愛情だけで、うまくやっていけるのではないか？

そんな錯覚をしていた気もする。

だが、先ほどの、教会での誓いの言葉。

自分は、その言葉を心から復唱出来るだろうか？

神の前、自分たちを祝福する為に集まってくれている人達の前でこんな気持ちで、あの誓いを交わすのだろうか？

夕紀には出来そうになかった。

ようやく、目が覚めた。

弱い自分を奮い立たす決意が出来た。

「浩二さん。心配してくれて、ありがとう」

「夕紀ちゃん。僕でよければ力になるよ。いや、力になりたいんだ。」

「大丈夫。ちゃんと一人で出来るし、それにこの事は浩二さんには関係のない事よ。」

夕紀はニッコリと浩二に笑いかけた。

「・・・・・・・・少し、外にでないか？」

夕紀の笑顔と言葉に浩二は何かしらの彼女の決意を感じとり、テラスへと誘う。

その二人を、慎一郎は、親戚に囲まれながらも目を離す事はなかった。

浩二の後について、テラスで向かい合う。
パラソルの陰で風に吹かれると、少し肌寒い。

「ユキちゃん、決めたんだ？」

「ええ……。」

「僕では君の役に立たない？」

「浩二さん……。」

「僕を頼ってほしい。そして、……僕に君を支えさせてほしい。」

浩二が夕紀へ、一歩、踏み出そうとしている。

これ以上、うやむやにはしておけない。

彼にはつきり言うべきだろう。

口を開こうとしたその時、足音が聞こえ、二人して振り返る。

慎一郎が睨みつけるようにまっすぐ浩二に向かって来る。

「浩二」

「慎一郎さん……」

夕紀は、男二人のにらみ合いに、一瞬の火花が散ったかと思った。

「人のテリトリーを荒らすのは、楽しいか？」

「時と場合によるでしょ」

「荒らされる方が黙っているとは思えないが」

「荒らす方だって、そうする理由があるからだと思いませんか？」

浩二の言葉に慎一郎の眉が上がる。

「理由？」

「そうです。守りたいからです」

「守りたい？ 奪いたいの間違いじゃないのか？」

「意に染まぬ事、辛い事から守りたい。支えたいんです。」

「守ってどうする？ 支えてどうする？ 結局は自分の物にするつ

もりなんだろう？」

「いいえ！ いいえ、俺はそんな事はしません。彼女が望まない事

は……」

浩二の真摯な言葉に、慎一郎は口元を不機嫌に歪めた。

「じゃあ、正義の味方は助けるだけ助けて、去っていくんだ。

愛しの彼女は他の人と幸せに暮らしましたとさ？

それでいいんだ？」

「……………」

「俺には、そんな偽善者みたいな事は出来ないし、する気もない！」
「自分が良ければ、それでいいんですか？」

「所詮、人間は、エゴの固まりさ。自分が一番可愛いのだよ！」
「それで、お互いに利益が生まれればいいじゃないか！」

「本当にそう思っているんですか？ 相手の気持ちは？」

「気持ち？ まさか、浩二まで、愛だのなんだのって言わないだろ
うな！」

「どうして僕が言っちゃいけないんですか？」

「まさか、お前がその言葉を信じているとは思わなかったからさ」

不安な眼差しで、二人を見ている夕紀に、慰めるように浩二が微笑
んだ。

「ユキちゃん、この男は君には相応しくない。

こんな奴から、一刻も早く離れるべきだ。」

「……………浩二さん」

浩二が夕紀の不安を取り除こうと、彼女の肩に手をのばす。

その行動に、慎一郎がとつさに動いた。

浩二の手が夕紀に触れる前に、浩二の手首を掴んで阻んだ。

浩二より一回り大きい慎一郎の反対の手は拳を握っている。

「浩二。お前は自分の父親の事、母親の事、知らない訳じゃないよ
な」

「知ってます」

「叔母の事は？」

「それとなくは……」

「許せるのか？」

「……」

「自分がこうやってここにいる事が、

その愛やらなんやらを履き違えたからだって思った事ないのか？」

夕紀はこれ以上慎一郎に、話させるべきではないと思った。

「やめて！」

「どうして止める？」

「お願い。もうやめて、辛い話は……」

「俺が言うのが真実だから辛いんだろう！」

夕紀には、ひどい言葉を投げつけられた浩二以上にそれを投げつけた慎一郎の方が辛そうに見えた。

「僕はあなたと同じじゃない。そんな風に思ったことない。

父は僕を本当に愛情を持って育ててくれた。母に対しても、産んでくれた事を感謝してる。

僕は人を愛する事も愛される事も知っている」

「……そう言う事が。そうだな。その通りかもな。俺とは違うってことか」

「……」

「俺のように疎まれて生まれて、邪魔者のように育ったわけじゃなかったな」

慎一郎は自嘲気味に自分自身を笑い、浩二の手首を突き放した。

69 (後書き)

今回は、浩二 vs 慎一郎です。

次話で決着がつくと良いのですが・・・。

暑い時に、このジレジレのお話、本当にすみません。

よろしければ、時間つぶしにでも、覗いて頂けると嬉しいです。

浩二は怒りにまかせて、口走った今の言葉を出来るなら、取り消したかった。

慎一郎が愛情の中で育っていないと暗にほめかしてしまったと後悔した。

父親から聞いた彼の幼少期は冷たい寂しいものだった。

浩二は、力の限り掴まれていた手首を思わずさすりながら、自分の失言に唇を噛みしめる。

「すみません。・・・」

「謝る事なんてなにもないさ。」

俺が産まれてここにいるのは、愛という言葉をつまぐ自分達の都合のいいように

扱った結果だいう事を俺自身、充分、分かっている。

浩二が、謝る必要なんてないさ。

高崎に、親父から、そうやって聞いているんだろう？

浩二は何とか言わなければと思い、苦肉の言葉を吐きだした。

「必ずしもそうとは言い切れないでしょ・・・。」

「お前に何が分かる？」

「慎一郎さん……。僕にはあなたの事は分からない。」

「その通りだ。それなのに夕紀に俺が、相応しくないと決めるつけるのはなぜだ？」

「でも、あなたがそんな気持ちでいる限り、やはり、彼女には相応しくない。」

「相応しい相応しくない？ 誰が決める？ お前が決める事か？」

「僕はただ、ユキちゃんに幸せになってほしいだけだ。」

「お前なら出来るのか？」

「ユキちゃんが素晴らしい女性だって事は分かってるさ。」

僕にとつてかけがえのない女性だ。そんな女性と初めて出会ったんだ。

彼女が傍にいてくれるなら、一生の愛を誓う」

慎一郎が今度は浩二の胸倉を両手で掴んだ。

浩二が発した夕紀への愛の言葉が、許せなかった。

今の浩二の言葉が彼の心からの真実の言葉だと慎一郎にだって理解できた。

自分にはわからない感情を浩二が夕紀に伝える。

訳のわからない怒りが慎一郎の胸中に吹き荒れる。

「やめて！二人とももうやめて！」

夕紀が二人の間を引き離すように割って入る。

慎一郎は荒れた息を整え、今さらと思いつつも平然を装い、浩二を見据えた。

そして、ゆっくりと掴んでいた浩二の胸倉を離した。

夕紀に向かい合い、慎一郎は意志を込めて夕紀に手を差し出した。

夕紀がその手をじっと見つめた後、涙にうるんだその目が慎一郎を見上げ、彼の言いたい事を探る。

「夕紀、選べ。」

この手をとるか、それともここに残るか」

夕紀は、目を見開いた。

その手を拒む事は、彼を拒む事だ。

彼との結婚を受け入れる事はない。

だが、浩二に応える事もできない。

慎一郎から逃れるためにこんな気持ちのまま、浩二の傍にいる事は絶対にしてはいけな事だ。

何よりも、この手に温もりを伝えたい。

そして、傷ついた慎一郎をこのまま一人で行かせたくないと思った。今、この一瞬、少しだけでも自分が傍にいる事で、彼が慰められるなら、

その一瞬を自分は選ぼうとしている。
浩二を傷つけても、慎一郎を慰めたいと思っている、自分がいる。

浩二がどれだけ素敵な人がぐらい、夕紀だって充分にわかっている。
慎一郎と出会っていないければ、浩二との穏やかな日々を夢見れたの
かもしれない。

でも、慎一郎と出会ってしまった。
彼への想い、それだけは、偽りたくなかった。

ここに残る事は出来ない。

夕紀は浩二に振り返り、彼の瞳を見つめた。

彼の想いが充分に心に染み込んでくる。
自惚れでもなく、彼が自分を大切に思ってくれている事が伝わって
くる。

それでも……。

これまでの感謝をこめて、そして、この辛い場面となってしまうた
ことへの
謝罪の思いを込め、ゆっくり頭を下げた。

そして、その後、慎一郎の手に自分の手を重ねた。
彼の大きな手が、夕紀の手をギュッと力強く握り締めた。

浩一の頂垂れた気配を感じた。

慎一郎の大きな手に包まれながら、今はこの手を掴んだが、近い将来、離さなければならぬと強く自分に言い聞かせていた。

夕紀は、新婚旅行と保養を兼ねて、昔ながらの温泉地から帰ってきた節子と高崎を、尋ねた。

結婚式の日から、3週間がたっていた。

「いらっしゃい」

薄いピンクのフレームの眼鏡が節子には良く似合っている。結婚のお祝いに、夕紀がプレゼントしたものだ。

「ユキちゃん。よく来てくれたわね。今日は一人？」

慎一君と一緒にじゃなかったの？」

「ええ、慎一郎さんは今、次回作の打ち合わせでアメリカにいます」

「そう。やっぱり忙しいのね。ユキちゃんも寂しいでしょ」

夕紀は、この質問に、ほのかに笑った。

その寂しげな微笑みに節子は、嫌な予感がした。

「ユキちゃん？」

「今日は、お話があつてきました」

「話？」

「ええ。できれば、高崎さんにも一緒に聞いて頂きたいんですが・・・」

高崎は、夕紀が何を言おうとしているのか、気付いた。

節子がショックを受けるだろう事は予測できた。

出来るだけ、自分がその場において、少しでもやわらげてやりたい。

夕紀のこの言葉に、高崎はすぐさま頷く。

「もちろん、いいよ」

夕紀は、今では、二人の家となった、懐かしい別荘のリビングのソファに、向かい合わせに腰掛けた。

夕紀が座ったすぐ横にクッションが置かれている。

それは、いつもこのソファで慎一郎が寝転びながら台本を読んだりする時に

枕代わりに使っていたクッションだった。

それに右手でそっと触れた後、ギュツと拳を作った。

高崎が、節子の手をそっと握り締めたのを機に、夕紀は口を開いた。

「実は・・・」

慎一郎は、帰りの飛行機の中で、今回の渡米で得た成果を思い起こし、満足感でいっぱいだった。

随所に自分たちの狙いが、反映された。

それは、同行していた白石も同じだったらしく、上機嫌で話しかけてきた。

「シン、今回はいつになくうまくいったな。」

「ああ、日本に帰ったら、すぐに取り掛かるう。頼むぞ」

「任せとけ。でも、叔母さんの目の手術のあたりから、ぐっとおまえ、冴えだしたよな。」

「そうか？いつもだろう」

「いや、その前は最悪だった。

煙草の煙の充満した部屋で、食事もろくにとっていなかったはずだ」

「そうだったか？」

「そうさ。忘れてのか？」

「……いや……」

白石の冷やかし気味の視線を軽く受け流した。

奴が何を言いたいかぐらい分かっている。

確かに、夕紀が自分の前から消えた時は、苛立たしさで一杯で、仕事も手に着かなかった。

白石からの連絡で夕紀を見つけ出し、無理やり叔母の病院へ同行させた。

あの手術を境に、結婚する事に決心がついたのか、本条の仕事の合間に、慎一郎のマンションに来ては、食事を作ってくれるようになった。

穏やかな時を二人で育んでいたと思った矢先、節子の結婚パーティーの時の浩二の告白に、夕紀が自分から離れて浩二の元に
行ってしまうのではないかと恐怖を感じた。

だが、夕紀は自分の手をとった。

これで、大丈夫だ。

この先も、二人の時間を重ねていける。

。そろそろ自分のマンションで一緒に住み始めるのはどうだろうか・・
彼女が夕飯の後片付けをした後に、自分のアパートに帰っていくのが嫌だった。

そして、その後の自分の家が、妙に寒々しいのが気になっていた。

彼女の醸し出す雰囲気は部屋に暖かみを加えていた。

夕紀は、すでに自分の家の一部になっているのだ。自分がいる時には、いつもそこにいるべきだ。

美味しい料理とコーヒー、そして夕紀の心配りに、慎一郎は満足していた。

他の女性なら、目の前をうろろろするだけで、目ざわりだと感じる事も多いのに、

夕紀が楽しそうに家事をしているのをみるのは楽しかった。

じつくりと読書をしているのを邪魔してやりたくなる事もあった。

自分の仲間たちのたわいない話に笑う夕紀の笑顔がより、その場を楽しいものにしていった。

やはり、戻ったら、先に籍だけでも入れよう。

それなら夕紀も越してくる事に文句はないだろう。

この時期に、式やお披露目は時間的に難しい。

白石にも、今は映画を第一に考えて、何事も落ちついてからと釘を刺されている。

いやそれでも、親しい人だけの内輪のパーティなら可能だろうか。

『泊って行けばいい』

何度、この言葉を口にしても夕紀は頷かなかった。
彼女が慎一郎と体を重ねることにためらいを感じているのに、
気づいていた。

慎一郎は、これまでの他の女性との付きあい方を振り返り、
夕紀に対しては随分我慢強いものだ、ため息をつく。

だが、限界だろう。

夕紀の全てを手に入れたい。

「おい、シン。何、トリップしてるんだ。」

「え？・・・いや、別に」

「それより、夕紀ちゃんのご飯が恋しいよな」

「・・・」

「あつちでの脂っこい料理には、もう、うんざりだ。」

早く、彼女の作ったご飯が食べたい。」

白石は、慎一郎の不機嫌さに気付かない。

夕紀はお前たちにご飯を食べさせるために呼んでいるんじゃない！
俺のだ！

白石に向かって叫んでやりたかった。

「何、急に機嫌悪くしてるんだよ」

「別に……」

「それより、おまえ、昨日どこに行ってたんだ？」

「何処だっついていいだろう」

「怪しいよな。いつもなら、ホテルに籠って今回のおさらいを
してるはずなのに」

慎一郎は白石に伝えるつもりはなかったが、
横から吉田が得意そうに話に加わってきた。

「お前が珍しくあの有名なジュエリーのロゴの入った紙袋を抱えて
満面の笑顔で帰ってきたのを知ってるぜ」

「なに？ おまえあの高級ショップに出かけたのか？」

「……」

「俺も、嫁さんから、土産頼まれてたから、言ってくれば一緒に
行ったのに。」

「いままで、そんなとこ興味ないって出かけたことなかった癖に」

「誰に買ったかは、聞かないから、何を買ったかだけでも教えるよ」

「それに、満面の笑顔って何だよ！ 何か企んでいるのか？」

慎一郎は、仲間の言葉に、素知らぬふりをするだけで、答える事は
なかった。

ただ、ジャケットのポケットに入っている小さな箱を愛おしげに握り締めた。

71 (後書き)

とつとつ夕紀が行動を起こしました。

慎一郎、ニヤついている場合か！

このお話、もうしばらく続きます。

よろしければお付き合いください。

慎一郎は、忌々しく、携帯をソファに放り投げた。

「行けません。」

これまでなら、自分が呼べば、夕紀は仕事の都合をやり繰りして、慎一郎のマンションへ来ていたのに、アメリカから帰国してからというものは、断られてばかりだった。

どうしてと問うと、蒸し返したかのように、

【自分はあるあなたの婚約者じゃありませんから】と
すげなく、言い放ち、電話を切られる。

はじめは、又かとうんざりしていたが、今回はかなり頑だった。

白石からの仕事のスケジュールが送られてきたが、
それどころではなかった。

「シン、どうしたんだ。取り掛かろうぜ。
鉄は熱いうちに打ってって言うだろう」

慎一郎は、白石の熱のこもった物いいにもすげなかった。

「お前たちで先に打っておいてくれ。」

「おいおい、頼むから」

「大事な用事があるんだ」

「映画よりもか？」

慎一郎は、白石から問われた言葉にすぐに応えられない。

映画よりも？

映画以上に大切なものなのか？

答えが見つからなかった。

なぜだか、見つけてはいけない気がした。

それでも、白石に『行く』という言葉返せなかった。

今は、夕紀の方を片付けなければ……。

無言のまま電話を切り、ポケットに忍ばせたのものをギュツと握りながら、

夕紀の家に向かった。

「今日は仕事じゃなかったんだ」
「ええ」

この家にも幾度も訪れた。

夕紀の家らしく、飾っている絵にしても、置き物にしても、決して高価ではないかもしれないが、暖かみを感じられる家だ。

リビングで立ちつくしたまま、向かい合ったが、
彼女は自分と目を合わそうとしない。

おかしい……。

「なぜ、家に来ない」
「……」
「仕事じゃないのなら、来いよ」

その言葉に夕紀は首を振る。

「何のために？」

「飯を作りに来てくれてもいいだろう」

「ご飯なら、頼めば誰でも作ってくれるでしょ」

「他人を家に入れたくないんだ。」

「私だって他人でしょ？」

「俺の婚約者だろ？」

夕紀はクスツと笑った。

その笑顔に慎一郎は違和感を感じた。

「婚約者？ 違うわ」

「違う？」

「今までもそうだったけど・・・私は、あなたの婚約者じゃないわ」

「何を言っているんだ！」

「あなたが私と結婚したいのはなぜ？」

「・・・夕紀のご飯が気に入っている」

「美味しいご飯なんて、お金を出せばいくらでも食べれるわ」

「・・・女よけがいる」

「あなたなら喜んでしてくれる人が、すぐに見つかるわ」

目の前の夕紀が、自分の知っている夕紀ではないみたいだ。

慎一郎は戸惑うばかりだ。

だが、こんなことで、怯んではいられない。

「叔母を喜ばせたい。彼女を失望させたくない。

叔母は君を俺の婚約者だと喜んでいいる。

だから、君は俺と結婚……」

慎一郎が言い終わる前に、夕紀は、再び首を振った。

「叔母様は全てを知っているわ」

慎一郎は、ポケットが急に重くなった気がした。

夕紀は何を言ったのだろう。

慎一郎の拳はいつの間にかブルブルと震えていた。

「知っている？ どういう事だ！」

「私が話したの。」

「話した？」

「そうよ。」

「何をだ」

「身代わりの婚約者として、叔母様を訪れたって」

慎一郎は、突然の夕紀の告白に動揺を隠せない。

彼女がそんな行動に出るとは思わなかった。

「何だつて？・・・もう一度言ってみる！」

「あの別荘に行ったのは由紀子の身代わりだつて。

最初から嘘を付く事が分かって行っただつて。

あなたとの結婚はあなたに何の気持ちもないものだつて伝えたわ。」

「よくも・・・そんな事！ 叔母のシヨックを考えなかったのか？」

「考えなかった訳じゃないわ。ずっとそれだけが気がかりだった。

だから叔母様には言えなかっただけ。だから、身代わりをしていたのよ。」

でも、今は高崎さんがいてくれるわ。

叔母様のシヨックは、あの方が癒してくれるわ。」

慎一郎は、今の自分のシヨックは誰が癒してくれるのだろうか

この期に及んで、そんな事を考えた。

こっちの方が、癒してもらいたいぐらいだ。

「だからって……。」

「叔母様は最初は取り乱されたけど、分かってくれたわ」

「……。」

「最後には、せつかく仲良くなれたのだから、これからは友人でいようよ、」

叔母様から言ってくれたわ」

「……。」

「だから、もう婚約者の身代わりはいらないの」

口の中がカラカラで苦しかった。

何か言わなければ。

夕紀を引き留める何かを……。

「これで、私たち、何の関係もなくなっただわ。」

関係がなくなっただ？

慎一郎はその言葉に頭の中が爆発しそうだった。
短くはあったが、二人が重ねてきた時間は何だったのか？
叔母の事だけで二人が繋がっていると彼女は思っていたのだろうか？

「それだけか？ 叔母に白状して許してもらえばそれでいいのか？」
「何が言いたいのか？」

「俺たちが紡いだ時間をそんなに簡単に捨てるのか？」

「紡いだ時間？ ただ、あなたにご飯を作って、言い寄る女性たちからあなたを守った。」

「それだけでしょ？」

「そうじゃないだろう！」

「じゃあ、何だっというの？」

「.....」

「そのほかに私達に何があったっというの？
あなただってそう言っていたはずよ！」

夕紀の言葉に、返す言葉が思いつかない。

自分の気持ちを真正面から見据えるのを逃げるかのように
苦しい思いつきを口にした。

「夕紀だって、俺と結婚すれば楽な楽しい生活が送れるって分かつた
ただろう？」

「楽？」

「俺のマンションやパーティを見ただろ？ 華やかで贅沢な暮らしが
おくれる」

夕紀は、寂しげに慎一郎を見上げる。

「そんなの望んでいないわ」

「望まない？」

「パーティも映画の華やかな世界はかえって私には息苦しいだけ……」

私はあの場所なんて、これっぽちの魅力も感じない。

私はあの時、楽しいなんて思わなかったわ」

「夕紀……」

「あなたがあの世界が女性なら誰でも憧れる場所だと思っている限り、

二人の想いは重ならないわ」

その言葉と同時に、夕紀の頬に涙が伝った。

夕紀に対して、猛烈に腹が立っているはずなのに、

その涙をとめてやりたいと、拭いてやりたいと思った。

そう思った途端、手を伸ばしていた。

慎一郎は堪らず、ヒシと彼女を抱き寄せた。

力いっぱい彼女を胸に掻き抱いた。

なぜ、こんなに自分の胸が痛いのだろう。

これまでも、ひどい奴だと罵られたことも、

付き合っていた女性が他の男にのりかえたこともあった。

すべて、笑ってやり過ごした。

今回のこの事だつて、それぐらいのもだ。
女が一人、自分から去っていく、それだけの事だ。

わかっている。

わかっているが、慎一郎はまるで、嵐の中に放り出された様に
心が揺さぶられてまともを考える事が出来なかった。

こんなに胸がかきむしられるような痛みは、覚えがなかった。

夕紀を腕の中におさめていれば、きつとこの胸の痛みもおさまるはずだ。

夕紀はその痛いぐらいの腕の強さをいつまでも感じていたかった。
この腕が離れた時が、自分たちが離れる時だ。

そう思った途端、自分の体に回っていた腕の感覚がなくなった。
夕紀は、これで終わりだそう思った。

だが、慎一郎は離さなかった。

髪に彼の大きな手を感じ、腰に腕が回った。

唇に彼の唇を感じた。
押しつけられるように、息を継ぐのが難しい、
食べられてしまうかと思うようなキスだった。

いつのまにか、夕紀も彼の背に手を回していた。
離さないでと言わんばかりにしがみついていた。

二人の息遣いだけが聞こえる空間に、慎一郎の携帯が鳴り響く。

ハッと頭を起こし、まだ、腕をお互いの体に回したまま、見つめあった。

携帯は鳴りやまない。

慎一郎は逡巡した末、夕紀の体から腕を離し、
携帯をデニムの後ろポケットから取り出したが、すぐに、電源を切った。

彼女の望む言葉なら分かっている。
でも、口先だけの言葉では彼女が頷く事はないと分かっていた。

そして、どうしても、慎一郎はその言葉を心から口にする事が出来

ない。

それが何なのか、自分には分からないからだ。
夕紀に対して、そんな気持ちのまま口先だけでもその言葉を使いたくなかった。

「夕紀」

慎一郎は、夕紀に右手を差し出した。

この手を取ってくれと願った。

この自分のこの手で、分かってくれと祈った。

あのテラスの時のように、この手に彼女の暖かな手が重なると信じたい。

夕紀はくるりと慎一郎に背を向け、自分を守るかのように両手を体にまわした。

そして、彼に別れの言葉を告げた。

「さようなら」

夕紀の背後で、ドアの閉まる音が響いた。

73 (後書き)

慎一郎、が〜ン！って感じでしょうか？

これぐらい痛い目にあって、当然というべきか……。

お話もう少し続きます。

多くの方に、暑い中訪れていただけて嬉しいです。

お時間があれば、もう少しお付き合い下さい。

あの日から半年がたっていた。

慎一郎とは、あの日以来、会う事も声を聞く事もなかった。

その間、酸素が心臓に入り込んでくるのを拒むかのように、夕紀は、浅い息で過ごしているかのようにだった。

周りの音も、色も、薄い膜が自分にかかっているかのようにぼんやりと感じられる。

原因は分かっている。

だが、夕紀は泣き喚きもせず、たんたんと朝起きて、食事を作り、そして本条の所で、変わらずに働いている。

時間が解決してくれるはずだ。

もう少し、もう少しの我慢と毎日を、静かに、ただ静かに過ごしていた。

ある日、本条がテレビ局から戻るなり、夕紀をソファに促した。

「夕紀ちゃん。でしゃばりたくなかったから今まで言わなかったけ

ど、

そろそろ戻るべきだ」

「戻る？ 本条さん？ 私がどこに戻るって言うのですか？」

「それを僕に言わせるの？」

「……」

「気付いていないの？ 君は最近全然笑っていないよ」

「そんなことないです。」

「嫌、いつ笑った？ それに、最近、何に心を動かされた？」

「テレビを見て笑ってるし、本だって読んでますよ」

「いや、どれも上つ面だろ？」

「……そんな事……」

「じゃ。最近、君が一番心に強く感じた事は何？」

痛みや喜び、怒り。全て誰に、誰と繋がっている？」

夕紀は、答えられなかった。

全て答えは一つだ。

すべて、慎一郎との日々だ。

でも、それを口にする事は夕紀にはできない。

慎一郎との別れは自分で決断した事なのだ。

「夕紀ちゃん、目を覚ませよ。自分の気持ちに素直になれ！」

本条の初めて聞く強い口調に夕紀は驚いた。

「来週の土曜日、いや日付が変わった翌日の日曜日1時。急に放映が決まったドラマがあるんだ。」

「？」

「国枝監督が、映画以外で初めてメガホンを持った作品だ」

「……………」

「必ずそれを見て。いいや、絶対に見るんだ。見なきゃ君は一生後悔するよ」

「本条さんは見られたんですか？」

「ああ、限られたホンの数名の人しか試写は呼ばれなかったのに、彼はあえて、部外者同然の僕を呼んだんだよ。」

「……………」

「どうしてもだかわかる？ 君にどうしても見してほしいからだよ。いや、言いかえれば、君だけに見てほしいからだ。」

「なぜ？」

「それは見れば分かるはずだ。彼は、今手がけている映画を撮りながら、

周りの反対を押し切って、この企画をすすめ、かなり無理をしながら、

完成にこぎつけたそうだ。」

「プロデューサーの白石さんも呆れていたよ。」

何が奴をここまで突き動かしたんだろうって。

そこまでして撮った作品だ。絶対に見るんだ」

穏やかな本条の強い言葉と眼差しに夕紀は頷くしかなかった。

本条の話があった翌日から、テレビの芸能ニュースや

雑誌・新聞の芸能欄でも、一斉解禁かと思われるぐらい

このドラマの事が報道され、かなりの話題になっていた。

【国枝監督の初テレビドラマ。まだ、一部の人が試写は見えていないようですが、

いち早く見れた女性が夢見心地だったという事ですよ】

【映画とは違ったテレビの世界でもやはり、国枝監督の手腕は見事ですね】

【この放映権を得るのに、各局争奪戦だった様ですね】

【これだけ話題で、出来もいいドラマをどうしてゴールデンの時間帯で放映しないのか、疑問ですね。】

【高視聴率、間違いなしです】

【放映はたった1日だけなので、見逃さないように】

【今回は脚本も国枝監督が書かれたそうです】

マスコミの報道は加熱するばかりだ。

改めて彼が注目されている人物だと知らされる。そして、自分との差を痛感させられる。

その日がやってきた。

夕紀は、時間を気にしながら夕食をとり、お風呂に入り、パジャマに着替え、髪のを乾かした。

何度も時計を見る。

遅々として時計の針が進まないように感じる。

カフェオレのはいったマグカップを両手で包み込みながら、
高鳴る胸を抑えられない。

待ち切れず、テレビの前に腰を下ろした。

時間が来た。

ドラマが始まる。

朝一番で、近くのスーパーに行つて食材を買い込み、大急ぎで自分のアパートに戻り料理に取り掛かった。

慎一郎の好きなものを。

慎一郎の顔を想い浮かべながら。

食べてくれるだろうか？

いや、その前に会つてくれるだろうか？

夕紀は不安で時折、止まりそうになる手を鼓舞しながら、動かし続けた。

牛蒡・人参・白菜・油揚げ……

彼は具沢山のお味噌汁が好きだ。

刻みながら、いろいろな彼の表情を思い浮かべる。

水気を切った豆腐と鶏のひき肉、調味料を混ぜ、小判型に形を整え、照り焼きにする為、甘辛いタレを煮詰めていきながら、彼の声を思い出す。

青い野菜が苦手な彼が自分の料理を食べるようになってから、

好物のメニユーに加えられたほうれん草のサラダもタップリ作った。

きんぴらごぼつも彼が好きなピリ辛に仕上げるため、鷹の爪を利用した。

鈍感な女は、男の気持ちの変化に全く気付かない。

二人のすれ違いは、画面を通して、歯痒いばかりだ。

一目瞭然の男の態度でさえも、その気持ちが女にはことごとく伝わらないし、

女の献身的な態度も、それが愛情から来ているものだとは男は気づかない。

夕紀はクッションを抱きしめ、『まさか……』もしかして……そんな思いを時間の経過とともに、胸にドンドンと重ねながら、テレビに釘付けの2時間だった。

そして、ラスト……。

主人公の男がありつたけの想いを伝えて、片手を相手に差し出すシーン。

夕紀は息が止まりそうだった。

叔母の結婚パーティのテラス、そして半年前、この場所で慎一郎が自分に差し出したその手と同じだった。

主人公の男はついに自分のこれまでの想いと葛藤を

まだ、戸惑いの面持ちでその手を見ている女に告げる。

半年前、彼が手を出してきたときは、無言だった。

だが、テレビの中からは、信じられない言葉が聞こえてきた。

『君を愛している。』

君に出会って、この気持ちが自分の中にもあるのだとやっと見つかる事が出来た。

お願いだ。この手をとってくれ。この手に君の愛を乗せてくれ。』

ストレートすぎる愛の言葉に、最後は女が手を震わせながら男の方へ伸ばそうとする。

そこで、ドラマは終わっていた。

夕紀は、胸がつぶれる思いだった。

いつのまにか、涙がとめどなく溢れていた。息をするもの苦しい程だった。

このドラマは、彼からの自分への告白だ。

確かめなければ……。

彼に会わなければ……。

彼の口から、その想いを聞きたい。

そして、自分の気持ちを伝えなければ。

一睡も出来ない。

夜が明けるのが待ち遠しい。

体の中から、彼への想いがほとばしるかのようだ。

今すぐ駆け出して慎一郎に会いに行きたい。

彼に、ありのままの想いを恐れることなく伝えよう。

何度も携帯を取り上げたが、思いなおす。

彼が示してくれたように、夕紀も自分なりの方法で、この想いを伝えたい。

75 (後書き)

ご指摘を頂き誤使用を訂正しました。

慎一郎のマンションのタッチパネルの前にたたずんで、どれくらいたつだろう。

何度、彼の部屋番号のボタンを押そうとしたか。

だんだんと抱えている保冷BAGが手に食い込んで、どんどん重たく感じる。

時折マンションの住人だろう人が、不審な目で夕紀を見ていく。

逃げて帰りたい。

ここまで来ていながらまだ、迷っている自分がいる。

いつもいつも、逃げてばかり。

夕紀は自分の弱さを吐き出すように、何度目ともわからぬ大きな息を吐き出し、

意を決して、部屋番号を押した。

応答がない。

もう一度だけ、もう一度だけ……。

部屋番号を再び押した。

やはり、応答がない。

彼の都合も考えず、意気込んで来たが、留守かもしれない。

自分の切羽詰まった行動を思い出し、自嘲気味な笑いが漏れた。

電話ぐらいすべきだった。

どうかしていた……。

在宅しているとは限らなかったのに……。

夕紀は、小さなため息をつき、自分の勇気が無駄になった事を知り、踵を返そうとした時、機嫌の悪そうな声が聞こえた。

【はこ】

機械を通して、彼の声だとはっきりとわかった。

夕紀は息が止まったかのように、すぐには声が出ない。

【はこ】

再び痺れを切らしたのかのように、より一層機嫌の悪い彼の声が響

いた。

夕紀はその声の余韻が終わらぬうちに、応えた。

「夕紀です」

声が上がっていた。

彼にはつきり聞こえただろうか。

夕紀の名前を言ったのに、何のアクションもなかった。

怒っている？

無理もない。

突然、こんな風に訪れて、もしかしたら自分の思い違いかもしれないのに。

彼にとって、迷惑この上ない事なのかもしれないのに。

そう思っていると、自動ドアが開いた。

彼が自分を部屋に上げてもいいと思ってくれたんだ。

豪華なエントランスのコンシェルジュの視線を浴びながら通り過ぎた。

ぐんぐん上昇するエレベーターの中で、夕紀は酸欠にならないばかりに緊張していた。

しっかりしなきゃ。

BAGを持つ手に力を込める。

自分の心臓の鼓動が痛いほど刻んでいる。

唇が渴いて、何度も噛みしめる。
深呼吸しても息苦しいままだ。

エレベーターが止まり、ドアが開いた。

目の前には、慎一郎が、口をへの字にしてポケットに手を入れ、
不貞腐れた面持ちで立っていた。

その足元の靴がチグハグな事に、本人はおろか、夕紀さえ気が付いていない。

夕紀がエレベーターからぐずぐずと一歩も踏み出せずにいると、ドアが閉まりかける。

慌てて、慎一郎がドアを遮り、夕紀の手首をおもむろに掴み、エレベーターから引つ張り出した。

夕紀は驚いて、慎一郎の顔を見上げた。

お互いの目が合うのは、何日、いや何カ月ぶりだろうか？

何と言えがいい？

彼の機嫌の悪そうな表情に途方にくれた。

やっぱり、怒っている。

自分から離れて行ったくせに、こうやってのこのこ会いに来るなんて……。

昨日のドラマはやはり、自分が良い風に解釈しただけなのだろうか？

夕紀は出来る事なら、このまま帰ってしまいたかったが、慎一郎の手が、自分の手首にかけられたままだ。それに、まだ、自分は何もしていない。何も伝えていない。

慎一郎が機嫌の悪い表情を崩しもせず、口を開いた。

「遅い」

いきなり、何？

「へ？」

「来るのが遅いだろ！」

「遅いって……。」

慎一郎は夕紀の問いには答えず、彼女の手首を握ったまま、歩き始めた。

玄関で靴を脱ぐ間も、手が離される事はなく、

夕紀は靴を脱ごうと足元を見ると、彼が靴を脱ぎ散らかすことにも気にせず、

夕紀を引っ張る。

夕紀は必死で、転ばないように靴を脱ぎ、部屋に上がった。

リビングに入って、やっと慎一郎が夕紀の手を解放した。

夕紀はセンターテーブルに保冷バツクをそつと置き、その重さからやっと解放された。

二人は黙ったまま、向かいあつた。

慎一郎は、一旦顔をそらし天井を仰ぎ見た後、夕紀を見下ろし、彼女を睨むようにして視線を合わせた。

「見たか？」

いきなりだ。

「はい」

「ちゃんと見たんだろうな！」

「見ました」

「それなら、来るのが遅いだろう！」

「？」

急に怒鳴られた。

「来るのが無理なら、電話をしてくるべきだろう！」

「はい？」

「放映が終わったのが、真夜中だったのは分かっている。でも、俺が起きてるのぐらい、分かっていただろう！」

夕紀は慎一郎が言っている意味がわからない。

「夜中だって迎えに行くぐらい何ともないさ」

「あ……」

「朝早くだって、迎えに行けたさ。どうせ眠れなかったんだから！」

「え……」

彼は自分で何を言っているのか分かっているのだろうか？

「こんな時間まで、何してたんだ！
電話ぐらいして来いよ！
夜中だって、早朝だって、すぐに会いたかったのは、声が聞きたかったのは、俺だけか！」

急な話の展開に付いていけず、夕紀は目を大きく見開くしかできない。
夕紀の訳がわからないという表情を見て、慎一郎は齒ぎしりせんばかりに言い放つ。

「あのドラマを見て、俺の気持ちはわかっただろう！」

今や、怒鳴らんばかりの口調だ。

彼は顔を真っ赤にして、バツが悪そうに口をへ字にしている。

「あれでも、夕紀が分からないなら、俺はどうすればいい！
君の足元に膝まづけばいいのか？
それとも、抱えきれないほどの花束を持って乞えればいいのか？」

夕紀は、慎一郎をじっと見つめる。

目に涙が滲んでくるのを止められなかった。

目の前のこの真っ赤な顔をした大男が、愛おしくて仕方なかった。

まるで、中学生、いや下手したら、小学生の少年のようだ。

初めて好きになった女の子に一世一代の告白をしているのだ。

ああ、自分は一生このワンパクな男性に振り回されるのだろう。

でも、それが自分にとっての何よりの幸せであり、彼の傍にいる事が、自分の夢だ。

夕紀はそっと、彼の腰に腕を回し、その胸に頬を寄せた。彼の心臓の鼓動の早さが、雄弁にその気持ちを物語っている。

「遅くなってごめんなさい。

あなたに食べてもらおうと思って、ご飯を作ってたの」

慎一郎は、夕紀の突然の行動に、驚きのあまり身動きが取れずじまつた。

彼女が自分から歩み寄り、彼に触れたのは、これが初めてだった。

じっくりと彼女の言葉を胸に染み込ませた後、

慎一郎も彼女の体に腕を回し、ギュッと抱きしめた。

大事な大事な宝物を一生手放すまいと言わんばかりに、自分の腕の中に囲い込んだ。

夕紀のその言葉で、この行動で、慎一郎は二人の想いが重なったと確信した。

夕紀は慎一郎の大きな手を取り、自分の頬に添えさせて、微笑みな

がから見上げた。

「あなたの手にのりました？」

「ああ、確かに掴んだ」

慎一郎は満足げに大きな深呼吸をひとつつき、ゆっくりと大きな笑みを口元に浮かべ、
言葉を繋げた。

「腹が減ってたんだ。メニューは何？」

夕紀は、その照れくさ気な言葉を受けて、彼の大好物の献立を伝えようと顔を上げた途端、
慎一郎の唇が重なった。

それは、一瞬のうちに、夕紀を夢見心地にさせる愛に溢れたキスだった。

今日も、慎一郎のマンションのリビングで、撮影中の映画について、いつもの男4人が、情熱をぶつけあっている。

「こここの所のセリフをもう一度考え直す」

「おい。シン、今さら何を言い出すんだ」

「この役者、これじゃ、謎解きのヒントを与える役割を果たしてないだろう」

「おいおい、この場面を撮るのにどれほど時間と金を費やしたと思うんだ。」

今さら撮り直すする気か？」

「そんな事問題じゃない。この場面で、この映画がぶち壊した」

プロデューサーの白石が頭を抱えている。

吉田と青木は、いつもの事かと言わんばかりに、ヤレヤレと肩をすくめた。

膠着状態だ。

誰も口を開こうとしない。

甘い香りが漂ってくる。

「ちょうどクッキーが焼き上がったので、気分転換をかねてお茶に

しませんか？

朝からコーヒーばかりだったから、頂き物の黒豆茶があったので入れてみました。」

夕紀がトレイにクッキーと香ばしい黒豆茶をのせてきた。

「そうだな。ちょっと頭を冷やすか。」

慎一郎の言葉に、書類を脇に寄せ、各々がお茶をすすり出す。

「黒豆茶だなんて、うれしいね。」

こんなのシンの家で飲める日が来るなんて思ってもみなかったよな」

「ほんと。こいつの家で飲むといえば、アルコールとインスタントぐらいだったよな」

「いや、ほんと、夕紀ちゃんがこの家に戻ってきてくれて、

俺たち救われたよな」

他の3人が言いたい事を遠慮なく夕紀に話しかける。

夕紀は苦虫を噛んだような顔の慎一郎を見ながら、可笑しそうに笑う。

「いや嘘じゃないって。夕紀ちゃんがない日々は、

ホント、シン、ひどかったんだから」

「確かに。それで、何を思ったか、あのくそ忙しいさなかにドラマなんて言いだして、

とうとう壊れたかと俺は思ったね」

「俺も。あのドラマにはまいった。勘弁してくれって泣きそうだったよ。」

「だけどあれ見てびっくりだったよな。」

「マジであれをシンが撮ったとは思えんかったな」

「・・・どついう意味だよ・・・」

学生時代からの付きあいの遠慮のなさから、

3人は慎一郎にここぞとばかりに追い打ちをかけていく。

「だって、あれ、完全に夕紀ちゃんへの愛の告白だよな。」

公共の電波を使って、よくもぬけぬけと出来るよ」

「マジで、俺、見ていて、顔赤くなったぞ」

「そうそう。知っている奴は絶対に気付くって。」

節子叔母さん、なんか言って来なかったか？」

慎一郎は、嫌そうな顔で呟く。

「・・・別に誰になんと言われたっていいだろう。」

「その顔は、やっぱ、言ってきたんだな？　なんて言われた？」

『馬鹿ね』って言われただろ？」

白石達の暴走は止まらない。

ニヤニヤしながら、つつきだす。

慎一郎は、全てが見透かされているだけに、バツが悪い。

「・・・それよか、何で、あのドラマでお前が顔赤くするんだ。」

「そりゃするさ。学生の中からお前を知ってたんだから。」

「そうそう、女の子に甘い顔見せたことなかった奴が、

最後にあの告白をするとはね〜」

「俺が言った訳じゃない！」

「何言つてんだよ。脚本からお前が書いたじゃないか。お前が言つたも同然なんだよ。」

冷やかしはエスカレートするばかりだ。

「あの熱い熱いどっぶり恋愛物を撮るなんてお前も成長したな〜」

「勝手に言つてる……」

「それにあの男の役者、無名同然の冴えない奴を使ってカモフラージュしたかも

しれんが、女優があれじゃ、夕紀ちゃんを念頭に置いて配役したって知っている者にはバレバレだろう」

あのドラマで一躍時の人となった、主人公の男優は、いまや、誠実な愛を語るキャラとして、いろんなメディアにひっぱりだこで、

次のドラマの主演まで勝ち取っていた。

そして、相手役は、少しぼっちゃり目のホンワカした女優をキャスティングしていた。

その女優も愛されキャラとして、バラエティーに進出したした。

「確かに、あれじゃ分かってくれと言わんばかりだよな」

「俺なんか、一緒に見ていた女房が、

『素敵ね〜。国枝さんつてもっとクールかと思っていただけ、情熱家なのね。』

私もあんな風に言われたかったわ』って

あの後何日も、ちくちくこれ見よがしに言われて、いい迷惑だったよ」

慎一郎の不機嫌さが一層増してくる。

「まあ、でもお前は夕紀ちゃん以外、うまくいくはずないんだから、それを逃さずちゃんと捕まえたつてのは、さすがだよな」というか、かなり手間取つてたというのが事実だがな」

「世界の国枝慎一郎が、情けない限りだ」

他の二人もこの言葉に、頷く。

「夕紀ちゃん、どうしようもない奴だけど、呆れずに傍にいてやってよ」

「そうそう、俺たちの平和の為にも、何があっても我慢してくれ」

少し頬を赤くして、ニコニコ顔で微笑んでいる夕紀の横で、

慎一郎は、面白がる3人に厳しい声で終止符を打つ。

「その辺でもういいだろう。さあ、再開しよう」

慎一郎の言葉に、3人は顔つきが変わった。

夕飯のいい匂いが部屋に漂ってきた。

3人の会話が止まったのを見計らって、夕紀が声をかける。

「慎一郎さん、私、今日はこれで、帰るわ」
「もう、帰るのか？ 夕飯一緒に食べないのか？」
「ええ、これ以上遅くなると、送ってもらわないといけないし。
夕飯、自分たちでよそつて下さいね。」
「送るのぐらいどうつてことないさ。」
「うん。それに、明日の支度もしたいから」

明日は久しぶりに、二人で節子を訪れる事になっている。

「そうか。じゃ、帰るか。」
「うん。まだ、早いから、大丈夫。電車で帰れるわ」
「いや、だめだ。もう、暗い。送るよ」
「でも……」

押し問答の二人に、白石が呆れたように叫ぶ。

「オ、イ、お二人さん。どうでもいいが、そこだけすごく甘いムードなんですけど。」
「嫌なら、見るな」
「同じ部屋にいるんだからそれは無理だろ。シン。
早く送って行けよ。俺達、夕紀ちゃんのご飯、先に頂いているから」

慎一郎はその言葉に頷きながら、車のキーを取り上げる。

「それじゃ、先に食べててくれ。
でも、必ず俺の分は残しておけよ。」

「わかってるよ。でも、おまえ、帰ってくる気あるのか？」

冗談だとは分かっているけど、夕紀は顔が赤くなる。

そんな夕紀を可笑しそうに見ながら慎一郎が3人に返す。

「夕紀次第だ。彼女が離してくれなければ帰ってこれないな。こう見えても、夕紀は情熱的なんだ。その時は鍵はポストに入れておいてくれ」

彼のイジワルぶりは健在だった。

彼女が真っ赤になりながらも吊りあげた目尻に、慎一郎は音がチュツと鳴りそうなキスを落とす。

白石達が悪乗りして『ドラマ以上に熱いね』と冷やかす声が聞こえる。

ますます、夕紀の頬が紅潮する。

夕紀が頬の赤みに手をやりながら訂正しようとする前に、慎一郎が先に3人に聞こえるように口を開いた。

「夕紀にぞっこんなんだ」

夕紀は、慎一郎のからかいの言葉にのけぞりそうになった。ぞっこんって……。

【そんな言葉、今やだれも使わないわ】
そう思いながら、このワンパクな男にひと泡吹かせたくなった。

夕紀はわざと慎一郎が時折見せる、ニヤツとした笑みを口元に浮かべた。

「身代わりがやっと、本命に昇格して嬉しいわ」

慎一郎は、またもや夕紀にやられたといわんばかりに、降参の意を込めて、彼女の腰に腕を回し、自分の目線の位置まで抱き上げた。

「夕紀が身代わりに来てくれて良かった。ありがとう」

慎一郎は満面の笑顔で悪友たちの前だという事も気にする事はなく、唇を重ねてきた。

慎一郎のキスの前に、3人の冷やかす声は、夕紀にはもはや聞こえなかった。

END

78 (最終話) (後書き)

完結です。

長い話にお付き合い頂きありがとうございました。

本当に多くの方々がつたない書き物に訪れて頂き、
いろいろなご感想を寄せて下さり、

「お気に入り」のご登録までして頂けて、

本当にただただ、感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。

番外編 白石、目を見張る く 驚愕のパーティ会場 前編 く (前書き)

ブログでuppしたお話です。

加筆・修正しました。

大筋は変わっていません。

「本編45話」あたりです。

よろしければ、お付き合いください。

番外編 白石、目を見張る（驚愕のパーティ会場 前編）

映画の公開記念パーティ。

そわそわと慎一郎が会場入り口付近に幾度となく視線をやっていた。珍しく、出席者の到着を気にしているようだ。

映画をヒットさせる上で、こういった場が必要だと

常日頃、スタッフを始め、慎一郎にも口を酸っぱくして言い聞かせていたが、

奴はいつも気の乗らない面白くなさそうな顔で、パーティに顔をだす。

それが今日は、会場入りする慎一郎の足取りが軽かったような気がした。

それなのに、今、グラスを片手にしている時も、気持ちここにあらざるな感じで、

さつきから視線を入口付近に行ったり来たりさせている。

その様子を敏感に感じ取り、奴に確かめた。

「おい、シン、何かあるのか？ 誰かまっているのか？」

「何かあって？」

「聞いているのは俺だろ」
「いや、別に」

さりげなさを装っているが、やはり何かあるに違いない。

何か企んでいるような、あの顔つき、あの目つきをしている。

高校の時から悪友とも親友ともいえる、付き合いの中で、
何度かこの顔を見た事があるが、そういう時は、たいていロクな事
はなかった。

水泳の授業中に海パンを脱がされそうになったり、
急に選択教科の場所が変更になったと教えられた教室に行ったら
女子が着替え中で、彼女達から罵詈雑言浴びせられたり、
エイプリルフールには、後輩の男が花束を持って自宅に押し掛けて
きて、
告白されたりもした。

そのすべてをビデオで隠し撮りされ、文化祭にドッキリとばかりに
全校に流され
ひどい目にあわされた。

それを企んでいる時の奴の目はキラキラとしてて、
いつもの斜ハスに構えた、冷めた目とは違ってた。

そんな慎一郎を見るのが好きだった。

そして、奴の撮ったビデオは自分が題材にされ、さらし者にされているはずなのに、馬鹿にされているとは、感じなかった。

そればかりか、自分の姿を見て涙が出るほど笑える、抱腹絶倒の面白さだった。

奴の映像はその頃から見る者を虜にした。

そしてそれを見る度、慎一郎の憎めない性格とその溢れるほどの才能に魅かれていった。

今も同様の、いやそれ以上のワクワクとした目をしている。

やはり白状させなければと思い、問いただそうとした時、慎一郎が何かを見つけたかのように急いで、談笑の輪から抜け出した。

「オイ、どこへ行くんだ」

こっちのいう事など聞こえていない。

夢中になった時の奴の悪い癖だ。

「監督どうしちゃったんですか？」

獲物がいなくなっただと思っただら、今度は自分にしなだれかかってく

る女優が
うっとおしいが、これも仕事と割り切ってにこやかに対応した。

「監督はすぐに戻ってくるさ。それより、この間のテレビドラマ見たよ。良かったよ」

「え〜。本当ですか？ありがとうございます」

そんな話でお茶を濁しながら、視界の端に今、注目の女性を見つけた。

《佐伯由紀子》

テレビ業界内でも敏腕ディレクターと評されている男と腕を組んでいる。

彼女の獲物に近づく能力につくづく脱帽する。

相変わらず、ゴージャスで人目を引く女性だ。

慎一郎が知り合いの監督仲間に頭を下げて映画出演を依頼した新人女優だ。

新人というか、それより先に女優というくりに入れていいのか悩む。

全くのズブのど素人だ。

確か、半年以上前のパーティで知り合ったはず。
その場に自分もいたからよく覚えている。

この素晴らしいスタイルを見てくれと言わんばかりの体にピタッとしたドレスを身につけ、サロンから直行したであろう完璧なメイクの女が、艶然と微笑みながら近づいてきた。

「国枝監督ですよね？」

慎一郎はウンザリしたように、冷やかな視線でその女性を見る。

「そうだけど」

「監督の映画の大ファンなんです。監督の作品は全て見えます。」
「ありがとう」

慎一郎がターゲットだ。

俺の事など見向きもしない。

よくある事だ。

「特に好きなのが、『永遠のラストチャンス』のあのヒロイン、私だったら、」

あの役はあんな風に演じないと思います。」

「ほっ？」
「もつと……」

彼女は慎一郎の視線をものともせず、まっすぐに見つめ返し、自分をプレゼンテーションしている。

野心満々が見え見えだ。

これほど、あからさまなのも珍しい。

慎一郎にとりいって、映画出演がしたいようだ。

仕草や言葉の端々からビンビンに伝わってくるが、慎一郎は気付かぬふりして、口を歪めていた。

ああ、奴の人間観察が始まった。

だが、その女性も馬鹿ではないようだ。
無理だと分かるとすぐに戦法を変えて来た。

周りに寄ってくる女性を視線で威嚇し、慎一郎の横を譲らない。
誰に臆することなく、その横で微笑んでいる。

今度は女性として、慎一郎の隣を狙うようだ。

ある意味いい度胸だ。

素晴らしい根性とでも言っておこう。

歌声を披露しており、会場の耳も目も彼に集まっていた。

まだ、慎一郎は戻って来ない。

どこかで、誰かに捉まったのだろうか？

ぐるりと会場を見渡すと入り口付近で、慎一郎を見つけた。
気づいているのは数人だろう。

驚愕した。

目を疑ったと言っても過言ではない。

小柄な少しポチャツとした女性の手を握って入って来たのだ。
それだけではなく、痴話喧嘩でもしたかのように、
女性が慎一郎を見上げ、慎一郎はそれをなだめるかのように
彼女の頬を指ではじいていた。

信じられない！

そんな、高校生みたいな事を慎一郎がするなんて、
そして、その光景をこんな衆人の中で見るなんて、驚くほかない。

拍手が起こった。

歌手が歌い終わったようだ。

青木と吉田が不思議そうに俺をつつく。

「どうした？ 何、固まってるんだ？」

「今、信じられないもの見た。現実とは思えん……」

「何をだよ」

「言っても信じないと思う」

「言ってみるよ」

「いや、それより自分の目で確かめた方がいい」

顎で慎一郎達二人をさし示す。

吉田と青木が、そちらの方を見て、思わず手に持っていたグラスを落としそうになる。

吉田は驚きのあまり白ワインを手に零していた。

483

慎一郎が赤く頬を染めた彼女を、目尻を下げて覗きこんでいる。

まるで、中学生の坊主が好きな女ん子をからかっているかのようだ。

「まさか……」

「あれ、シンだよな」

二人が信じられないもの最もだ。

俺だって、まだ、信じられない。

その驚きも冷めないうちに、向こうからその女性の手を引きながら、意気揚々と慎一郎がやってくる。

あの得意げな顔は何だ！

これまで、わざとらしい笑顔を張り付けた慎一郎が、しぶしぶエスコートで女性の腰を抱いていたり、腕を組ませたりするのは見た事はある。

だが、手を繋いでいるなんて、初めてだ。

それも、仕事ならまだしも、自分たちが見た事のない、業界人ではないだろう女性と手を繋いでいるのだ。

青木と吉田もまだ、立ち直れていない。顔が引きつっている。

目の前で二人が立ち止まる。俺たちに紹介する為に連れてきたのだ。

驚きの嵐に俺たち3人は飛ばされそうだ。

「紹介するよ。佐伯夕紀さん。叔母の手伝いをしてくれる」

ああ、やっと慎一郎の行動の謎が解けた。

佐伯由紀子との関係は、ギブアンドテイク。

彼女が同性から羨望の眼差しで見られたいと思っている事に慎一郎は最初から気づいていたはずだ。

その上で隣にいさせたのは、すり寄ってくる女性を避けるためだけ。

ただ、それだけの関係だと思っていたのに、ここにきて、

慎一郎が彼女の映画出演に骨を折ってやったと聞いて不思議だった。

七光り的な意味合いで海の物とも山の物とも分からない人間を誰かにすすめるなんて奴がした事が不思議だった。

そんな甘い奴じゃない。

いつもなら、そんな事、相手から匂わされようものなら、バツサリと切るはずなのに。

何かあるとは思ってはいたが、やっと謎が解けた。

佐伯夕紀の為だったのだ。

目の前のこの女性に頼まれたのか、脅かされたのか、そんな事はどうでもいい。

この女性の為に、人に頭を下げる事を慎一郎がしたのだ。

この女性の為に……。

青木と吉田も同じように感じているに違いない。

今、目の前にいる女性に俺たちの視線は釘づけだった。

俺は、その事実を確かめるべく口を開いた。

その後 自信のカケラを探して 1 (前書き)

本編のその後です。

(本編をお読みでない方は、出来れば本編をお読み頂いてからの方が分かりやすいかと思えます)

その後　～自信のカケラを探して　1

夕紀は、廊下の一角に設けられたソファに座り、本条を待つ。

連続ドラマの打ち合わせ中の本条から、大事な資料を忘れたと連絡が入り、

急いで、テレビ局に駆けつけた。

到着した事をロビーからメールし、9階のドラマ制作部に面した廊下にある

このソファで彼がくるのをキョロキョロと視線だけ動かすようにしながら、

座って待つ。

488

少し横には自動販売機が設置されており、時折、テレビ局スタッフが飲み物を買って立ち止まったり、夕紀の横のソファに座って談笑したりするが、

誰も夕紀に注目する者はいない。

本条がやってくるのをぼんやり待っていると、耳に愛しい人の名前が飛び込んできた。

「亀山チーフ、まだ、国枝監督からOKもらえないんですか？」

「ああ、何度も頼んでいるんだが、首を縦に振ってもらえないんだよ」

「視聴者からの問い合わせがおさまるところか、日を追うことに

増えていますよ。」

「分かつているさ。きつとアカデミー賞にノミネートされた影響もあるんだろうな」

いかにも業界人といった感じで、首からテレビ局の社員証を下げたスタッフらしき

ラフな服装の二人組が自動販売機で購入した飲み物を口にしながら、夕紀の後ろのソファセットに腰をおろしていた。

「でも、国枝監督が放映のOK出さないのって珍しいじゃあないですか」

「そうなんだよな」

亀山と呼ばれた男は困ったといった風に顎の下に手を置いた。

「だって、自作映画の再放送なんて、どうぞどうぞ！でしょ。」

それなのにあのドラマに限って絶対にダメだなんておかしいですよ」

「まあ、そうなんだけどな」

「あんな夜中にたった一回きりだなんて、監督のファンに限らず、あれでメジャーになった役者のファンだって黙っちゃいけないでしょ」

「そうだよな」

「なんでチーフ、あんな条件OKしたんですか？」

「いや、まさか、あいつの恋愛ものがあんなにいい出来だとは思ってなかったし、

とにかく独占で放映したかったんだよ。俺がいい返事しなかったら、

きつとよその局にあいつ、話を持って行きそうな勢いだったからな。

「

亀山の向かいの若い男が声を張り上げる。

「何言ってるんですか！ 国枝監督のドラマがだめなはずないでしょ。他の局にとられたくなかったからって、言いなりOKだんて」

「いや、あいつに恋や愛は無縁なんだよ。」

「それは、学生の頃の話でしょ」

「いや、今もそのはずさ。国枝の女性不信は筋金入りだからな。よっぽど何かない限り、そうそう変わらないさ。」

再放送云々なら、後からどうにでも説得できるって思ってたんだがな。

ちよっと考えが甘かったな」

どうも亀山というのは、慎一郎と学生時代の知り合いのようだ。

「そうなんすか。でも、俺の仕入れた情報では、なんでもあのドラマ、

国枝監督の実体験らしいですよ」

「実体験？」

「そう。あのドラマで告白したらしいす」

「告白！……！ アワワ……」

亀山が驚きのあまり、机に置いていたコーヒーを倒している。

「それ、ガセじゃないのか？」

「そうすかね？ まあ、そうかもね。」

相手を見た奴が言つには、
フツーだったって言ってましたからね。」

「フツウ？」

「ええ。 あんなにモテまくって海外の美女からも熱い視線をガンガンおくられている

監督の横にいるにしては、普通すぎるって言ってましたよ」

「普通ねえ」

「だから、その噂も嘘っぽいし、実体験がドラマに直結してるって信憑性もないし、

もしドラマが本当だとしたら、連れている女性がいまいちだから、恥ずかしくて再放送できないんじゃないかって、

意地の悪い奴らは言ってますよ。」

「おいおい、あんまりだな」

夕紀は後ろから聞こえてくる会話に、微動だにできなかった。いや、固まってしまったという方が正しいだろう。

自分の事は良く分かっている。

スタイルといい、容姿といい、普通という表現しか当てはまらない。この業界の人が、自分をそう言うのも無理はないだろう。

小さい頃からそうだった。

クラスでも華やかな目立つグループではなかった。

普通で何が悪い。

開き直りではないが、ずっとそう思ってきた。

普通には普通の幸せがあって、自分にはそれで充分だ。充分だったはずだ。

なのに自分が彼の横にいることにたいして、こんな事を言われてしまふのは、

情けなかった。

そして、慎一郎と出会い、彼の才能とその世界に触れるにつれ、夕紀自身が、己の普通さを思い悩む事がある。

慎一郎の隣に自分がいる事は彼のためにならないのではないかな？
今は、ありのままの自分でいいと思ってくれているが、
そのうち、彼が夕紀の普通に飽きてくるのではないかな？

そして、何よりも彼も周りに群がってくる蝶に気持ちが動いてしま
うのではないかな？

一緒にいる時間が増えていくほど、弱気な夕紀に付け込むように
負の気持ちが積み重なって行く。

そんな自分を変えたくて、負の気持ちに押しつぶされる事のない様に
行動を起こし始めてはいるが、まだ、自信のカケラの一粒もなかつ
た。

ぼんやりしているとトントンと肩を叩かれた。

「お待たせ」

本条が優しい笑顔で自分を見下ろしていた。

その後　く自信のカケラを探して　1（後書き）

見切り発車ですが、少しその後のお話を書けたらと思います。

お気づきになられてお時間のある方、よろしければお付き合いくだ
さい。

その後　～自信のカケラを探して　2

本条は、夕紀からの【着きました】というメールに気付き、打ち合わせが少し横道に逸れたのを機に、会議室を抜け出した。

肝心のメモリーカードを忘れてしまうなんて大失態だ。

夕紀が快く届けてくれることは分かっていたが、彼女も今、一番集中しないといけない時だ。

自動販売機がいくつか並んである少し広くなった一角は、簡単な取材や談笑の場として

利用出来るよう、簡単なソファセットがいくつも置かれている。

夕紀が座っている隣のソファセットには、国枝が赤裸々に夕紀への想いを綴った

あのドラマの担当だった亀山チーフプロデューサーと25・6歳ぐらゐの青年が

コーヒーを片手に何やら話しこんでいた。

近寄るごとに、その二人の会話が聞こえてくる。

国枝の事だ。

それもあのドラマの事だった。

「これでいいですか？」

夕紀は頼まれていたメモリーカードを鞆から出して見せる。

「うん。ごめんね。今、夕紀ちゃんだって忙しいだろうに」

「いいえ。ちょうど気分転換したかったので、良かったです」

先ほどまで、喧々譁々の会議に出ていた本条は夕紀のホンワカとした笑顔に

癒される自分を感じて、横の青年をはじめ、悪意に満ちた見方しかできない奴らに言ってやりたかった。

夕紀のこの笑顔に癒されている慎一郎の幸運さが分かっていない。こんな笑顔がいつも横にある事の貴重さを気づかない奴は思慮の浅い奴だ。

497

亀山達が本条に気付き、立ちあがって傍に寄ってきた。

「やあ。本条さんじゃないですか」

「亀山さん。お久しぶりです」

「今度の連ドラもいい出だしですね。初回は高視聴率だったらしいじゃないですか？」

「そうみたいです。水曜ドラマ班が頑張ってくれていますからね。」

亀山の横にいた青年と本条は面識なく、

彼は興味深げに二人の会話に聞き耳を立てていた。

その様子に気づいた亀山が紹介する。

「こちら脚本家の本条さんだ。こっちはADとして修業中の斉藤。まだまだだが、何でも使ってやって」

亀山がこういうぐらいだ。
きつと、将来性を見込んでいるのだろう。

「斉藤です！ よろしくお願いしまっす！
本条さんって……。去年公開され、レッドリボン賞を受賞した
国枝監督の映画の脚本を書かれた方ですよね」

元気のいい声とその勢いに、本条はニッコリ笑って挨拶した。

「初めまして。」
「俺見ました。すごく感動しました。本当によくできた筋でしたよね」

「ありがとう。あの映画に携われて本当にラッキーでしたよ。」
「それで、国枝監督とはその後も交流はあるんですよね？」

「交流……。？」
「ええ。親しいならお願いしたい事が」
「オイ！ 斉藤！」

亀山があまりの斉藤の図々しさに割って入った。

「チーフ。今はとにかく、外堀埋める作戦でもとらなきゃ、
上からせつつかれてるじゃないですか？」

「おまえなあ。だからと言って、本条さんにまで」
「チーフは甘いつすよ。あ！ すみません。こつちの話で……」

本条は話しの流れの先を読み、この話を打ち切ろうとした。

「それじゃ」

「本条さん。国枝監督に打診してもらえませんか？」

その言葉に、いつも穏やかな本条が一気に不機嫌なオーラを纏った。

その後　　自信のカケラを探して　　

夕紀は今まで聞いた事のない冷たい本条の声に驚いていた。

「何のだい？」

「あのドラマ。　試写には本条さんも呼ばれていたって聞きました。本当に少人数にしか開かれなかったあの試写に、直接関係のないあなたが呼ばれたのが

不思議だつて聞いた事があります。

それだけ仲がいいのなら再放送の後押しをして下さい。

お願いします！　視聴者からの要望がすごいんです。

あのドラマがこのまま、お蔵入りになってしまいうのもったいないと思いますか？」

本条は呆れたようにため息を深くついた。

「俺に頼まれても困るよ。」

「デキとしてはぴか一だったし、国枝監督のあれだけの恋愛ドラマ、めったにお目にかかれないですよ。

脚本家なんだから、本条さんだって、それくらい充分分かっていないはずですよね」

「斉藤！　口を慎め！！！」

あまりにも礼儀を知らないその口調に、本条は不機嫌さを色濃く顔に張り付け、

亀山の怒りを含んだ声音が廊下に響く。

「すみません。うちの若い奴が」

「斉藤君とか言ったね。」

君きみ……この世界でやっていきたいなら、礼儀を弁えたほうがいいよ。」

「斉藤！ 謝れ！」

斉藤はまだ、何か言いたそうだ。

「まだ、何か？」

「すみません。こんなお願い本条さんにするのは可笑しいって俺だつて分かっています」

「そう？ 本当に分かっている？ じゃあ、どうして頼んだりするんだい？」

斉藤は思いを抑えられないように吐き出した。

「俺……。国枝監督の大ファンなんです。」

監督に憧れてこの世界、入りました。

だから……俺……だから……みんなが待ち望んでいる気持ちが一
人一倍分かるんです。

誰にだってあんなドラマが作れるわけがない。

俺が作れるなら、今すぐにでも作ってみんなの望みを叶えたいのに……。

あの人だから、あの人にしか撮れないんです。」

悔しそうに斉藤は唇を噛みしめながら話した。

夕紀は、この彼の想いを後押ししてやれない自分が嫌だった。でも、何か言いたかった。

自分の大事な人をそんな風に見てくれて、熱く伝えてくれる彼に、何か伝えたかった。

「あ……………」

少し低めのおっとりした夕紀の音が、その気まずい沈黙を和ませるように響く。

「素敵ですね。自分の思いを口に出来る情熱って。

そんな情熱を持って仕事に臨んでいるのもすごいです。

いつかみんなが見てみたいっていう作品、きっとあなたなら出来るんでしょね」

夕紀は慎一郎の映画にかける情熱を日々感じているからこそ、目の前の同じような情熱を持ったこの駆け出しのアシスタントディレクターに

感謝とエールを込めて、ニッコリ笑いかけた。

斉藤が夕紀をボォッと見返している事に気づき、

夕紀は差し出がましい事を言ってしまったとバツが悪かった。

「ごめんなさい。偉そうでしたよね」

「……………イヤ。あ……………ありがとう」

頬を紅潮させしどろもどろに礼を言う斉藤を見ながら
本条は、国枝がこの場のいない事に感謝した。

「えっと、あの……君、名」

これ以上目の前の青年が余計な気持ちを持たないように
本条は慌てて斉藤の言葉をかき消すように夕紀に声高に話しかけた。

「さあ。夕紀ちゃん。これ渡しに行つて、食事にいかないか？
おいしい和食の店知っているんだ。どう？」

「家庭料理？」

本条は夕紀の飛びつきにしてやったりと穏やかに笑う。

「そう。創作料理で、参考になるよ。行くだろ？」

「ありがとうございます。ぜひ、お供させてください」

「決まりだね。それじゃ亀山さん、又」

本条が夕紀の手をとり歩きだす。

夕紀は慌てたように驚き、笑いながら二人にペコリと頭下げた。

「亀山チーフ。彼女誰ですか？」

「初めてみる顔だな」

「……本条さんの彼女ですか？」

「さあなあ。おい、落ちたのか？」

「何がですか？」

「あの子にさ」

「……………」

「命短し恋せよ乙女……だな。落ちるのは一瞬だ。若い奴は大いに恋をしろ！」

「チーフ、それ中年の勘ぐりって奴ですよ。

てか…………俺、乙女じゃありませんから」

亀山は斉藤の表情の変化に気づき、ケラケラと笑いながら

紙コップをゴミ箱に捨てその場を離れる。

亀山についていきながら斉藤は、夕紀が去っていった廊下を何度も振り返った。

その後 〱 自信のカケラを探して 4〱 (前書き)

あくまでも個人的趣味の範囲のフィクションです。
それを踏まえてお読みください。

その後　　自信のカケラを探して　4　　

慎一郎は、目の前で媚を売るような笑顔を浮かべ
質問を繰り出してくる女性アナウンサーにウンザリとしながらも、
持てる限りの愛想笑いを口元に張り付け対処していた。
だが、それも我慢限界だった。

頬の筋肉はひきつり、笑顔は強張っているだろう。

アカデミー賞の外国作品賞にノミネートされた途端、
取材攻勢が凄まじかった。

今日1日で何本の取材を受けただろう。

何度、同じ質問・同じ答えを繰り返しただろう。

ラジオ・新聞・雑誌・テレビ番組……。

取材嫌いの慎一郎を思いやり、プロデューサーの白石がこの日とばかりに、詰め込んだのだ。

もちろん、自分達の映画が注目されることはありがたいことだ。

慎一郎は誠意を持ってどの取材にも対応した。

このテレビの情報番組の収録で、今日のスケジュールは終わりだった。

【お疲れさまでした】

A Dの掛け声とともに、やれやれやっとな解放されると胸をなでおろしたとたん、

一緒に取材を受けていた、この映画の主演女優である高岡みなこから相談にのって欲しいと懇願された。

早く上がれたら、久しぶりに夕紀に連絡をとって食事に誘うつもりだったが、

少し切羽詰まった彼女の表情に負けて、二人で局内のレストランへ向かう。

来週にはアカデミー賞授賞式に合わせて、現地入りする予定だった。向こうのエージェントと今後の事を相談する為に慎一郎達は、他の映画関係者より一足早く、渡米する事になっている。

夕紀にも同行しないかと持ちかけたが、《残念だけど》と表情を曇らせながら断ってきた。

慎一郎は、夕紀が最近、時折複雑そうな顔で自分の横にいる事に気付いていたが、何がそうさせるのか思い当らない。

高岡みなこは、道すがら授賞式や、その後に開かれるパーティーについて

興奮気味に話している。

「監督は授賞式後のパーティに誰かを伴われますか？」

「なぜ？」

「エスコートしてくれる人が中々見つからなくて、困っているんです。

監督お願いできませんか？」

「悪いけど、俺の事は当てにしないでほしい」

「あら？ 先約があるんですか？」

「そういう訳じゃないが……他を当たってくれ」

歯切れの悪い慎一郎に高岡が声を落として、聞いてきた。

「噂は本当なんですね」

「噂？」

「あのドラマをきっかけに、婚約したって、今業界内で噂ですよ。その女性むすめを連れて行かれるんですか？」

慎一郎は、思わず舌打ちした。

映画を撮っている間は現場と撮影所、そして編集作業と

世間から隔離されたような生活を送っていたから気付かなかったが、慎一郎の思いもよらないところで、あのドラマが話題に上っていたようだ。

いろんな噂が聞くとともに耳に入ってきた。当たらずとも遠からずと言った所だろう。

だが、自分からは公表するつもりはなかった。

夕紀の事は、完全にプライベートだ。

彼女をさらしものにするつもりなど全くない。

この世界に長く身を置いてみると、些細な事ひとつとっても、良い意味でも、悪い意味でも反応がガンガンかえってくる事を嫌というほど身に試みている。

自分と一緒にいる以上、難しい事は分かっているが、夕紀が無名の悪意に襲われるのをできるだけ避けたい。彼女に負担を強いたくなかった。自分の事で思い悩ませたくない。

高岡の真実を知りたそうなほのめかしには、気づかぬふりをして無視し続けていた。

「大事にしまっているんですね」

「何を？」

「しまっておくのも限りがありますよ」

「・・・分かってるさ」

「まだ、覚悟が出来ていないのかしら？」

口角をあげて、意味ありげに笑う高岡の笑顔を睨みつけた。

その後　～自信のカケラを探して　5～

この会話の流れにそぐわない高岡の意外な言葉に慎一郎は反応した。

「覚悟？　意味がわからないな。　俺といるのにそんなもの必要な
い」

クスクスと高岡の綺麗な声が響く。

「監督。　それって大事な人がいるって認めたも同然ですよ。」

慎一郎は、睨みつけたまま高岡に何が悪いとばかり言い放つ。

「この年なんだ。　それぐらいいてもおかしくないだろ」

「可笑しくないけど……この業界の人じゃなければ、キツ
イでしょうね」

「キツイ？　何がだ」

「だって、監督の隣に立とうとするのは覚悟がいますよ」
「また覚悟か？」

「そうですよ。　今はまだ日本の中だけかもしれませんが、このノ
ミネートで

世界中の有名になりたい、いいえ、すでに有名無名問わず、モデル
や女優達が

監督の隣を狙っているんですものね」

「大袈裟だな」

「そうかしら？　現に今だって、インダビュアールの子アナから

熱い視線おくられていたじゃないですか？」

慎一郎はウンザリと視線を宙にやる。

「監督だって気づいていたでしょ？ そんな女性たちを黙らせるだけの

自信と覚悟がなきゃ、きつとすぐに辛くなるわ」

「そんな事にはならないさ。」

「どうしてですか？」

「俺がちゃんと捕まえていればいいだけの話だ」

「あらあら。自信満々ですね。でも、気をつけた方がいいですよ。」

誰もが監督みたいに、自信がある訳じゃないですから。特に女性は揺れるものですよ」

慎一郎は高岡を《嫌な事言っな》とばかりに睨んだ。

「俺の事はもういいだろう。それで君の相談って？」

「ええ・・・実は、向こうで本格的に演^やろうかと思っっているんです」

「本格的にか・・・」

「ええ。このまま日本にいたんじゃ、たとえハリウッドの映画にお呼びがかかっても

珍しい日本人の役しか回ってきません。

せいぜい時代劇のお姫様か芸者や女忍者位が関の山です」

慎一郎は女優の決意の籠った目を見つめた。

「監督だってそうじゃありませんか？ ハリウッドで認められたいでしょ？」

外国作品じゃなくて、作品賞としてノミネートされたいと思いませんか？」

確かに、ハリウッドでメガホンを握りたいと思わない訳ではない。潤沢な資金で、取り直しや日程を気にせず、気の済むまで映画に向き合いたいと思う事もある。

高岡の野心の籠った力強い目が慎一郎を捉えていた。

より高みに自分を置こうとする事に躊躇いも見せずに挑戦しようとしている目だ。

彼女のその姿勢に共感を覚える。

キリリとした眼差しが眩しいぐらいだ。

目標に向かって進もうとする姿勢は男女を問わず称賛に値する。

高岡は、いかにもと言わんばかりの女としての最上級の姿形をしているが

その心意気は、そこらの男をも圧倒する気概を持っている。

いい女だ。

慎一郎は、純粹にそう思う。

フト視線を流した所に、親密そうに歩いている男女のカップルが目に飛び込んできた。

本条と夕紀

それも手を繋いでいた。

思わず急ぎ足、いや早足になりながら二人の後を追う。

「監督？」

甲高い高岡の声が自分を呼んだが、振り向く事さえしなかった。

二人はエレベーターがくるのをにこやかに会話を交わして待っていた。

エレベーターのドアが開く。

乗り込む二人。

間に合わない。

焦ったように名前を呼ぶ。

「夕紀！」

閉まる直前にそれまで、本条に向けていた視線がこちらを向いた。少し驚いたように目を見開いたと思ったら、スーツとドアが閉まる。

エレベーターが慎一郎を残し、下降していった。

その後　　自信のカケラを探して　　6　　

彼の顔を直に見たのはいつぶりだろうか？

《慎一郎さんってやっぱりかっこいい…………》

親馬鹿ならぬ婚約者馬鹿だわと、二人の繋がった視線をさえぎったエレベーターの光沢あるドアに映った夕紀の口元が少し上がっていた。

- - - - -

自分の名前を呼ばれ、夕紀がその声の方に視線を向けると
慎一郎がなぜか焦った表情を滲ませていた。

映画を撮り終え、やっと落ち着いたと思ったら、公開イベントがはじまり、

諸外国でも封切られ、好評を博しているうちに、アカデミー賞ノミネートと

慎一郎は休む間もなく、次から次へ仕事が湧いてくるようだった。

ゆっくりと二人で過ごす時間もままならず、いつ帰ってきてても心地

いいように
掃除や洗濯をするために、合鍵を使い慎一郎のマンションに定期的に訪れていた。

そのたびに、ビールの空き缶がシンクに伏せられていたり、ベッドが乱れたりしている事で、慎一郎が帰ってきた事を認識するような日々が続いていた。

考えてみれば、想いが繋がってこんな風に仕事モードの入っている彼と
過ごすのははじめてかもしれない。

家で打ち合わせをする場面には何度も遭遇しているが、実際にそれ以外の映画に関わる仕事をする彼の日常生活スタイルに触れるのははじめてだった。

思いのほか、会えない日が続く。

彼も仕事とはいえ、ちゃんと気にかけてくれているようで、無精な彼が公開イベント等で訪れる地方の珍しい風景を写メしてきたり、

『元気か？』とたった一言、いつも同じフレーズだが、苦手なメールが心持増えている事や
思い出したようにかかってくる真夜中の電話に彼の優しさを感じられる。

それぞれもが、国枝慎一郎そのものだった。

絵文字一つ使っていないメール

ぶつきらばつな彼の電話の口調

そして、携帯の画面を通してもはっきりとわかる、
選ぶ風景・カメラアングル、画像一つ見ても、彼の才能が垣間見える。

彼が映画監督として非凡な才能を持っている事は夕紀にだって充分理解している。

テレビをつけると最近では必ず彼の才能への賛辞が述べられている。

最初は嬉しかった。

ただ、純粹に彼への評価がより高まった事が嬉しかった。

これなら、白石も次回作への資金集めがよりやりやすいだろう。
彼らの飛躍に繋がる。

だが、一方でため息が増えていったのも事実だった。

夕紀は慎一郎の部屋を整えていると自分が彼の婚約者ではなく
ハウスキーパーの様だと感じだしたのだ。

掃除して、洗濯して、ご飯を作る。

誰にだって出来る事だ。

彼は自分に傍にいてほしいと言ってくれるが、傍にいて何が出来る？

自分が誇れるのは、婚約者が国枝慎一郎だという事だけ？

夕紀は今まで、見ないように気づかないようにしてきた
負の考えのウネリがグルグルと頭の中で渦巻きはじめ、

夕紀は首を振る。

「待たなくてもいいです。彼も仕事で忙しいだろうし……」

「でも……」

「それに私、すごくお腹空いちゃいました」

「でも、監督すぐに来るよ」

「……今は逢いたくない……です」

本条は先ほどの亀山たちの会話が夕紀の心に重い雲をかけている事に気付いていた。

だからエレベーターへの道ながらも、小学生のように手を繋いで元気づけたつもりだった。

それなのに、あの女優との２ショットだ。

間が悪すぎる。

口角を少し上げた笑顔が寂しそうだった。

夕紀の表情の暗さを見て、今、無理に国枝と逢えとは言えない。

「そうだね。とりあえず腹ごしらえをしよう」

「……はい……」

夕紀を慰めるように肩をポンと叩き、自動ドアを抜け、

夕焼けが沈みネオンが灯り始めている街に二人は姿を消した。

自分と会う時間が少ないのに、家にいないのはどういう事だ！

どこに行っている！

頭の中は、腹の立つ疑問形ばかりがグルグル渦巻く。

9時を過ぎた頃、ようやく夕紀が帰ってきた。

慎一郎がいるのを見て少し驚いたようだったが、

ほんのりと赤い顔で、いつもの笑顔を浮かべていた。

飲んできたようだ。

「来てたんだ？」

「何処に行ってた？」

「本条さんに夕飯をご馳走になったの。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「創作料理のお店で、本条さん行きつけのお店なんだって。

前から行くこうって誘ってもらってたの。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いくつかは家でも作れるかもしれないから、

今度挑戦してみるね。きつと慎一郎さんの口に合うわ」

夕紀の言葉が、とってつけたようないい訳に聞こえる。

「どっして、ロビーで待ってなかったんだ？」

「・・・・・・・・まだ、お仕事途中だと思って」

夕紀は帰ってきたときに慎一郎と顔を合わせたっきり、

「ごそごそと動き回っている。」

「ちよつと座れよ」

「ごめんなさい。少し疲れてるの。今日は、お風呂入って早く寝たいのよ」

「それは帰れつてことか？」

「……………」

「本条さんとは疲れているのに食事に行っておいて、俺には帰れか？」

夕紀はダンマリと俯いている。

慎一郎はフーッと深いため息をついた。

「テレビ局には何の用だったんだ？」

「本条さんの忘れ物を届けに行っただけよ」

「エレベーターホールで……………」

慎一郎は言い淀んだ。

本条と仲良さそうに手を繋いでいたのが脳裏に浮かぶ。

「何？」

「…………エレベーターホールでさあ……………」

ぐずぐずと何か言いたそうにしている慎一郎を訝しく思いながら夕紀の方から

気になっていた事を尋ねた。

「？ 慎一郎さんは今日は、どうしてテレビ局に？」

「俺？ ああ、映画の取材」

「彼女・・・」

「彼女？」

「テレビ局で一緒にいた・・・すごく綺麗ね」

「ああ、高岡みなこか？」

「・・・」

「そうだろう。アジアンビューティってやつだな。」

慎一郎は夕紀の表情の微妙な変化に気づかぬまま、彼女に問われるまま答えた。

その後　～自信のカケラを探して　8～

慎一郎は、撮影現場での高岡の女っぽい外見に似合わない、男勝りな性格と

外見通りの細やかな気づかいを思い出しながら、話し始めた。

「彼女、演技力もあって、勘が好いんだ。

少しのアドバイスで俺が何を要求しているか分かってくれるんだ」

「そう・・・」

「それに女優は扱いにくいのが多いんだが、彼女は性格も良くて、スタッフとのコミュニケーションの取り方もうまくて今回はやりやすかった」

「・・・」

「向上心・探究心、そして一つの物を作ることに對して労力を惜しまない。

どれをとっても、彼女は一流の役者さ」

映画の出来映えを見ても、撮影がうまくいっていた事は充分理解できる。

慎一郎が誉めるのも無理はないだろう。

それでも、夕紀は慎一郎が言葉を重ねることに、ますます気持ちが重くなるのが抑えられない。

「アメリカでも彼女ぐらい美人でスタイルのいい日本女性なら、見

栄えがするらしい。

映画の評判もあって、今度ハリウッドの映画からお声がかかってい
るそうだ。」

「……………そう……………」

「俺たちと先にアメリカに一緒に行つて、さつそく打ち合わせする
らしい。」

相談に乗つてほしいって言われてるんだ」

「……………相談に……………」

「向こうで映画と向き合いたいらしい。まあ、その気持ちは映画
人なら誰だつて

多かれ少なかれ持っているだろう。」

彼女の気持ちは、俺にだつてわかるさ」

「……………」

慎一郎は話が弾まない事にいらだちが湧いてきた。

「夕紀。 どうした？」

「何？」

「俺と話すの、嫌そうだな」

「そんなことないわ。 疲れているだけ」

「それなら、食事に行かず早く帰つてきたらよかつたじゃないか」

「……………」

「俺だつて久しぶりに時間が取れたんだ。 夕紀の料理が食べたか
つたのに。」

夕紀はやっぱりと小さなため息をつく。

「何だよ」

「……今日会えるなんて言っただけじゃない」
「取材が何時に終わるか分からなかったからな」
「……」

慎一郎は久しぶりに会えたというのに、気まずさばかりが二人の間に流れている事に怒りだしたくなってきた。

放っておいたのがよくなかったのだろうか？

ないがしろ
蔑にしたつもりはなかったが、

仕事が忙しく、夕紀の優しに甘えてついつい彼女に連絡を取る事も怠り気味だった。

今の二人の気まずさを解消し、夕紀の柔らかな温もりに包まれたいと慎一郎がその体を引き寄せようと夕紀に手を伸ばした。
夕紀はその手を避けるかのように、するりと体をかわす。

「夕紀？」

「ごめんなさい。本当に疲れているの。今日は帰ってくれませんか？」

「俺といると疲れるのか？」

「そうじゃないわ」

「そういう事だろ！」

「大声出さないで。」

「久しぶりに婚約者に会えたのに、帰れか？」

「だから……」

慎一郎は自分に落ち着けとばかりに、呼吸を整える。

「3日後のアメリカ行き。やっぱり一緒に行かないか？」

「……今は、仕事が忙しくて……。無理だわ。」

「アカデミー賞にノミネートされるなんて、そうそうある事じゃない。」

先に一緒に行けなくても、授賞式だけ来れないか？ 本条さんだつて分かってくれるさ」

「……無理だわ。日本で待つてる。」

慎一郎は急に自分まで疲れを感じ、自分がついた大きなため息が二人の間に横たわる。

それでも夕紀が言葉を発しようとしなかった。

「もういい！ 分かった。無理強いはしない。」

俺の顔を当分見なくて済むんだ。疲れも取れるだろ」

「慎一郎さん……」

「疲れの元は帰るさ。早く寝るよ」

夕紀の言葉も待たずの慎一郎が帰って行く。

その後ろ姿を何も言えず見送ったあと、夕紀はノロノロとお風呂に入った。

温かな湯につかっていると、自分が情けなくて涙が溢れてくる。

慎一郎が悪いわけではない。

高岡を誉めたのだから、彼に意図がある訳じゃない。ただ単に、そう思っているだけだ。

そんな事、分かっている。

テレビ局で耳にした会話。

慎一郎と一緒にいるようになって、ずっと心に引っかかっていた事が、

今日のあの会話で夕紀を雁字搦めにしてしまった。

そしてそれに追い打ちをかけるように見た2ショット。

並んでいる姿は、誰もがホウツと羨望のため息をもらすだろう。

見た目だけではなく、同じ業界にいる者が持つ溢れ出る自信、より高いステージへと昇ろうとする情熱があの二人からも感じられた。

自分の周りにいる人たちがそれぞれに目指す物への情熱が眩しい。そして夕紀は自分に対しての自信の無さが情けなかった。

もっと前向きにならなければ。

頑張ればいいだけだ。

彼の横にいても引け目を感じないように。

だが、今日だけは、自己憐憫に浸ろう。

そして、落ち込んだ心をこの湯に溶かして、ぐっすり眠ろう。

明日からはもっと頑張ろう。

その後　～自信のカケラを探して　～

本条は朝からしきりに時計を気にしている夕紀に気付いていた。

「夕紀ちゃん、今日、何かあるの？」

「え？」

「さつきから、時間を気にしているだろう？」

夕紀は手もとの原稿用紙をじっと見たまま、少し小さめの声を発した。

「彼が今日、アメリカに行くんです」

「国枝監督が？」

「ええ。アカデミー賞の授賞式の為に……。」

「ええ！！！！　それなのに、何で夕紀ちゃんここにいるの？」

「……仕事が……。」

「いや、それは、そうだけで。でも、それとこれとは……。」

「授賞式はまだ少し先だし、今日から行くのは、アメリカのエージエントといるいろ、

打ち合わせがあるからなんです。……私が一緒に行っても仕方ないので……。」

「でも、見送りは？」

「……そんな。。子供じゃあるまいし……海外なんて度々だから見送りなんて……。」

本条は夕紀の様子が少し気になった。

「でも、今回のアメリカ行きは特別だろ？」

「それに……」

「それに？」

「他の人も一緒だから……」

「他の人？ 白石さんたちだろ？ チーム国枝は結束固いからな。

当たり前だと思うけど？ 君もすでにその一員じゃないか？」

「映画の主演女優さんたちも一緒みたいだから、私が行くとお邪魔だと思っんです」

「主演女優って、あの？」

「ええ、高岡みなこさん」

本条は、夕紀が空港へ行かない理由の一番をやっと見つけた気がした。

「夕紀ちゃん。でも、監督は来てほしっと思っててるよ」

「そうかしら？……そんな事ないと思うわ」

「なぜ？」

「だって、喧嘩してしまっただし」

「喧嘩？ いつ？ どうして？」

「テレビ局で会った日」

本条は、【アチャー】と言いながら、手で目を覆う。

まさか、あの日の事をいまだに引きずっているとは。

本条は、一緒に訪れた料亭風の和食の創作料理に夕紀が目を輝かせ、出てくる料理に笑顔で箸を伸ばすのを微笑ましい気持ちで見ている。

夕紀から出てくるのは国枝を思いやる言葉ばかりだ。

『慎一郎さんはこの食材は苦手なんだけど、これなら美味しく食べてもらえるかも』

『ぜひ彼に作ってあげたいからこのレシピが欲しい』

新しい料理を口に運ぶたびに、不規則な生活をしている国枝の体を思いやる

夕紀の思いが溢れた言葉が出てくる。

弱いお酒も少し口にし、今、彼女が取り組んでいる事に話が弾み、前向きな瞳で『お休みなさい』と別れたから、もう大丈夫だと思っていたのだが、

どうも、その後に国枝と何やらあったようだ。

「恋人同士なんだから、喧嘩ぐらいするさ。

それよりもそんな気持ちでいるのはよくないよ。

人生いろいろな事が不意に降ってくる。

気持ちよく《行ってらっしゃい》で送り出すべきだ」

夕紀は本条の言葉に、両親の事故の事を思い出し、ハッと席を立ちあがった。

「そうですね。　そうでした。　本当にその通り。　本条さんの言うとおりだね。

私、行ってもいいですか？　空港に」

「大丈夫さ。　仕事なら、まだ少しの余裕はあるよ。

それにそんな気持ちで仕事に向かっても、いいものは出来ないしね」

「ありがとうございます。　行ってきます」

「ああ。　気をつけてね」

「はい！」

本条は、夕紀の中で全てが解決したとは思っていないが、今回の二人の喧嘩だけは、これで解決かとホッとする。

本条は夕紀を見ていると、長い間会っていない妹を思い出し、つつい世話を焼いてしまう。

夕紀達だけは想いを通わせ続けてほしいと、願ってやまない。

航空会社のカウンターで荷物を預けた後、いつもならさっさと出発ゲートを

越える慎一郎がさつきからチラチラとあたりを気にしているのを白石はニヤニヤしながら眺めていた。

そろそろ、声を掛けてやるか。

「シン。　何きよるきよろしているんだよ。」

「別に、きよるきよるなんてしないさ」

「いや、してるね。　白状しろよ。　夕紀ちゃんを待ってるんだろ。」

「……………待ってない……………」

白石は、目の前で“なんでわかったんだ？”的な顔をしている慎一郎に

呆れてしまふ。

バレバレだろう。

「何で連れて来なかったんだ？」

「夕紀にだって都合があるぞ」

「こんなお祭り騒ぎ、ちよっとやさそつとじゃ味わえないんだぜ。

無理にでも説得しろよ。」

「仕事があるって言うんだから仕方ないだろ！」

「オーオー、逆切れか？」

「でも、本条さんなら分かってくれるだろ。頼めば良かったのに。すぐに休み貰えたはずさ。それぐらい頭、働かなかったのか？」

「……」

「どうした？」

「……ケンカしたんだ……」

「え？ 聞こえなかった。なんて言った？」

「喧嘩したんだよ！」

白石は、慎一郎に対して空いた口がふさがらなかった。

「おまえ。小学生か！」

「何でだよ！」

「大の大人がケンカ別れしたまま長い期間離れる様な事するか？」

「……仲直りするきっかけが見つからなかったんだ」

「また、お前が無理難題、我儘言ったんだろ」

「いや。今回は俺は悪くない。夕紀が何だかわからんが不機嫌だったんだ」

こいつ、何偉そうにしてやがる。

白石は慎一郎が強がりを持っているとしか思えなかった。

「夕紀ちゃんが、訳も分からず怒るはずないだろ」

「俺だって、不思議さ。教えてほしいぐらいだ。夕紀が怒っている訳を」

ヤレヤレと白石は首を振る。

「たとえそうでも、たまには大人の余裕を見せろよ」

「どういう意味だ」

「大きな気持ちで、彼女の気持ちを解ほぐして聞いてやるんだよ。自分が悪くなくても、歩み寄れ」

「やってるだろ！」

「へ？」

「いつも大人の男で彼女を包んでいるだろ！」

白石は心の中で、『この映画馬鹿が！』と怒鳴っていた。

慎一郎は、映画に関しては桁外れの才能を持っているが、

他の事に関しては、どちらかというと我関せずで、見えていない。

特に恋愛に関しては、中学生レベルでさえないかもしれない。

何といっても、夕紀は慎一郎が惚れた初めての女だ。

夕紀の苦勞がしのばれる。

よくこんな奴と一緒にいようと思ったものだ。

「おまえな。夕紀ちゃんに捨てられんようにな。」

「どういう意味だ」

「そのままだよ。もしかしたら、呆れかえっていて、今度帰国したら、『さよなら』のメールが来たりしてな」

「そんな事あるはずないだろ！」

白石は、こんな男に自分の一生を掛けたのかと思うと少々情けなかった。

慎一郎を凝視しているとさっきまで、眉間にしわが寄っていたのが、白石の後ろに視線をやったと思ったら、ゆっくりと口元が緩みだしている。

その視線の先を振り返る。

夕紀が自分達の方へ走ってくるのが見えた。

夕紀は聞いていた飛行機会社の搭乗カウンターを探す。

いた！

遠目でも彼の存在感が伝わってくる。

一緒にいる白石がこつちとばかりに夕紀に手をあげている。

息を切らし、慎一郎の傍まで走った。

大きく深呼吸を二つして、息を整える。

「ごめんなさい。遅くなって。間に合ってよかった」

「夕紀。どうした？　一緒に行けるようになったのか？」

「ううん。それは無理だけど、見送りだけでもと思って」

「そうか。ありがとう」

夕紀は残念そうに笑い、慎一郎が穏やかな顔つきで夕紀を見下ろしている。

白石はそんな二人を見て、自分はこの場所には必要ないと二人に話しかける。

「夕紀ちゃん 見送りありがとう。一緒に行けなくて残念だけど、これでやっとシンの不機嫌さも少しは解消されるよ。」

「慎一郎さん、機嫌悪かったんですか？」

「悪かったも何も、喧嘩したって、落ち込んでたさ」

「落ち込んでなんか……」

バツが悪くなって慎一郎は視線をそらした。

「俺は先に行ってるからな。飛行機には乗り遅れるな。」

間違っても、時間を忘れるような事はするな！ 空港から出ていくのも禁止だからな！」

白石はわざと眉間にしわを寄せて睨みながら言い聞かせるような口調を

心がけていたが、口元が今にも笑いだしそうだ。

慎一郎は、白石が何をほのめかしているのかわかったのか、口元を嫌そうに歪めながら追い払う。

「そんなことするか！ 早く向こうへ行けよ」

「はいはい。じゃあね、夕紀ちゃん。シンにお土産いっぱいねだっておきなよ」

「白石さんも気をつけて。いってらっしゃい」

手をひらひらとさせながら、二人の元を立ち去って行った。

夕紀は白石を笑顔で見送った後、慎一郎に向き直り、優しい表情で口を開く。

「せつかくの機会なのに、一緒に行けなくてごめんなさい」

「いいさ。これが最後までわけじゃないしな。」

俺達の映画がこれからもちよくちよくノミネートされればいいだけさ」

「慎一郎さん……。そうね、これからだってもっともっとノミネートされるわね。」

慎一郎さん達の映画は素晴らしいもの。その時は一緒に行くわ！」

夕紀は慎一郎の穏やかな顔を見て、彼がもう怒っていない事に安堵する。

「この間はごめんなさい」

「？ ああ。夕紀のマンションでの事？ もういいさ。」

「チョットいろいろあつて」

「いろいろつて？」

「……。うん、いろいろはいろいろかな？」

「俺には言えない事？」

「そういう訳じゃないけど。」

「なあ。俺って頼りないか？」

「え？」

「俺には相談したくないか？ それとも相談してもどうしようもないか？」

「俺じゃ、解決できない事か？」

慎一郎が大きな迷い犬の様に感じられ、否定も兼ねて慰めるように笑う。

「そんな事ない！ そんな事ない。でも……。これは私の心の問題だし」

「心の？」

「ええ」

慎一郎は夕紀の言葉に一瞬考え込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2752r/>

身代わりの君

2011年12月26日01時39分発行